

一般国道9号（名和淀江道路）の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ

鳥取県西伯郡名和町

名和中畝遺跡

2005

財団法人 鳥取県教育文化財団
国土交通省 倉吉河川国道事務所

序

近年、鳥取県では妻木晩田遺跡、青谷上寺地遺跡をはじめとする古代の重要な遺跡の発見が相次いでおり、当時の集落の姿や暮らしの様子が具体的に語られるようになりつつあります。

先人が残した素晴らしい遺産を後世に伝承することは、現在に生きる私たちの重要な責務です。

ところで、県内においては、現在、山陰自動車道の整備が着々と進められているところでありますが、当財団は、国土交通省からの委託を受け、この事業に係わる一般国道9号（東伯中山道路・名和淀江道路）の改築に先立つ埋蔵文化財の発掘調査を実施してきました。

そのうち、名和町にある名和中畝遺跡では、古墳時代の竪穴住居跡からかまどがたどき竈形土器が使用時のまま出土するなど、この地域の歴史を解明するための重要な資料を確認することができました。発掘調査終了直前には、現地説明会を開催し多くの方々の御来場をいただいたところですが、このたび、調査結果を報告書としてまとめることができました。

この報告書が、今後、郷土の歴史を解き明かしていく一助となり、埋蔵文化財に対する理解がより深まることを期待しております。

本書をまとめるにあたり、国土交通省倉吉河川国道事務所、地元関係者の方々には、一方ならぬ御指導、御協力を頂きました。心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成17年3月

財団法人 鳥取県教育文化財団
理事長 有田博充

序 文

一般国道9号は、起点の京都府京都市から山口県下関市にいたる、総延長約691kmの幹線道路であり、西日本日本海沿岸地域の産業・経済活動の大動脈として、地域住民の生活と密着し大きな役割を果たしています。

このうち、国土交通省倉吉河川国道事務所は、東伯郡湯梨浜町から米子市（鳥取一島根県境）までの76.6kmを管轄しており、時代の要請に沿った各種の道路整備事業を実施しているところです。

名和淀江道路は、西伯郡名和町から西伯郡大山町にかけての、国道9号の渋滞緩和、荒天時の交通障害の解消、また、災害時の緊急輸送の代替道路確保、などを目的として計画された高規格幹線道路（自動車専用道路）であり、鋭意事業に着手しているところです。

このルートには、多数の埋蔵文化財包蔵地がありますが、鳥取県教育委員会と協議を行い、文化財保護法第57条の3の規定に基づき、鳥取県教育委員会教育長に通知した結果、事前に発掘調査を実施し、記録保存を行うこととなりました。

平成16年度は、「名和中畝遺跡」、「名和飛田遺跡」、「門前上屋敷遺跡」、「門前第2遺跡」の4遺跡について財団法人鳥取県教育文化財団と発掘調査の委託契約を締結し、同埋蔵文化財センターによって発掘調査が行われました。

本書は、上記の「名和中畝遺跡」の調査成果をまとめたものです。この貴重な記録が、文化財に対する認識と理解を深めるため、ならびに、教育及び学術研究のために広く活用されることを願うと同時に、国土交通省の道路事業が、文化財保護に深い関心を持ち、記録保存に努力していることをご理解いただければ幸いと存じます。

事前の協議をはじめ、現地での調査から報告書の編集にいたるまで御尽力いただいた財団法人鳥取県教育文化財団の関係者に対して、心から感謝申し上げます。

平成17年3月

国土交通省 倉吉河川国道事務所
所 長 嘉本 昭夫

例 言

1. 本報告書は、国土交通省倉吉河川国道事務所の委託により、財団法人鳥取県教育文化財団埋蔵文化財センターが「一般国道9号（名和淀江道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査」として平成16年度に実施した調査報告書である。
2. 本報告書に記載した遺跡の所在地、遺跡名、調査面積は、以下のとおりである。

所在地	鳥取県西伯郡名和町大字名和字中畝1083ほか
遺跡名	名和中畝遺跡 ^{なわなかうねいせき}
調査面積	9,340㎡
3. 本報告書における方位は公共座標北を示し、座標値は、世界測地系に準拠した公共座標第V系の値である。また、レベルは海拔標高を表す。
4. 本報告書に掲載した地図は、国土地理院発行の1/25,000地形図「淀江」「御来屋」「船上山」を縮小して使用した。
5. 本発掘調査にあたり出土した鉄関連遺物の分類をたたら研究会委員穴澤義功氏に、土器の胎土分析を岡山理科大学白石純氏に、出土石器の石材鑑定を大山自然公園指導員の会顧問遠藤勝壽氏にお願いし、白石氏には玉稿を賜った。記して感謝いたします。
6. 本報告における出土炭化材樹種同定、遺跡の航空写真撮影、現地における基準点測量および地形測量をそれぞれ業者委託した。出土炭化材樹種同定については、同定結果報告を第4章に掲載している。
7. 遺物の実測・浄書、掲載図面の作成・浄書は文化財主事、調査員および整理作業員が行った。一部の石器実測・浄書は業者に委託した。
8. 現場および遺物の写真撮影は文化財主事、調査員が行った。
9. 本報告書の作成は加藤裕一、木山清貴、日置 智が行い、編集は加藤が担当した。文責は目次および文末に記載している。
10. 発掘調査によって作成された図面、写真などの記録類、および出土遺物などは鳥取県埋蔵文化財センターに保管している。
11. 現地調査および報告書の作成にあたっては上記の方々のほかに、下記の方々から御指導、御助言および御支援いただいた。明記して深謝いたします。（敬称略、順不同）
辻 信広（名和町教育委員会）、佐伯純也（米子市教育文化事業団）

凡 例

1. 遺跡の略称はNNKとした。
2. 遺構図の基本的な縮尺は以下のとおりである。
 竪穴住居・竪穴… 1／60 掘立柱建物… 1／80 土坑・溝… 1／40
3. 本報告書における遺物番号は次のように記す。
 番号のみ：土器・土製品 S：石器 F：鉄製品
4. 挿図、遺構・遺物にはそれぞれ通し番号をつけた。
5. 本文中、挿図中および写真図版の遺物番号は一致する。
6. 遺物実測図のうち須恵器は断面を黒塗りし、それ以外は白抜きで表した。
7. 遺物には遺跡名略称、グリッド名、遺構名、取上げ番号、取上げ年月日を基本的に注記した。
8. 遺物観察表は各挿図に付して掲載した。基本的に法量は、土器は口径・器高を、石器は最大長・最大幅・最大厚・重量を記載した。法量記載における＊は推定復元値、△は現存値を示す。
9. 発掘調査時における遺構名・番号は報告書作成時に一部変更した。新旧の対照は下記に示す。
10. 遺構・遺物の時期決定には主に下記の文献を参照した。

清水真一 1992「因幡・伯耆地域」『弥生土器の様式と編年（山陽・山陰編）』木耳社

大谷晃二 1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集

松井 潔 1997「東の土器、南の土器－山陰東部における弥生時代中期後葉～古墳時代初頭の非在地系土器の動態」『古代吉備』19集

牧本哲雄 1999「古墳時代の土器について」『長瀬高浜遺跡Ⅷ、園第6遺跡』鳥取県教育文化財団

濱田竜彦 2003「大山山麓地域における弥生時代後期土器の編年」『史跡妻木晩田遺跡第4次発掘調査報告書』鳥取県教育委員会

岡野雅則 2004「古墳時代中期後葉から後期の土器について」『茶畑遺跡群 第3分冊 古御堂笹尾山遺跡 古御堂新林遺跡』鳥取県教育文化財団

新旧遺構名対応表

新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名
竪穴住居 1	SI 2	掘立柱建物 6	SB10	土坑 7	SK49	土坑16	SK51
竪穴住居 2	SI 4	掘立柱建物 7	SB 9	土坑 8	SK52	土坑17	SK53
竪穴住居 3	SI 5	竪穴 1	SI 3	土坑 9	SK50	土坑18	SX 1
竪穴住居 4	SI 1	土坑 1	SK67	土坑10	SK55	溝 1	SD 2
掘立柱建物 1	SB 2	土坑 2	SK57	土坑11	SK56	溝 2	SD 3
掘立柱建物 2	SB 7	土坑 3	SK66	土坑12	SK62	溝 3	SD 4
掘立柱建物 3	SB 4	土坑 4	SK60	土坑13	SK59		
掘立柱建物 4	SB 5	土坑 5	SK61	土坑14	SK64		
掘立柱建物 5	SB 6	土坑 6	SK65	土坑15	SK63		

目 次

序	
序文	
例言・凡例	
第1章 調査の経緯と経過	(加藤) 1
第2章 位置と環境	(木山) 3
第3章 調査の内容	6
1. 調査の概要と土層堆積	(加藤) 6
2. 縄文時代の遺構と遺物	11
土坑	(加藤) 11
遺構外出土土器	(加藤) 12
遺構外出土石器	(加藤) 13
3. 弥生時代の遺構と遺物	19
竪穴住居1	(日置) 19
竪穴住居2	(加藤) 23
竪穴住居3	(加藤) 23
4. 古墳時代の遺構と遺物	31
竪穴住居4	(加藤) 31
5. その他の遺構と遺物	32
掘立柱建物	(日置) 33
竪穴	(日置) 35
溝	(木山) 36
土坑	(木山) 39
遺構外出土石器	(加藤) 44
ピット計測表	46
第4章 特 論	49
1. 名和中畝遺跡出土土器胎土分析	白石 純 49
2. 名和中畝遺跡出土炭化材の樹種同定	パリーノ・サーヴェイ株式会社 52
第5章 まとめ	54
1. 調査のまとめ	(加藤) 54
2. 移動式竈について	(加藤) 55

挿 図 目 次

図1 調査地位置	1	図6 調査地土層断面(3)	9
図2 遺跡の分布	5	図7 調査地遺構配置	10
図3 調査前地形およびトレンチ配置	6	図8 土坑1・2・3および出土遺物	11
図4 調査地土層断面(1)	7	図9 遺構外出土土器	12
図5 調査地土層断面(2)	8	図10 グリッド別石器出土量概念図	13

図11	石材および器種別組成図	13	図31	掘立柱建物 5・6	35
図12	石鏃 (1)	14	図32	掘立柱建物 7	36
図13	石鏃 (2)	15	図33	竪穴 1	36
図14	楔形石器、スクレイパー	16	図34	溝 1	37
図15	石核、剥片	17	図35	溝 2・3	37
図16	石匙	18	図36	土坑 4・5	38
図17	弥生時代・古墳時代遺構分布	19	図37	土坑 6・7	39
図18	竪穴住居 1 (1)	20	図38	土坑 8・9・10・11・12・13	40
図19	竪穴住居 1 (2)	21	図39	土坑 14・15	41
図20	竪穴住居 1 出土遺物	22	図40	土坑 16・17・18	43
図21	竪穴住居 2	24	図41	遺構外出土石器 (1)	44
図22	竪穴住居 2 出土遺物	25	図42	遺構外出土石器 (2)	45
図23	竪穴住居 3 (1)	26	図43	遺跡内での時期別の胎土の比較 (K-Ca)	50
図24	竪穴住居 3 (2)	27	図44	遺跡内での時期別の胎土の比較 (Rb-Sr)	51
図25	竪穴住居 3 出土遺物	28	図45	古墳後期土器の器種・焼成別胎土の比較 (K-Ca)	51
図26	竪穴住居 4	29	図46	古墳後期土器の器種・焼成別胎土の比較 (Rb-Sr)	51
図27	竪穴住居 4 出土遺物	30	図47	竪穴住居 4 間取り想定図	54
図28	その他の遺構配置	32	図48	移動式竈部位名称 (近澤1992をもとに作図)	55
図29	掘立柱建物 1・2	33	図49	山陰地域の移動式竈変遷図	56
図30	掘立柱建物 3・4	34			

図版目次

(カラー図版)

- 1-1 調査地周辺の地形 (東から)
- 1-2 調査後調査地全景 (左が北西方向)
- 2 調査地完掘状況 (南から)
- 3-1 竪穴住居 4 遺物出土状況 (南西から)
- 3-2 移動式竈出土状況 (北西から)
- 4-1 竪穴住居 4 完掘状況 (南西から)
- 4-2 竪穴住居 4 竈下焼土検出状況 (北西から)
- 4-3 竪穴住居 4 貼床除去後完掘状況 (南西から)

(図版)

- 1-1 竪穴住居 1 土層断面状況 (南から)
- 1-2 竪穴住居 1 b 完掘状況 (西から)
- 1-3 竪穴住居 1 b P13根石検出状況 (南から)
- 2-1 竪穴住居 1 a 完掘状況 (北西から)
- 2-2 竪穴住居 2 遺物出土状況 (西から)
- 2-3 竪穴住居 2 完掘状況 (西から)
- 3-1 竪穴住居 3 遺物出土状況 (南西から)
- 3-2 竪穴住居 3 炭化材検出状況 (東から)
- 3-3 竪穴住居 3 完掘状況 (西から)
- 4-1 調査地中央部ピット群完掘状況 (南東から)
- 4-2 調査地南側ピット群完掘状況 (北から)
- 5-1 掘立柱建物 1 完掘状況 (北西から)
- 5-2 掘立柱建物 2・3・4 完掘状況 (北から)
- 5-3 掘立柱建物 5 完掘状況 (北から)
- 6-1 掘立柱建物 6 完掘状況 (北から)
- 6-2 掘立柱建物 7 完掘状況 (南東から)
- 6-3 竪穴 1 完掘状況 (南東から)
- 7-1 溝 1 完掘状況 (東から)
- 7-2 溝 2 土層断面状況 (南西から)
- 7-3 溝 3 完掘状況 (西から)
- 8-1 土坑 1・2・3 土層断面状況 (東から)
- 8-2 土坑 2 完掘状況 (東から)
- 8-3 土坑 1 完掘状況 (南東から)
- 8-4 土坑 4 完掘状況 (西から)
- 8-5 土坑 5 完掘状況 (北から)
- 8-6 土坑 6 土層断面状況 (南から)
- 9-1 土坑 7 完掘状況 (東から)
- 9-2 土坑 10・11 完掘状況 (南西から)
- 9-3 土坑 8 土層断面状況 (北から)
- 9-4 土坑 8・9 完掘状況 (北東から)
- 9-5 土坑 12 完掘状況 (西から)
- 9-6 土坑 13 土層断面状況 (東から)
- 10-1 土坑 15 炭化材検出状況 (北から)
- 10-2 土坑 14 土層断面状況 (東から)
- 10-3 土坑 14 完掘状況 (北東から)
- 10-4 土坑 16 底部炭・焼土検出状況 (南から)
- 10-5 土坑 17 底面炭検出状況 (西から)
- 10-6 土坑 18 土層断面状況 (西から)
- 11 竪穴住居 4 出土遺物
- 12-1 竪穴住居 4 出土移動式竈 (1)
- 12-2 竪穴住居 4 出土移動式竈 (2)
- 12-3 竪穴住居 2・4 出土鉄製品
- 12-4 竪穴住居 4 出土鉄製品
- 12-5 竪穴住居 4 出土鉄製品 X線写真
- 13-1 竪穴住居 1 出土土器
- 13-2 竪穴住居 1 出土石器
- 13-3 竪穴住居 2 出土土器
- 13-4 竪穴住居 2 出土石器
- 14-1 竪穴住居 2 出土鉄製品
- 14-2 竪穴住居 2 出土鉄製品 X線写真
- 14-3 竪穴住居 3 出土土器
- 14-4 竪穴住居 3 出土石器
- 14-5 土坑 1・2・3 出土土器
- 15-1 遺構外出土土器
- 15-2 遺構外出土石器 (1)
- 15-3 遺構外出土石器 (2)
- 16 竪穴住居 3 出土炭化材樹種同定顕微鏡写真

第1章 調査の経緯と経過

1. 調査の経緯・経過

一般国道9号は京都市から兵庫県、鳥取県、島根県を通り山口県下関市まで続く総延長691kmの幹線道路である。名和町内での道路建設計画地では多くの埋蔵文化財包蔵地が確認されている。名和町大字名和字中畝に所在する名和中畝遺跡は名和淀江道路におけるインターチェンジ建設予定地に該当し、埋蔵文化財の存在が予測できたため、名和町教育委員会は鳥取県教育委員会文化課との協議により試掘調査を実施した。その結果、遺構・遺物の存在が確認された。これらを受けて、道路設営者である国土交通省倉吉河川国道事務所は文化財保護法第57条の3の規定に基づく発掘の通知を鳥取県教育委員会教育長に提出、財団法人鳥取県教育文化財団に発掘調査を委託し、財団法人鳥取県教育文化財団埋蔵文化財センターが発掘調査を実施することとなった。調査面積は、9,340㎡である。

調査に先立ち、調査前航空写真撮影、地形測量・基準点測量を実施した。4月21日から26日にかけて調査地南側に設定した廃土置場周辺以外の表土剥ぎを行い、4月26日から調査に着手した。調査は調査地北側から南側に向けてトレンチを随時設定して進めた（トレンチ配置、土層堆積の概要については第3章1を参照）。8月19日、20日には、調査地北側の調査が概ね終了したのに併せて調査地南側の表土剥ぎを行い、順次南側の調査にかかった。調査中に発生する掘削土は廃土置場から随時搬出した。調査終了に伴い、10月18日から調査後航空写真撮影、調査後地形測量を実施し、10月27日に調査全工程を終了した。

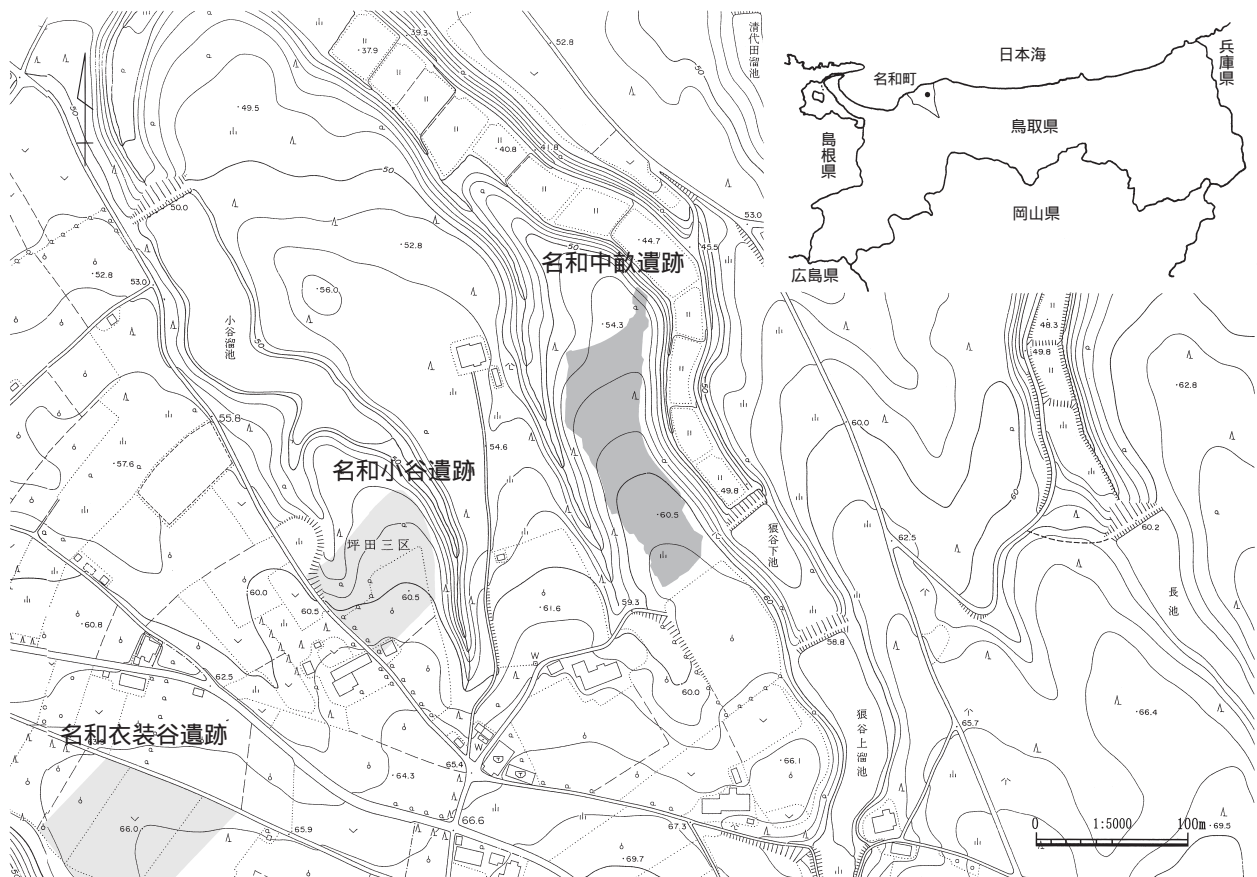


図1 調査地位置

また、10月2日に名和飛田遺跡と合同で現地説明会を開催した。あいにくの雨で天候に恵まれなかったが、40人を超える方々の参加を得ることができた。

(加藤)

2. 調査体制

調査は、以下の体制で実施した。

○調査主体

財団法人鳥取県教育文化財団

理 事 長 有田 博充

事 務 局 長 中村 登

埋蔵文化財センター

所 長 田中 弘道 (兼・県埋蔵文化財センター所長)

次 長 (事 務) 竹内 茂

次 長 (専 門) 加藤 隆昭

調 査 課

課長 (兼次長) 加藤 隆昭

企画調整班長 山根 雅美

文化財主事 大野 哲二、下江 健太

庶 務 課

課長 (兼次長) 竹内 茂

主 幹 福田 高之

事 務 職 員 大川 秋子、谷垣真寿美、山根 美代、小谷 有里

○調査担当 名和調査事務所

所 長 國田 俊雄

班 長 西川 徹

文化財主事 中森 祥、浜田 真人 (門前第2遺跡担当)

森本 倫弘 (門前上屋敷遺跡担当)

加藤 裕一、木山 清貴 (名和中畝遺跡担当)

北 浩明 (名和飛田遺跡担当)

調 査 員 湯川 善一 (門前第2遺跡担当)

日置 智 (名和中畝遺跡担当)

三木 雅子 (名和飛田遺跡担当)

調 査 補 助 員 遠藤万須美、中橋 智明、秦 美香、山本 宗昭

事 務 補 助 員 金田 かおる

○調査指導 鳥取県教育委員会事務局文化課

○調査協力 名和町教育委員会

第2章 位置と環境

1. 地理的環境

名和町は鳥取県の西部、米子市の東方約20kmに位置し、東は中山町、南西は大山町に接している。北は日本海に臨み、北北西約70km先に位置する隠岐島を望む大山の裾野地帯にある。大山を水源とする真子川・名和川・阿弥陀川が北流して、日本海に注いでいる。名和町域の地形は弥山などから噴出した名和火砕流、弥山火砕流などを基盤とする。西部は阿弥陀川によって形成された県下最大級の阿弥陀川扇状地が広がる。東部は火山台地が発達し、真子川などの河川と、無数に派生する谷によって台地・丘陵・段丘が開削されている。いくつかの台地は広く緩やかな傾斜が続き、名和中畝遺跡はこのような台地上に立地している。

2. 歴史的環境

旧石器時代～縄文時代

旧石器時代は、門前第2遺跡（西畝地区）で、2万5千年以上前の地層から黒曜石製のナイフ形石器を主体とする石器群が確認されている。ほかに名和小谷遺跡、押平尾無遺跡^{おしなら}で、黒曜石製石器が出土している。

縄文時代は、草創期の有舌尖頭器が、下大山第6遺跡、陣構第3遺跡で出土している。早期は、門前第2遺跡（菖蒲田地区）で配石遺構群と押型文土器、古御堂金蔵ヶ平遺跡^{こみどうかなくらがなる}、上大山第1遺跡^{すみづか}、角塚遺跡、高田第4遺跡、高田第10遺跡で押型文土器、茶畑山道遺跡で撚糸文土器が出土している。名和飛田遺跡では、早期末の隆帯文土器や黒曜石製石器をはじめとする多量の遺物が出土している。前期は大山町の中高遺跡、中期は名和衣装谷遺跡、中山町の細工塚遺跡で土坑や遺物が出土している。後期は、古御堂遺跡や名和飛田遺跡、南川遺跡がある。南川遺跡では、西日本では珍しい五角形の石組炉をもつ後期初頭の住居跡が確認されている。晩期は、大塚第3遺跡、高田第10遺跡^{もずら}、文殊領屋敷遺跡などがある。

弥生時代

前期は、大塚岩田遺跡で環濠らしきV字状の断面をもつ溝が検出されている。名和飛田遺跡、茶畑山道遺跡で土器片が出土している。中期は、茶畑山道遺跡で独立棟持柱付掘立柱建物跡や線刻絵画土器が検出されており、中期中葉～後葉頃にかけて、この地域の拠点集落であったと推測されている。南側に位置する茶畑六反田遺跡で竪穴住居跡と小型の掘立柱建物跡、蛇ノ川を隔て東側に位置する茶畑第1遺跡で竪穴住居跡や独立棟持柱をもつ大型掘立柱建物跡、南西側に位置する押平弘法堂遺跡で土壙墓9基が検出されている。北東に約2km離れた名和飛田遺跡では竪穴住居跡とシカの線刻絵画土器が確認されている。後期は、大塚塚根遺跡、押平尾無遺跡、東高田遺跡、茶畑第2遺跡、茶畑六反田遺跡、名和飛田遺跡、大山町の塚田遺跡で集落跡が確認されている。東高田遺跡と名和飛田遺跡で、竪穴住居跡からガラス玉が出土している。大山町から淀江町にかけての丘陵上に位置する妻木晩田遺跡では、多数の竪穴住居跡のほか、四隅突出型墳丘墓や環濠などが検出されている。終末期から古墳時代前期にかけて、茶畑第1遺跡、押平尾無遺跡、古御堂笹尾山遺跡で、竪穴住居跡が確認されている。

古墳時代

ハンボ塚古墳は、径33mを測る中期後半の円墳で、円筒埴輪や人物形や水鳥形の形象埴輪が出土している。中山町の高塚古墳も同時期である。後期の古墳群として、茶畑古墳群、高田古墳群、門前古墳群、富長山村古墳群、坪田古墳群、豊成古墳群などがある。押平尾無遺跡で前・中期の竪穴住居跡、大塚塚根遺跡と古御堂笹尾山遺跡で中～後期の竪穴住居跡、名和飛田遺跡で中期末の竪穴住居跡、後期末の竪穴住居跡と大型の掘立柱建物跡、彩色記号の施された須恵器が確認されている。

奈良～平安時代

奈良時代は、高田原廃寺で乱石積基壇や溝が検出され、淀江町の上淀廃寺跡と同型式の単弁十二葉蓮華文の軒丸瓦が出土している。阿弥陀川河口近くの大塚屋敷遺跡は、7世紀後半から8世紀にかけての掘立柱建物跡が検出されており、倉庫群と推測されている。生産遺跡では、栃原窯跡で穴窯跡を確認している。

平安時代は、茶畑六反田遺跡で緑釉陶器や墨書土器を含む条里区画とみられる溝が検出されている。主軸はほぼ南北方向をとる。また、小規模な区画の水田跡が確認されている。名和乙ヶ谷遺跡で鉄滓と鉄生産に関係すると推測される道路跡、名和衣装谷遺跡で大型の掘立柱建物跡と緑釉陶器や灰釉陶器を検出している。生産遺跡では、上寺谷遺跡で製鉄炉跡を確認している。

鎌倉～室町時代

茶畑六反田遺跡、文殊領屋敷遺跡、押平弘法堂遺跡は、いずれも鎌倉時代後半に集落が廃絶したと考えられる。その後形成されたと思われる耕作痕跡が茶畑六反田遺跡や文殊領屋敷遺跡で検出しており、集落から畑作地へ土地利用の変換があったことが推測されている。押平弘法堂遺跡で掘立柱建物跡のほか土壇墓から青磁皿が出土している。門前上屋敷遺跡では、堀と推測される大溝が検出されている。

名和町には元弘3（1333）年、隠岐島を脱出した後醍醐天皇を迎えた名和長年ゆかりとされる旧跡が多数存在するが、考古学的にその事を裏付ける遺跡は今のところ確認されていない。しかし、名和氏とつながりのあった荒松氏によって築かれたという伝承のある富長城跡や長野城跡が残っている。門前礎石群で礎石建物跡を検出、白磁・青磁・染付などが出土しており、中世以降の寺院跡の可能性が指摘されている。浜ノ坂遺跡で室町期とみられる和鏡が土壇墓に副葬されている。

近世以降

寛永9（1632）年に岡山藩主であった池田光仲が鳥取藩主となる。御来屋は伯耆街道の宿駅、藩の運上米の積出港として重要な位置を占め、汗入郡の中心地であった。明治35年、鉄道が境～御来屋間を結ぶ。昭和29年に光徳村、御来屋村、名和村、庄内村が合併し、今日の名和町となった。さらに、2005年3月には中山町、大山町と3町合併し、新しい町大山町として歴史を歩みだそうとしている。

（木山）

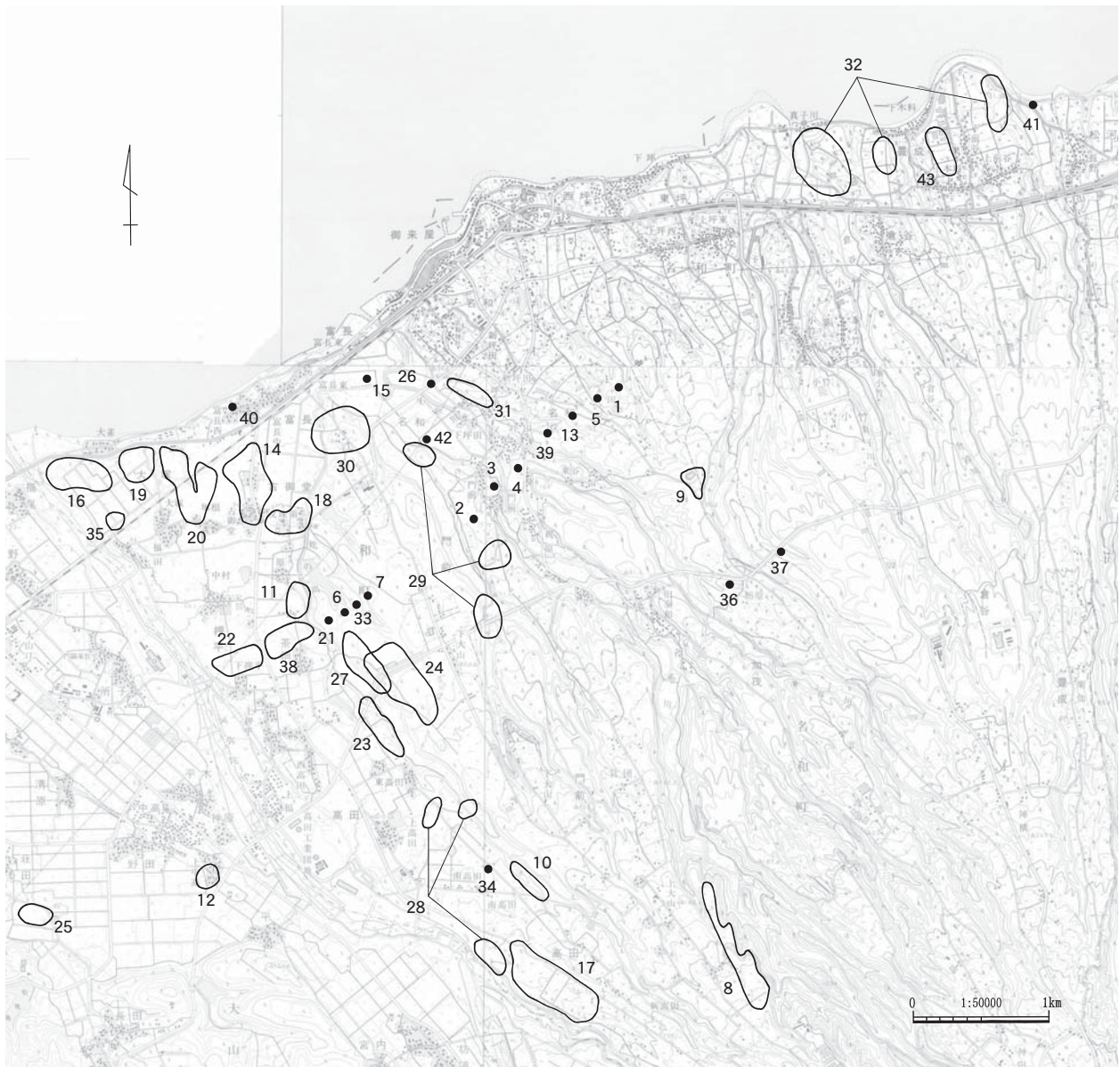


図2 遺跡の分布

No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	名和中畝遺跡	12	中高遺跡	23	東高田遺跡	34	高田原廃寺
2	門前第2遺跡	13	名和衣装谷遺跡	24	茶畑第2遺跡	35	大塚屋敷遺跡
3	門前上屋敷遺跡	14	古御堂遺跡	25	塚田遺跡	36	栃原窯跡
4	名和飛田遺跡	15	南川遺跡	26	ハンボ塚古墳	37	上寺谷遺跡
5	名和小谷遺跡	16	大塚第3遺跡	27	茶畑古墳群	38	茶畑六反田遺跡
6	押平尾無遺跡	17	高田第10遺跡	28	高田古墳群	39	名和乙ヶ谷遺跡
7	古御堂金蔵ヶ平遺跡	18	文殊領屋敷遺跡	29	門前古墳群	40	富長城跡
8	上大山第1遺跡	19	大塚岩田遺跡	30	富長山村古墳群	41	長野城跡
9	角塚遺跡	20	大塚塚根遺跡	31	坪田古墳群	42	門前礎石群
10	高田第4遺跡	21	茶畑第1遺跡	32	豊成古墳群	43	浜ノ坂遺跡
11	茶畑山道遺跡	22	押平弘法堂遺跡	33	古御堂笹尾山遺跡		

【参考文献】

名和町誌編纂委員会 1978『名和町誌』

名和町教育委員会 2003『押平弘法堂遺跡』名和町埋蔵文化財発掘調査報告書第32集

鳥取県埋蔵文化財センター 1986『鳥取県の古墳』

鳥取県埋蔵文化財センター 1988『旧石器・縄文時代の鳥取県』

鳥取県埋蔵文化財センター 1989『歴史時代の鳥取県』

竹内理三ほか 1982『角川日本地名大辞典31 鳥取県』鳥取県角川書店

第3章 調査の内容

1. 調査の概要と土層堆積 (図3～7)

調査地は、大山より派生し日本海側へ放射状にのびる低丘陵上に位置する。丘陵上の平坦部は北方向へゆるやかに傾斜しており、標高は調査前で南側が概ね62m、北側が55mを測る。ただし調査地北半は削平を受けていることが窺える。丘陵斜面部は北東部・西側が調査範囲に含まれている。表土剥ぎ実施前、調査地中央部北寄りに平面形がコの字状を呈する溝を確認した (図3・7)。コの字部分の長辺は約38m、短辺は約28mで、溝の幅は約2.5m、深さは約30～60cmを測る。表土が溝を埋めていることから古い時期のものではないようである。近隣に住む方によると、明治期頃当地は畑地として利用していたとのことで、その頃に掘削されたものかもしれない。表土剥ぎ完了後、図3のようにトレンチを設定し、主要な土層堆積をⅠ～Ⅸ層に分層した (図4～6)。以下、各層堆積状況の概要を述べる。

調査地には樹木が繁茂していたため、根による攪乱を著しく受けていた。表土下に堆積するⅠ層 (にぶい褐色土：Hue10YR 5 / 3) 上から掘り込まれる遺構の存在は想定できたが、土壌化が進行しており、遺構検出が困難であった。そのため遺構検出はⅠ層下のⅡ層 (黄橙色土：Hue10YR 7 / 8)、Ⅲ層 (明黄褐色土：Hue10YR 6 / 6)、Ⅴ層 (黄橙色土：Hue7.5YR 7 / 8) 上面において行った。しかしⅡ層・Ⅲ層は調査地中央部付近で部分的な堆積が認められるにとどまり (図7)、調査地北側・南側や丘陵縁辺部は表土及びⅠ層直下が基盤層であるⅤ層となる。そのため遺構の多くがⅤ層上面で

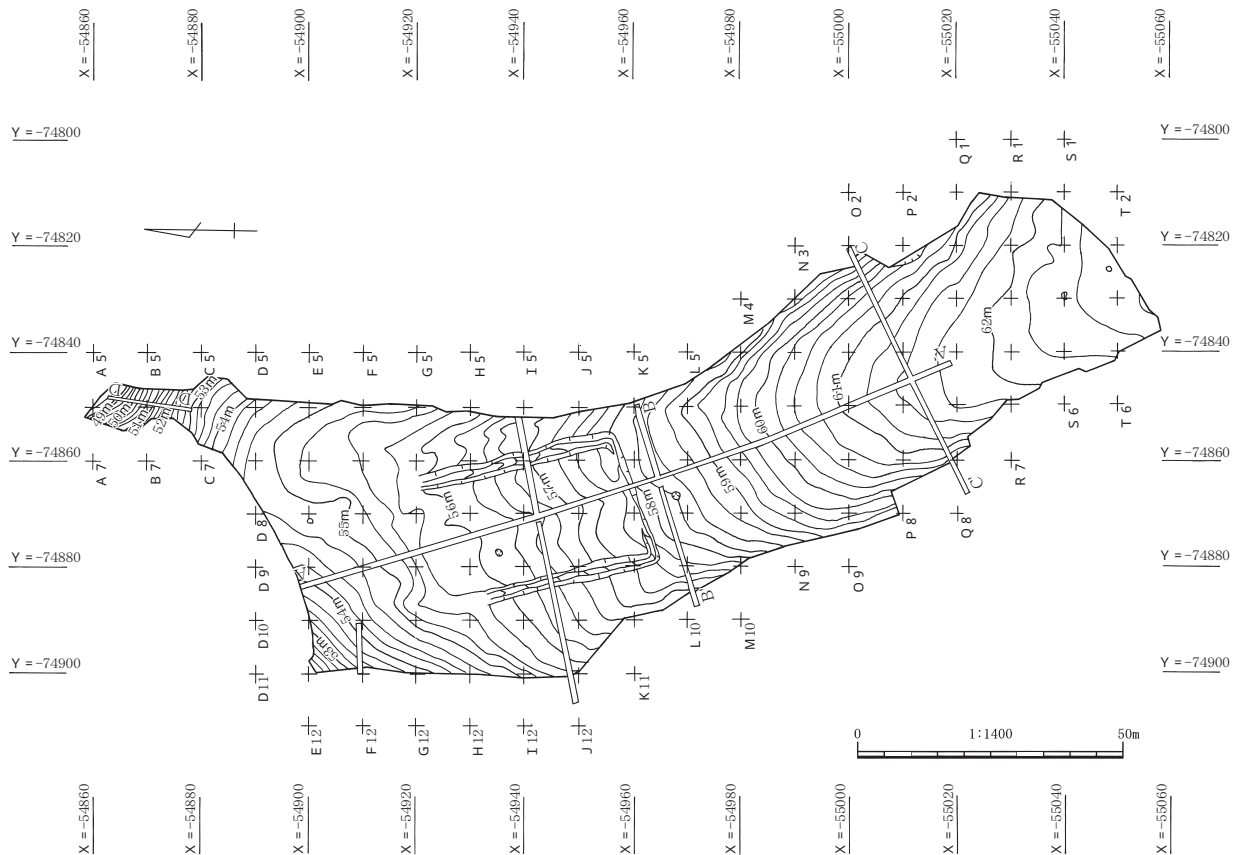


図3 調査前地形およびトレンチ配置

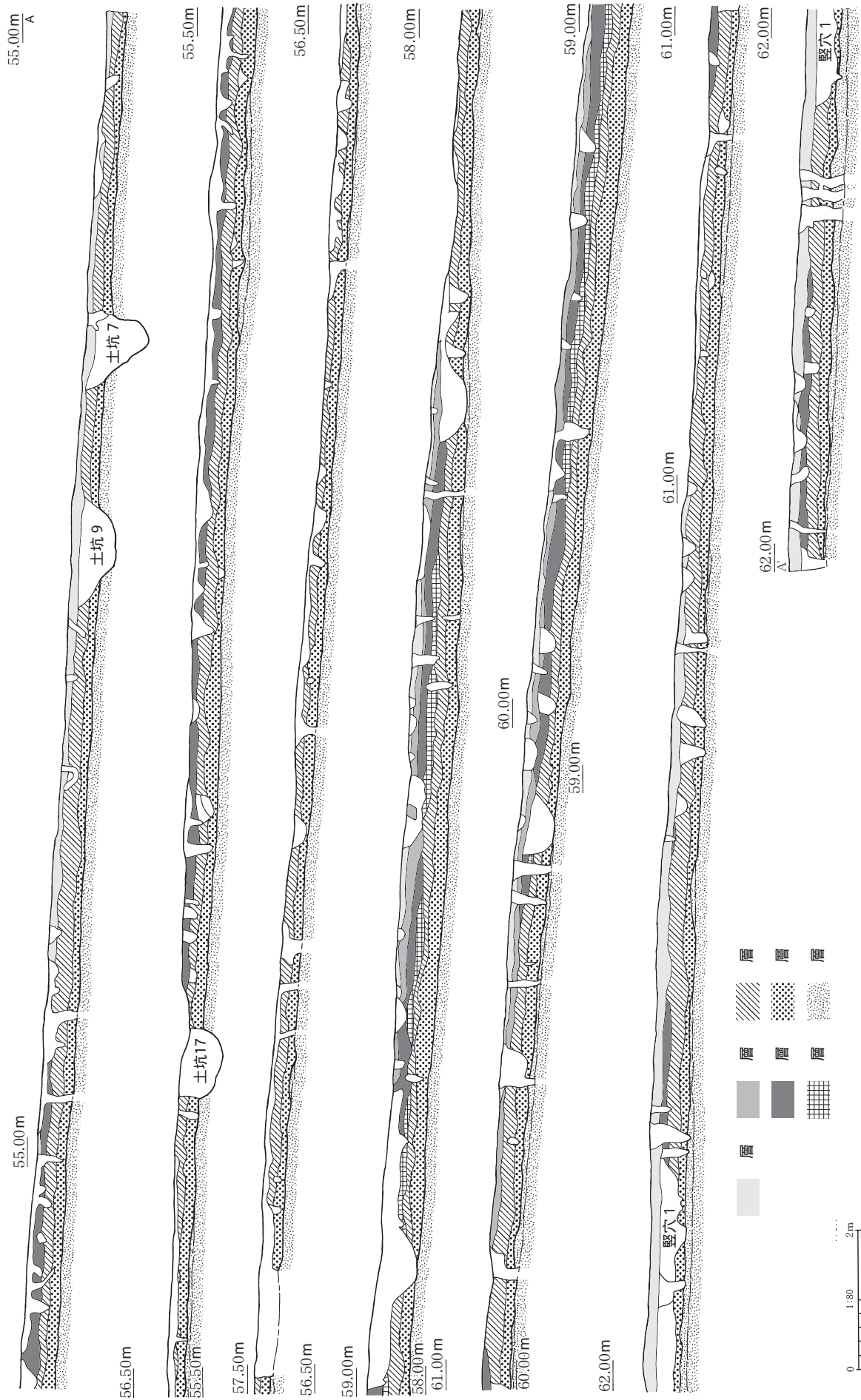


図4 調査地土層断面 (1)

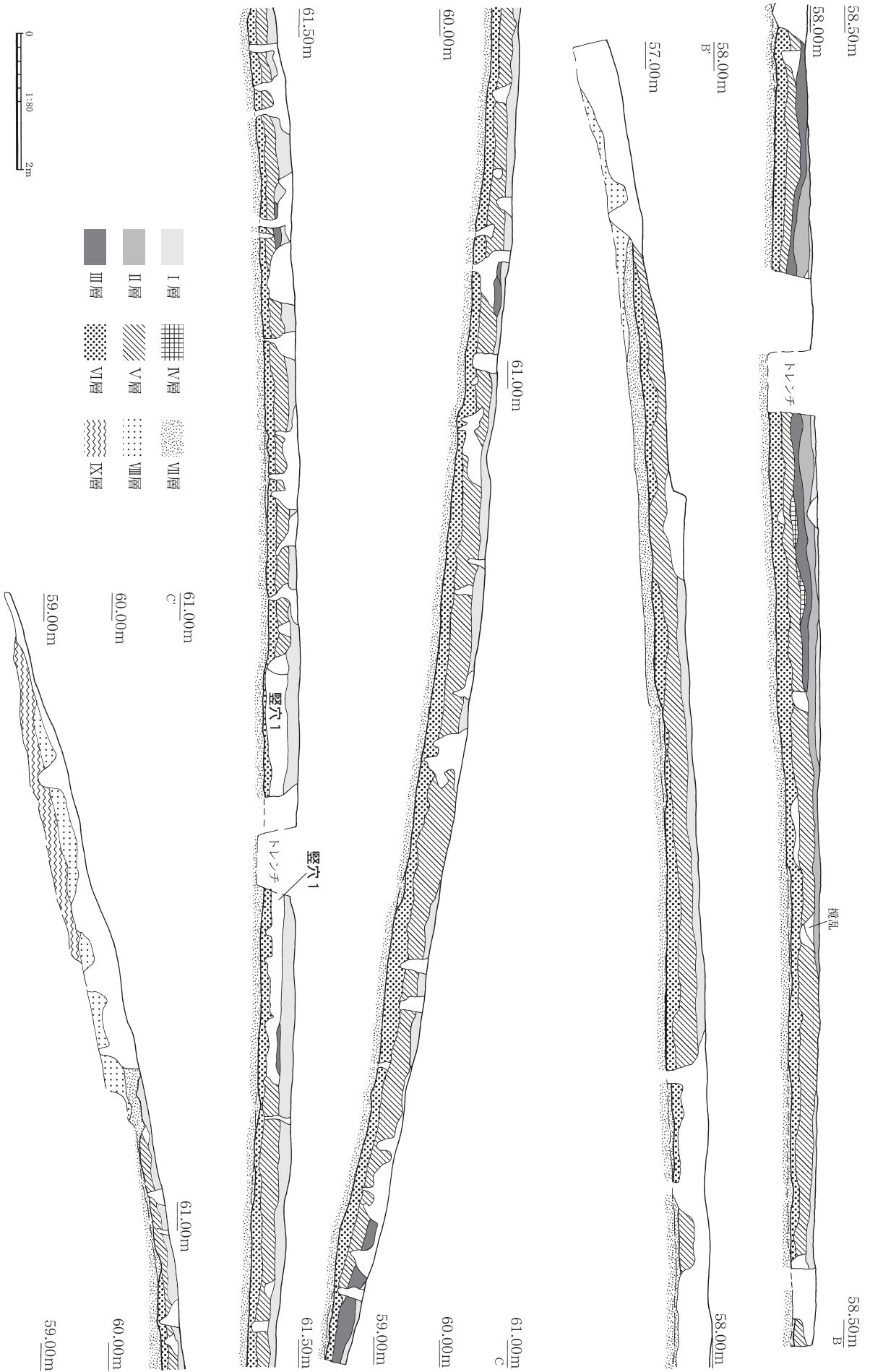


図5 調査地土層断面 (2)

の検出となり、遺構の層位的な検討が十分にできなかった。ピット等遺構埋土の土色は黒褐色、灰褐色、明褐色、黄褐色に大別されるが、時期との対応関係ははっきりしない。IV層（橙色土：Hue7.5YR 7 / 6）はIII層・V層間に堆積が認められたが、面的な広がりほとんど無かった。

遺物の出土量は全体的に希薄で、表土・攪乱土、I層からの出土がほとんどを占める。II・III・IV層中からは微量の土器小片、黒曜石・安山岩製石器片が出土した。樹木の根による攪乱や土壌化の進行もあり、層位毎の遺物相の把握ができなかった。出土土器の主な時期は縄文早期～中期、弥生時代終末期、古墳時代後期であり、縄文期と考えられる土坑や弥生時代終末期・古墳時代後期の竪穴住居が確認されていることから、本来は各時期の遺構面が存在したと考えられる。緩傾斜地とはいえ、土砂の流失が顕著であったのだろう。調査地北東部斜面に設定したトレンチ（図6）では、黒褐色系のクロボクと思われる堆積（図6：②～④層）を確認した。竪穴住居埋土の最上層と類似することから、丘陵上から流出し堆積したものと思われるが、出土遺物は無く詳細は不明である。

V層以下は無遺物であったため基盤層と判断した。V層は黄橙色を呈するローム層で、斜面部下位を除き調査地ほぼ全域に堆積する。VI層（黄色土：Hue2.5YR 8 / 6）はしまりが少なく、始良丹沢火山灰（以下ATと略す）ブロックを包含する。ATブロックの包含量が齊一でないため、再堆積層の可能性もある。その下のVII層（浅黄橙色土：Hue7.5YR 8 / 4）は乳白色を呈するローム層で、名和町の門前第2遺跡（西畝地区）における試掘調査において当該層中から後期旧石器が確認されているが、本遺跡での出土はない。VII層より下位のVIII層（橙色土：Hue7.5YR 6 / 8）・IX層（橙色土：Hue7.5YR 8 / 6）もローム層で、丘陵斜面部下位で確認した。IX層は小礫が混じる。その下はいわゆる御来屋礫層で、固く凝結している。約10万年前の河川堆積層と考えられている。

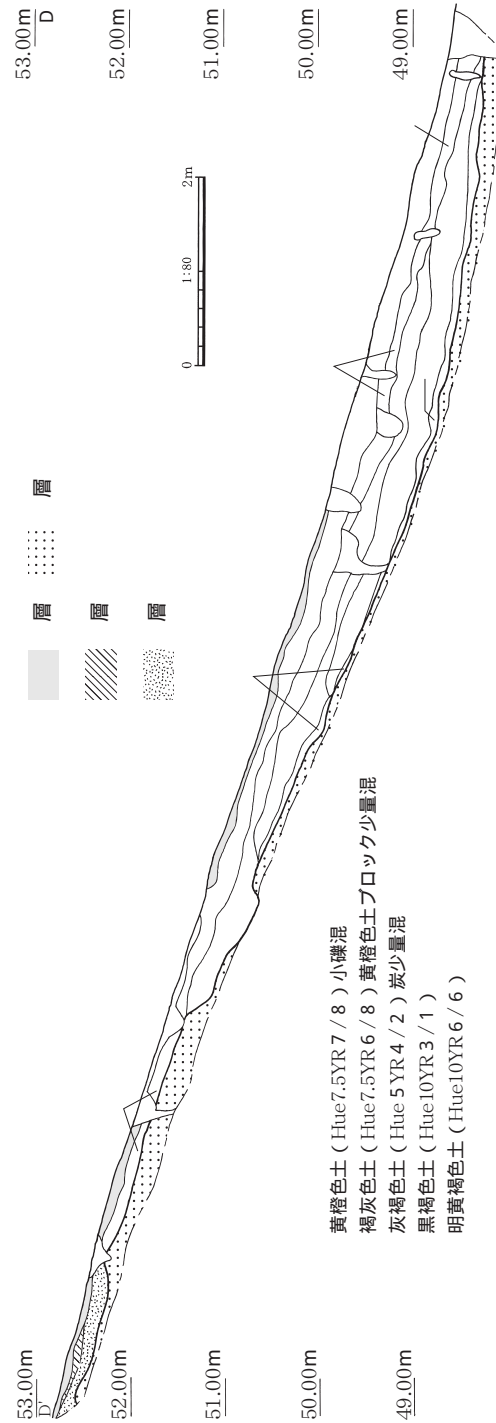


図6 調査地土層断面(3)

(加藤)

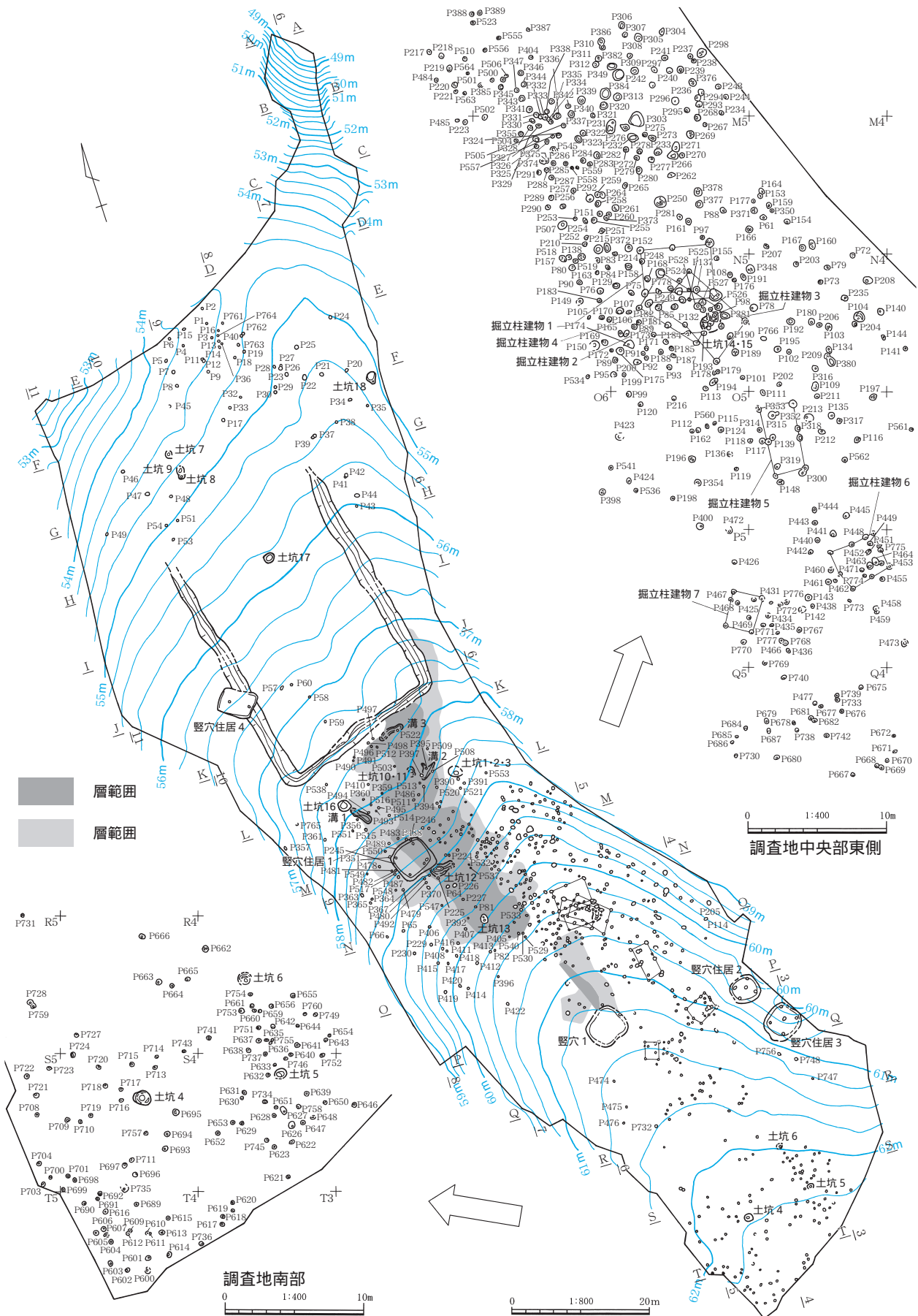


図7 調査地遺構配置

2. 縄文時代の遺構と遺物

本遺跡では表土・攪乱土中や包含層中より縄文土器片、黒曜石・安山岩製石器が出土しているが、当該期の遺構と想定できるのは土坑3基に留まる。

(加藤)

土坑1・2・3 (図7、8 図版8-1・2・3、14-5)

K6グリッドに位置しI層下のV層上面において検出した。3基の土坑が重複しており、土層断面での切り合い関係の観察から、古い方より1、2、3と呼称する。いずれも埋土中に縄文土器片を含み、特に土坑2の④・⑤層から多数出土した。土器は小片で磨耗が著しいが、胎土や焼成、施文された縄文の相違から少なくとも4個体分あると思われる。土坑2は検出面からの深さ約40cmを測り、しっかりと掘り込まれているが性格は不明である。土坑1～3出土土器は重複していることから、埋没の時期差は無いと思われ、概ね縄文時代中期と考えている。

(加藤)

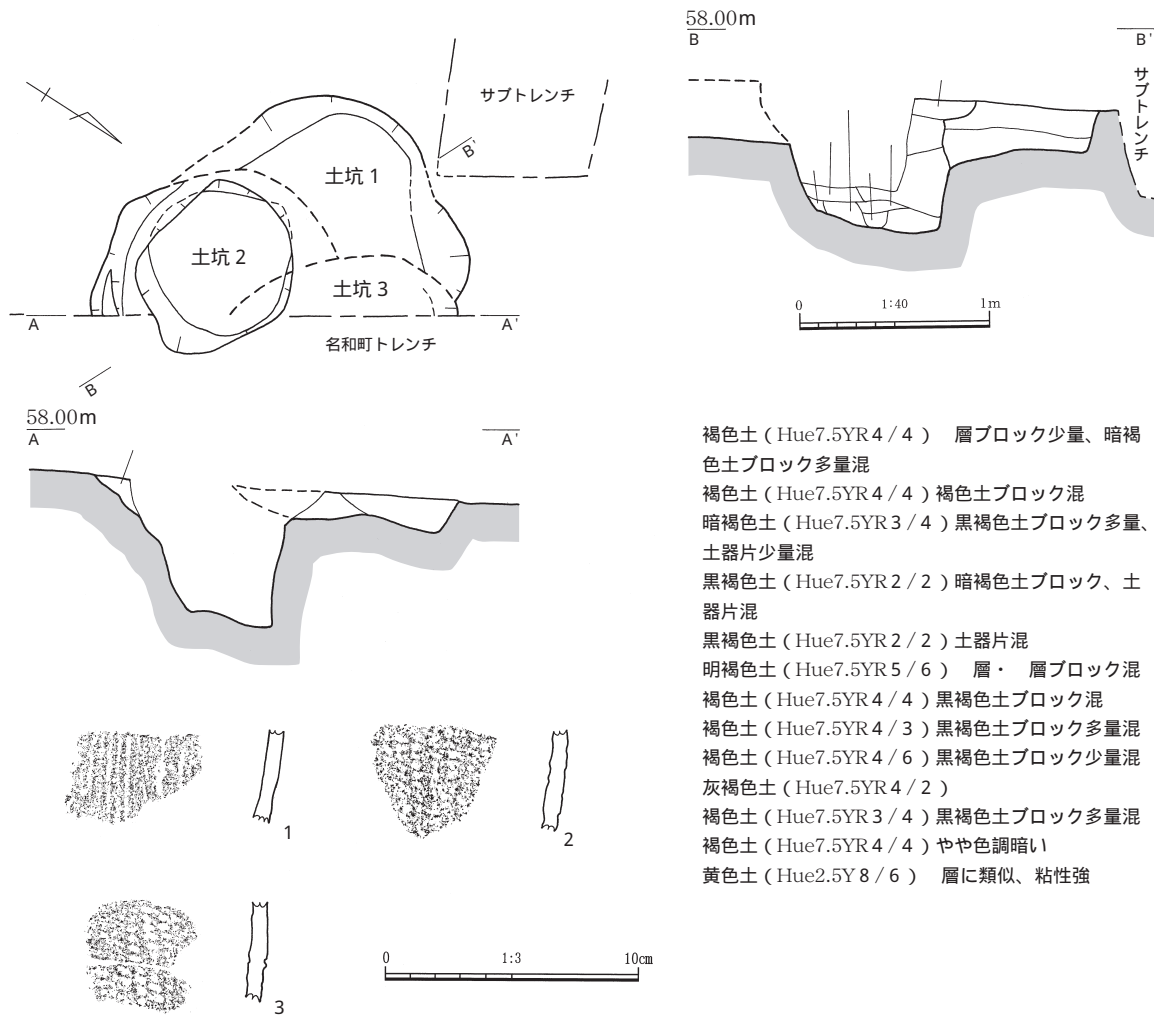


図8 土坑1・2・3および出土遺物

遺物番号	挿図番号	遺構位	種別	器種	口径(cm) (底)	器高 (cm)	特徴	胎土 焼成	色調	備考
1	8	土坑2 不明	縄文	-	-	△3.7	外面：縄文 内面：磨耗のため不明	細砂粒少量 良	橙色	
2	8	土坑2 不明	縄文	-	-	△4.1	外面：縄文 内面：磨耗のため不明	砂粒少量 良	浅黄橙色	
3	8	土坑2 ⑤層	縄文	-	-	△4.0	外面：縄文 内面：磨耗のため不明	砂粒多量 良	浅黄橙色	

遺構外出土土器（図9 図版15-1）

遺構外で出土した土器のうち、特徴的なものを列挙した。小片が多く、磨耗が著しい資料もみられるが、本遺跡出土の縄文土器の時期は早期～中期に収まると考えている。4は山形の押型文が外面に施文される。黄島式併行の可能性ある。5は撚糸文が外面に施される。節が不明瞭で撚りが甘い。6も磨耗が進行しているが、外面に撚糸文を確認できる。5・6について時期比定は難しい。7は里木I式に類似しており、縄文時代前期後葉に属すると考えている。8～19は縄文時代中期と判断した。9・10は外面に貝殻腹縁による条痕と円形列点文が施される。船元I式A類。8・11～15も爪形文等の特徴から船元I式A類と思われる。16は地が縄文、貼付突帯上に刻目を施す。船元II式B類か。17

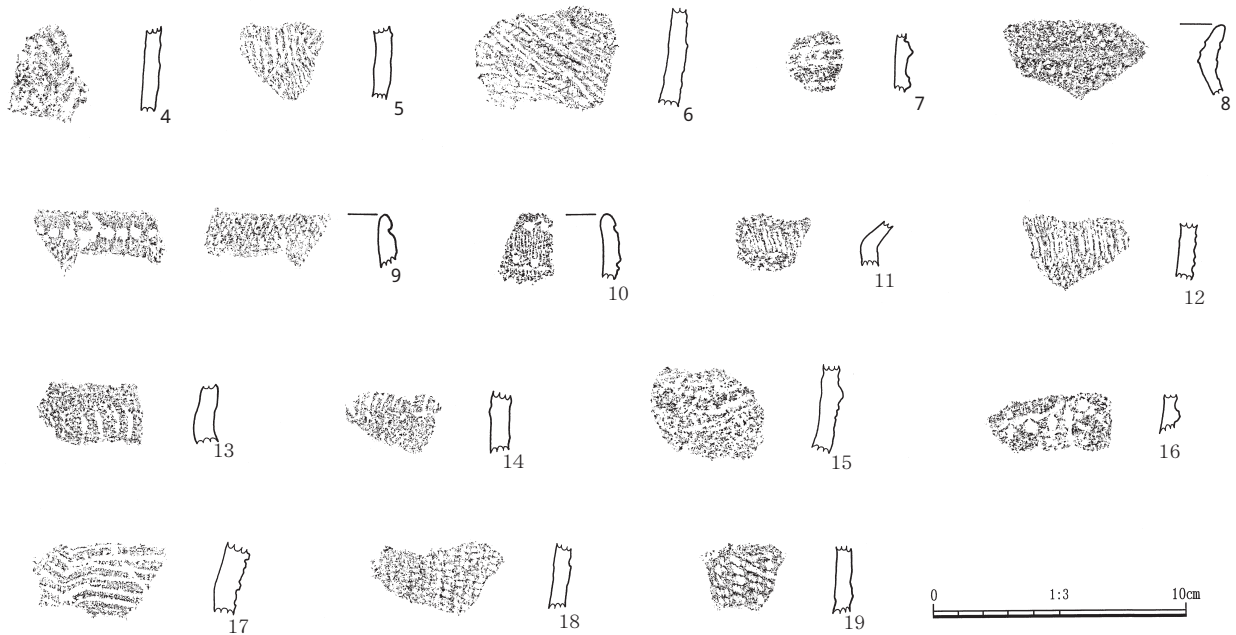


図9 遺構外出土土器

遺物番号	挿図番号	遺構層位	種別	器種	口径(cm) (底)	器高 (cm)	特徴	胎土 焼成	色調	備考
4	9	R 2 V層上面	縄文	深鉢	-	△3.4	外面：押型文（山形文、横位方向） 内面：磨耗のため不明	細砂粒多量 良	外面：浅黄褐色 内面：灰黄褐色	山形の振幅大、 鋭角
5	9	M 6 III層上面	縄文	深鉢	-	△2.9	外面：撚糸文 内面：磨耗のため不明	砂粒多量 良	橙色	
6	9	L 7 表土下	縄文	深鉢	-	△3.9	外面：撚糸文 内面：磨耗のため不明	砂粒多量 良	外面：褐灰色 内面：褐色	
7	9	H 8 表土下	縄文	深鉢	-	△2.3	外面：貼付突帯 磨耗著しい 内面：磨耗のため不明	砂粒多量 不明	橙色	
8	9	H 8 表土下	縄文	深鉢	-	△2.8	外面：口縁部下爪形文？ 磨耗著しい 内面：磨耗のため不明	砂粒多量 不明	にぶい黄褐色、 黒褐色	口縁部
9	9	調査地中央 表土下	縄文	深鉢	-	△2.1	外面：貝殻腹縁による条痕 円形列点文 内面：口縁部縄文	砂粒多量 良	にぶい黄褐色	口縁部
10	9	K 6 表土下	縄文	深鉢	-	△2.6	外面：貝殻腹縁による条痕 円形列点文 内面：磨耗のため不明	砂粒多量 不明	にぶい黄褐色	口縁部
11	9	J 9 表土下	縄文	深鉢	-	△1.8	外面：貝殻腹縁による条痕 内面：磨耗のため不明	砂粒多量 良	にぶい褐色	胴部屈曲部
12	9	K 7 II層上面	縄文	深鉢	-	△2.3	外面：貝殻腹縁による条痕 内面：磨耗のため不明	砂粒多量 良	橙色	
13	9	G 9 表土下	縄文	深鉢	-	△2.4	外面：爪形文 磨耗著しい 内面：磨耗のため不明	砂粒多量 良	にぶい橙色、黒褐色	胴部屈曲部
14	9	F 6 表土下	縄文	深鉢	-	△2.5	外面：爪形文 内面：磨耗のため不明	砂粒少量 良	にぶい褐色	胴部屈曲部？
15	9	L 8 表土下	縄文	深鉢	-	△3.6	外面：細い貼付突帯、突帯上に刻み 磨耗著しい 内面：磨耗のため不明	砂粒多量 良	にぶい橙色	
16	9	J 6 表土下	縄文	深鉢	-	△1.6	外面：貼付突帯、突帯上に刻目 縄文 内面：ナデ	砂粒少量 良	にぶい橙色	
17	9	G 10 表土下	縄文	深鉢	-	△2.8	外面：半裁竹管状工具による押し沈線 内面：ナデ	砂粒少量 良	にぶい橙色	
18	9	L 6 III層上面	縄文	深鉢	-	△2.6	外面：縄文 内面：磨耗のため不明	砂粒多量 良	外面：にぶい褐色 内面：にぶい褐色	
19	9	K 7 II層上面	縄文	深鉢	-	△2.7	外面：縄文 内面：磨耗のため不明	砂粒多量 良	にぶい褐色	

は半截竹管状工具による押し沈線が特徴的で、船元Ⅱ式C類に類似する。

(加藤)

※本遺跡出土の縄文土器について、鳥取県教育委員会事務局 久保穰二郎妻木晩田遺跡現地事務所長の助言を得た。

遺構外出土石器

(図10～16 図版15-3)

遺構外出土石器は表土や土壌化の進行した層からの出土が多く、層位的な検討が不十分だが、石材や器種など縄文時代石器の特徴を備えているものを本項で扱った。出土石器のうち、石錘、磨石、砥石等弥生時代以降出土する可能性がある石器群については本章「5. その他の遺構と遺物 遺構外出土石器」に掲載している。

本項で扱う石器類は石鏃、楔形石器、スクレイパー、加工痕・使用痕のある剥片、局部磨製石斧、石匙、石核、剥片、碎片、素材が認められる(図11)。総数は569点である。石材は黒曜石がほとんどを占め、552点を数える(約97%)。残り17点が安山岩製である。これらを器種別にみると、楔形石器が40点と多いのが目を引く。また、碎片が420点と全体の約74%を占めるのも特徴である。石核、

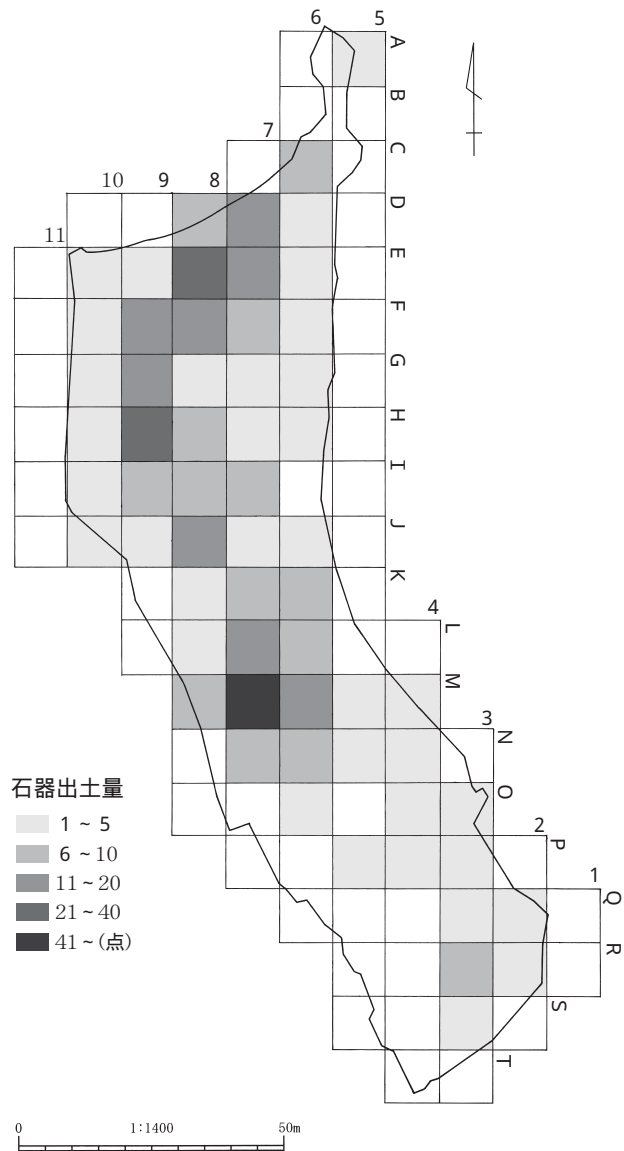


図10 グリッド別石器出土量概念図

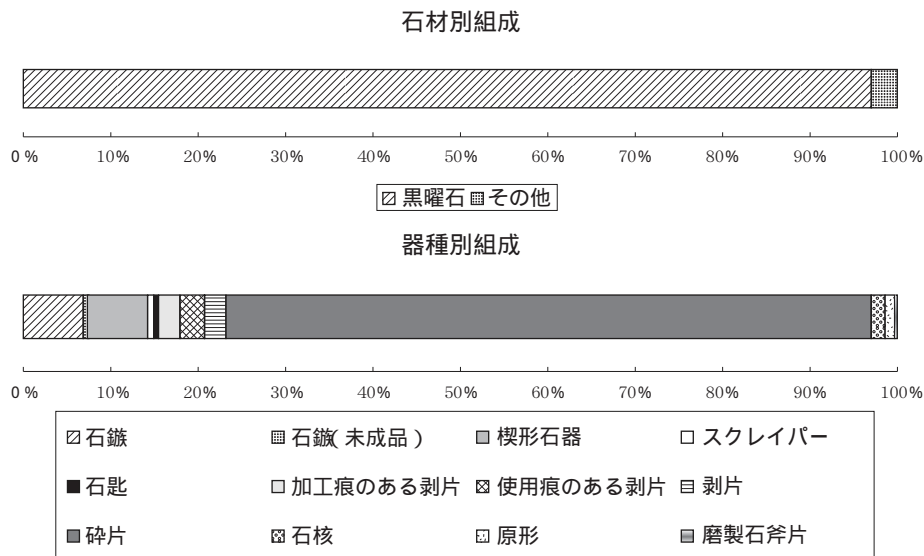


図11 石材および器種別組成図

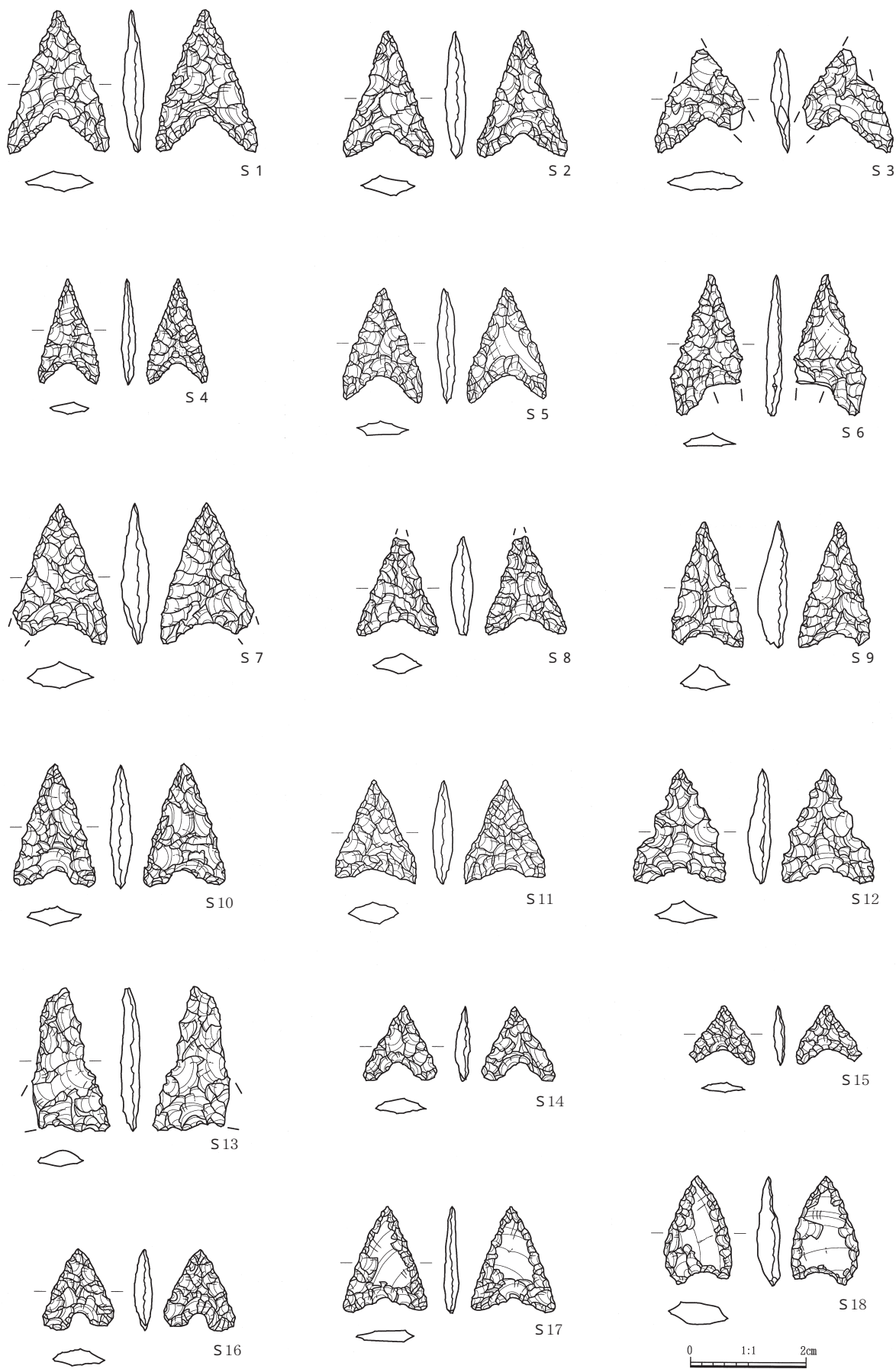


図12 石鏃 (1)

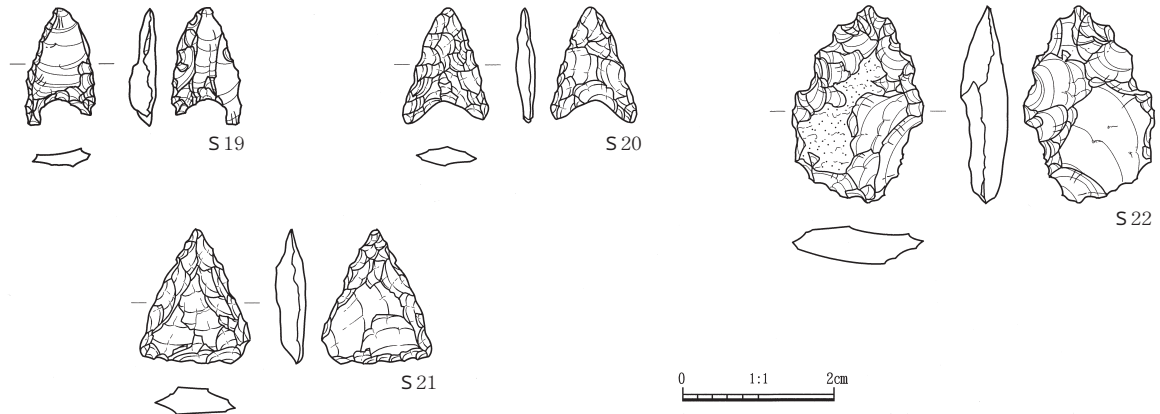


図13 石鏃（2）

遺物番号	挿図番号	地層区位	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
S 1	12	I 9 表土下	石鏃	黒曜石	2.5	1.8	0.4	0.5	
S 2	12	M 7 I層	石鏃	黒曜石	2.2	1.55	0.35	0.7	
S 3	12	F 8 表土下	石鏃	黒曜石	△1.8	△1.55	0.35	0.5	
S 4	12	F 8 不明	石鏃	黒曜石	1.85	1.05	0.25	0.2	
S 5	12	K 8 Ⅲ層上面	石鏃	黒曜石	2.0	1.35	0.3	0.4	
S 6	12	P 4 表土中	石鏃	黒曜石	2.45	△1.25	0.3	0.5	
S 7	12	I 10 V層上面	石鏃	黒曜石	2.45	1.6	0.5	1.1	
S 8	12	M 7 I層	石鏃	黒曜石	△1.7	1.45	0.4	0.5	
S 9	12	M 7 根攪乱土中	石鏃	黒曜石	2.2	1.25	0.5	0.8	
S10	12	不明	石鏃	黒曜石	2.1	1.4	0.4	0.7	
S11	12	F 9 表土下	石鏃	黒曜石	1.8	1.4	0.3	0.5	
S12	12	M 5 表土下	石鏃	黒曜石	2.0	1.6	0.4	0.7	
S13	12	M 7 I層	石鏃	黒曜石	2.5	△1.35	0.35	0.8	
S14	12	H 9 表土下	石鏃	黒曜石	1.3	1.3	0.3	0.2	
S15	12	H 9 表土下	石鏃	黒曜石	1.0	1.15	0.2	0.1	
S16	12	不明	石鏃	黒曜石	1.4	1.25	0.3	0.3	
S17	12	M 7 I層	石鏃	黒曜石	1.85	1.45	0.25	0.4	両面に素材剥離面残存
S18	12	M 7 I層	石鏃	黒曜石	1.9	1.2	0.4	0.7	両面に素材剥離面残存
S19	13	J 7 V層上面	石鏃	黒曜石	1.55	0.9	0.35	0.3	両面に素材剥離面残存
S20	13	H 9 表土下	石鏃	安山岩	1.5	1.1	0.25	0.3	
S21	13	M 4 V層上面	石鏃	安山岩	1.8	1.45	0.4	0.8	平基無茎鏃
S22	13	N 7 根攪乱土中	石鏃	黒曜石	2.6	1.7	0.6	2.1	未成品

剥片が一定数出土し、素材もわずかながら認められることから、当地で石器製作が行われていたことは明白である。

次に調査地内に設定したグリッド別（1グリッド：10m×10m）の石器出土量を算出した（図10）。M 7グリッドにおける78点（うち碎片62点）を筆頭に、E 8グリッドで35点（碎片28点）、H 9グリッドで24点（碎片17点）、F 8グリッドで20点（碎片18点）等、調査地中央～北半の数箇所に石器出土量の突出したグリッドがあり、その周辺グリッドにおいても一定の出土量がある様子が窺える。碎片

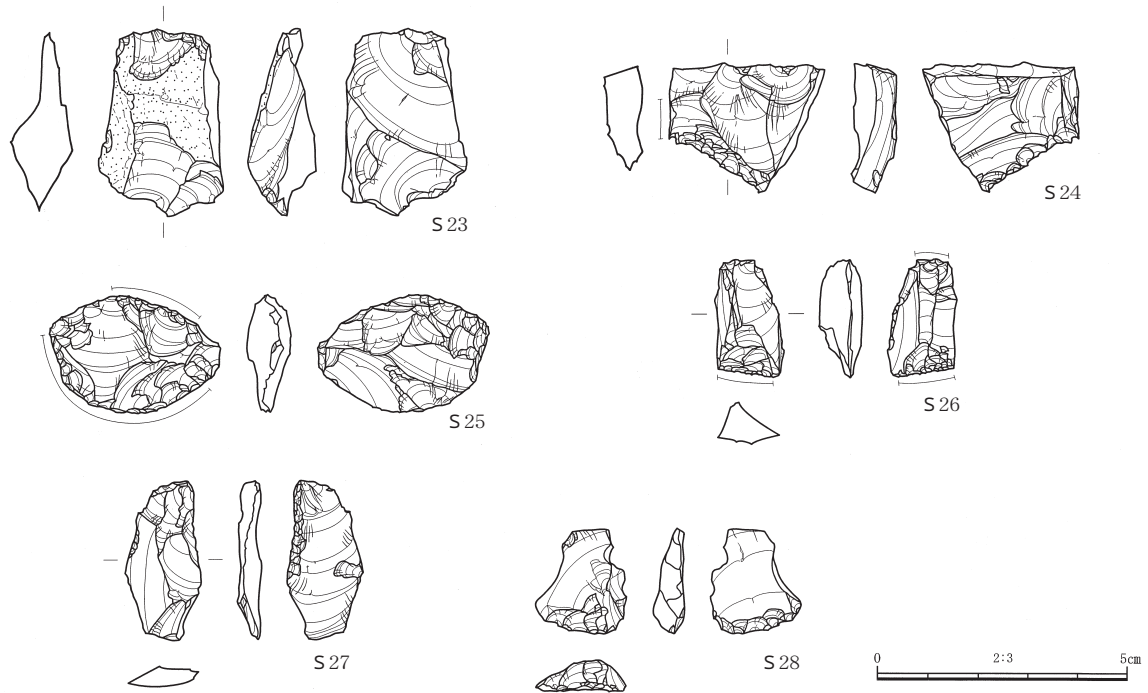


図14 楔形石器、スクレイパー

遺物番号	挿図番号	地層区位	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
S23	14	不明	楔形石器	黒曜石	3.7	2.5	1.35	9.5	
S24	14	H 9 表土下	楔形石器	黒曜石	2.6	3.1	0.9	6.3	
S25	14	F 10 表土下	楔形石器	黒曜石	2.35	3.4	0.9	5.3	
S26	14	K 7 根攪乱土中	楔形石器	黒曜石	2.4	1.4	0.9	2.0	
S27	14	N 5 I層	スクレイパー	黒曜石	3.2	1.5	0.5	1.3	
S28	14	N 7 I層	スクレイパー	黒曜石	2.1	1.8	0.6	1.7	

の占める多さを考えれば石器製作跡を想定する上で重要であるが、上記グリッドにおいて当該期の関連遺構は検出されていない。また、本遺跡は傾斜地で根攪乱や土壌化が進み、土砂の流失が想定されるため、後世の資料移動に留意する必要がある。以下、器種別に概要を述べる。

石鏃は41点出土しており（未成品2点含む）、石材別に見ると黒曜石製38点、安山岩製3点である。このうち、22点を図示した（図12・13）。S1～20は基部に抉入を持つ凹基無茎鏃である。S1～6の抉入は比較的深めの逆V字形を呈する。S7～16は逆U字形で浅めの抉りを持つ。先端部－抉入部間が短く、ブーメラン形をしたもの（S14・15）がみられる。S17～19は両面に素材剥離面を残す。S20・21は安山岩製で、S21は平基無茎鏃である。S22は縁辺の一部に粗い調整がみられ、未成品とした。

楔形石器は40点出土し全て黒曜石製である。そのうち4点を図示した（図14 S23～26）。両極打法による剥離痕を有する広義の楔形石器が大半で、そのうち1点を図示した（S23）。S24～26は楔本来の機能を持つと思われるものである。

スクレイパーは黒曜石製のもの4点出土し、2点を図示した（図14、S27・28）。剥片縁辺に調整を施し、刃部をつくり出している。

石核は出土総数が9点を数える。石材はいずれも黒曜石で、6点を図示した（図15 S29～34）。

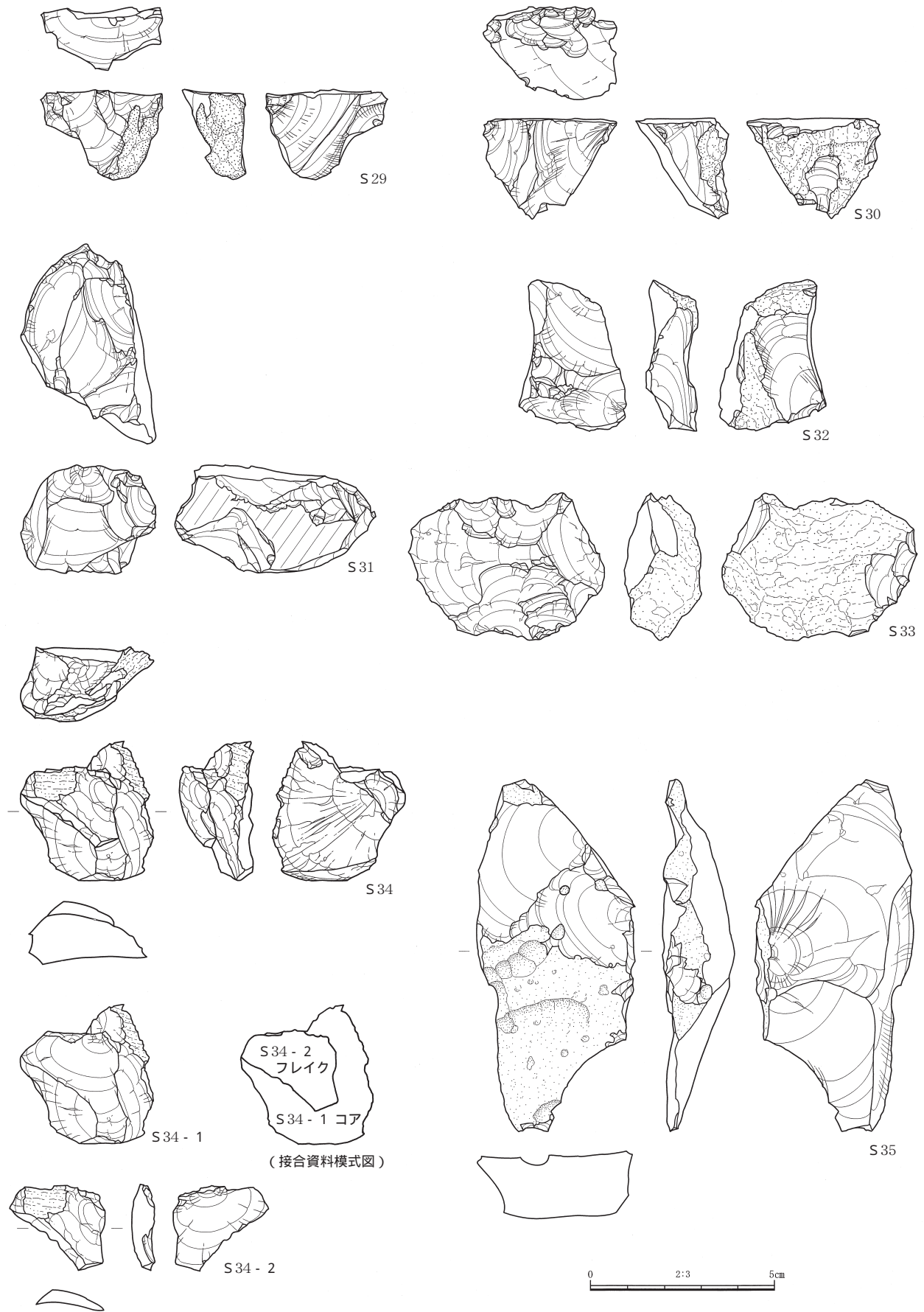


図15 石核、剥片

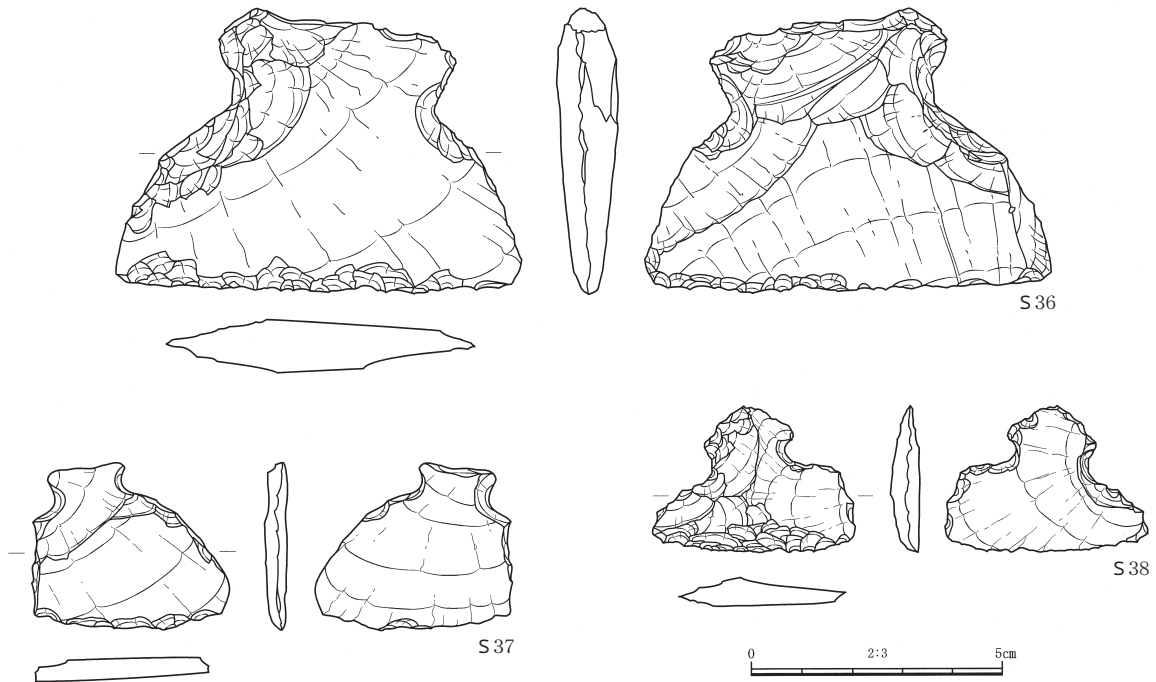


図16 石匙

遺物番号	挿図番号	地区位	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
S29	15	調査地北側表土中	石核	黒曜石	2.4	3.25	1.7	8.7	
S30	15	不明	石核	黒曜石	2.75	3.6	2.5	17.3	
S31	15	M7表土中	石核	黒曜石	2.9	3.65	5.4	49.5	
S32	15	N7II層上面	石核	黒曜石	4.1	2.9	1.4	14.6	
S33	15	L7III層上面	石核	黒曜石	4.0	5.2	2.1	33.9	
S34	15	M7I層	石核	黒曜石	3.8	3.6	2.0	17.3	接合資料(コア+フレイク)
S34-1					3.75	3.6	1.85	15.1	コア部
S34-2					2.2	2.6	0.6	2.2	フレイク部
S35	15	S3V層上面	剥片	黒曜石	4.3	9.5	1.95	60.0	
S36	16	K6I層	石匙	安山岩	5.7	8.1	1.2	48.6	
S37	16・35	K7溝2埋土中	石匙	安山岩	3.3	△3.9	0.5	6.4	
S38	16	L7P486埋土中	石匙	安山岩	2.9	4.05	0.6	0.4	

うち1点は接合資料である(S34)。いずれも不定形を呈する剥片を剥出している。原礫面の付着が大きく見られるものが多い。

S35は素材として利用しうる大型の剥片で、背面等に原礫面が大きく付着している。

S36~38は石匙で、3点出土した。S37・38は遺構からの出土であるがこの項に記載した。いずれも横型で、S36・37は平面形が三角形状を呈する。S36は両面加撃により刃部を作り出し、S37・38は片面加撃によるものである。

(加藤)

3. 弥生時代の遺構と遺物

当該期の遺構は、弥生時代終末期の竪穴住居を3棟確認した（図17 竪穴住居1～3）。うち、竪穴住居1は建て替えが為されている。また、古墳時代後期の竪穴住居を1棟（竪穴住居4）検出した。調査区中央部東側と南側にかけて検出したピット群の一部からは、埋土中から当該期や古墳時代の土器片が出土しているが、埋土の土色や掘立柱建物等遺構との対応関係が明確でないため、本節では扱わないこととする。

（加藤）

竪穴住居1（図18～20 図版1、2-1、13-1・2）

台地のほぼ中央に位置し、調査地内においてもほぼ中央、M7・8グリッドにある。表土下のⅡ層上面で検出した。2基の竪穴住居が平面入れ子状に重複している。埋土を観察すると、内側の住居の埋土⑧層・⑩層・⑫層・⑬層が、外側の住居の埋土⑳～㉒層を切っていた。加えて、内側の住居の周壁溝が外側の住居の柱穴であるピット5を切っていた。これらのことから外側の住居の方が古く、これを竪穴住居1aとし、内側の住居を竪穴住居1bとして順に報告する。

竪穴住居1aは平面方形を呈し、長軸・短軸とも5.4m、検出面からの深さ約36cm、床面積は約21.4㎡である。住居1aの床面は住居1bの掘り方に切られ、縁辺部が遺存するのみである。遺存部分はほぼ平坦であるが、地形と同様に北半部がやや低い。床面は基盤層であるⅤ層とⅥ層の境界上にあり、Ⅵ層上面が露出する住居北辺を除く南側に貼床（⑭・⑮層）が施してあった。周壁下に1条の周壁溝を検出したが（㉑層）、住居北辺の一部は攪乱を受け全周しない。遺存する床面からピット1～5を検出した。ピット1・3～5はほぼ同規模で、掘り方の四隅に位置することから支柱穴に該当する。ピット1・3・4の埋土はいずれも2層に分けられ、㉒層は柱痕、㉓層は掘り方埋土に相当する。㉒層の幅から、柱材の径は12～15cmであったと考えられる。ピット5は柱材を抜き取ったものと考えられ、埋土㉒層中から桃核が出土した。桃核の出土状況は住居廃絶時の祭祀の可能性がある。いわゆる中央ピットの有無については不明である。



図17 弥生時代・古墳時代遺構分布

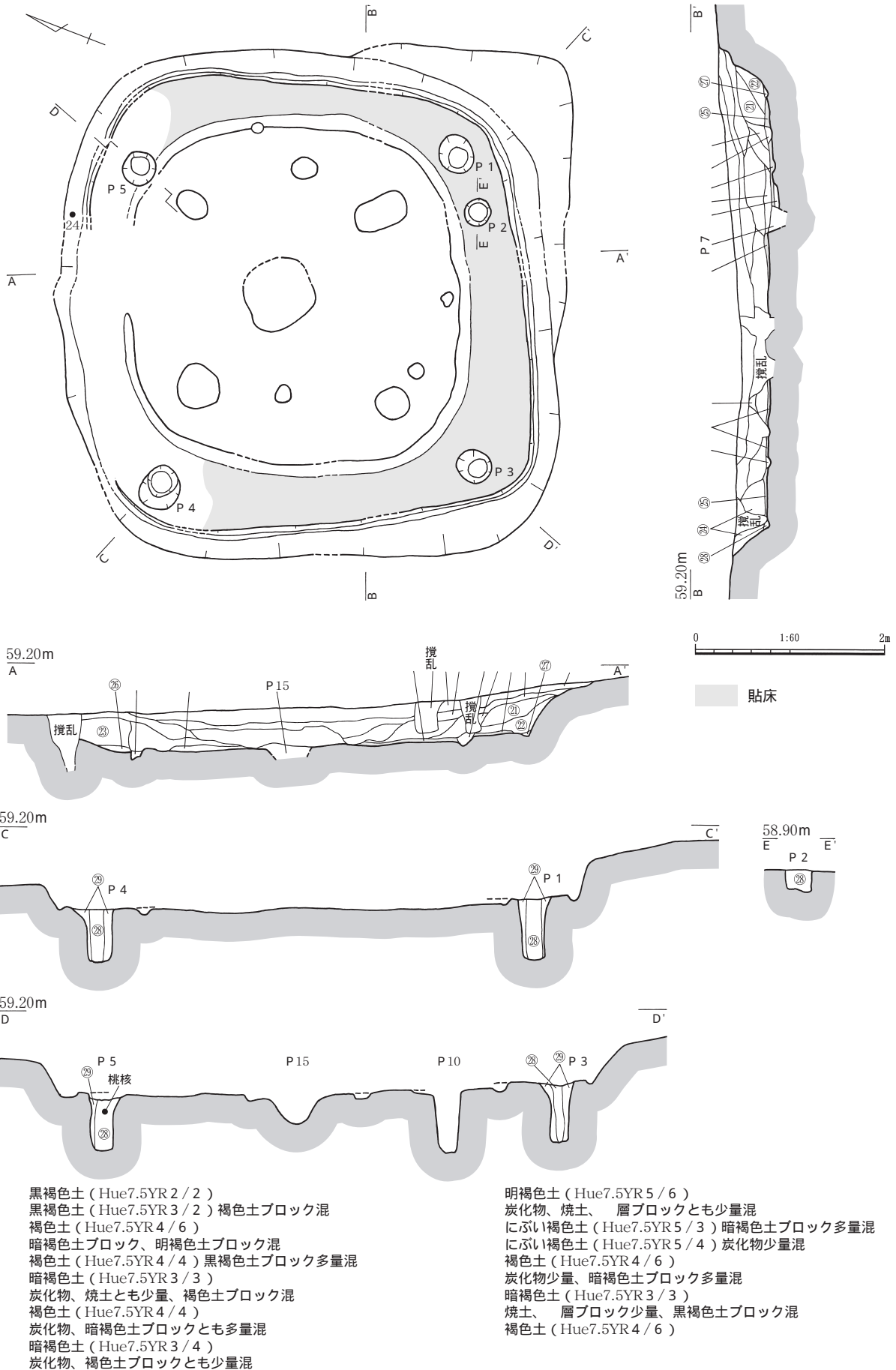
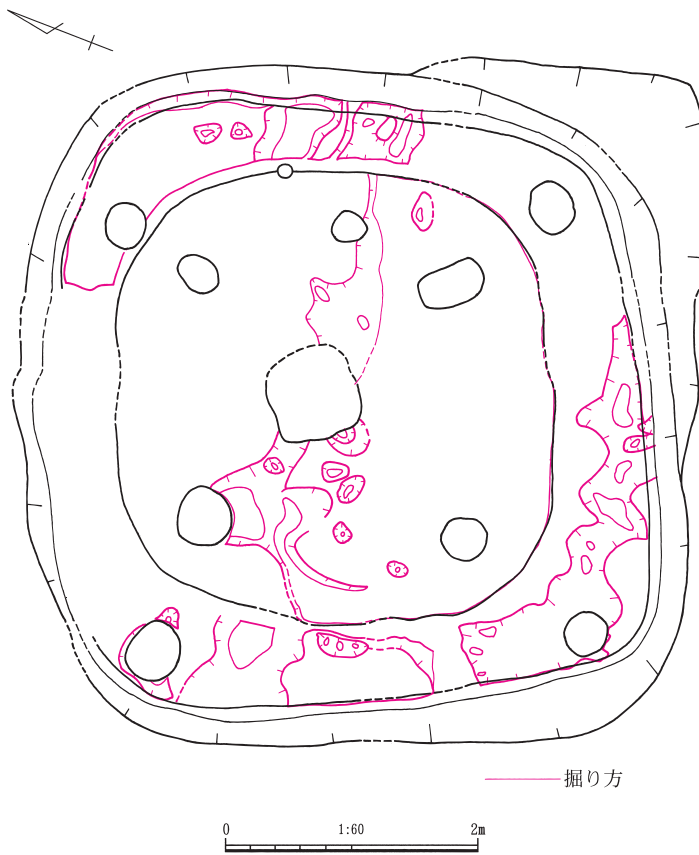
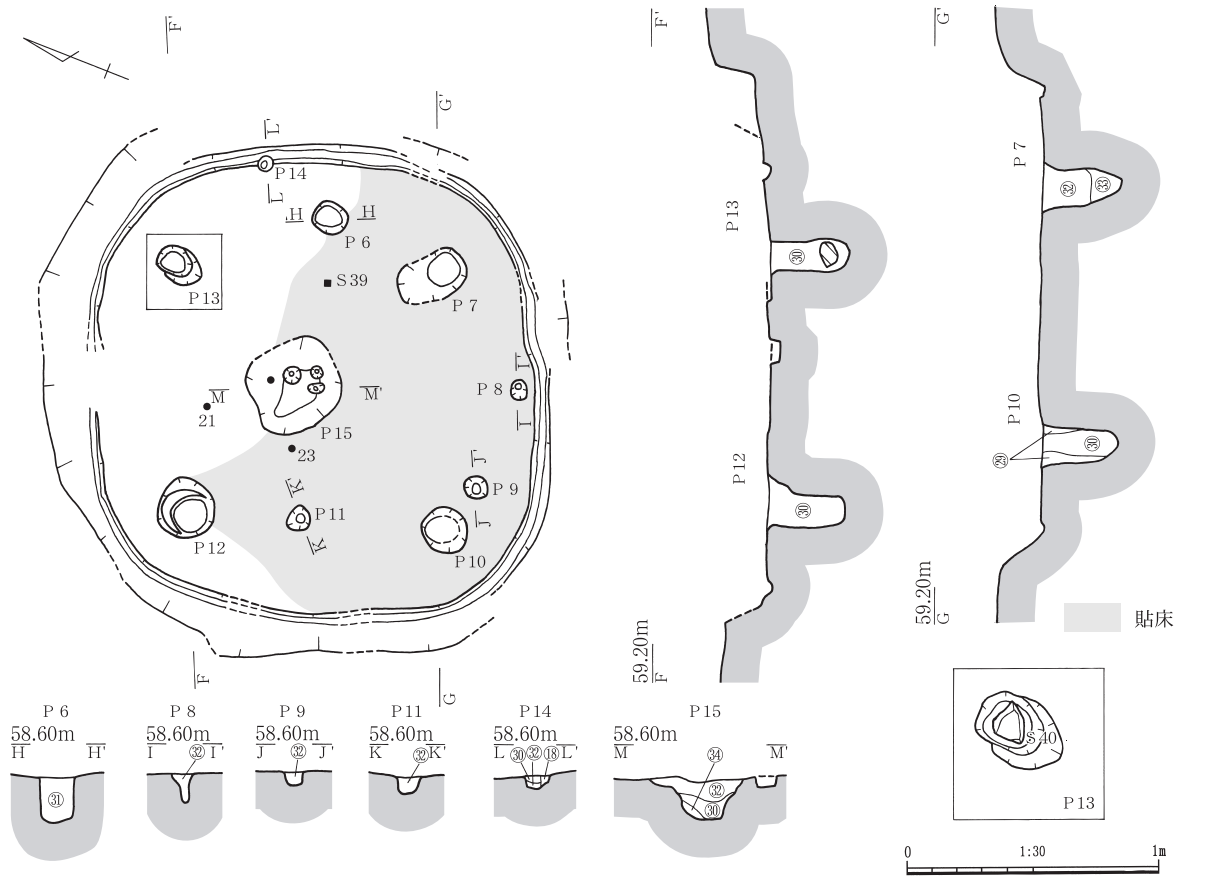


図18 竪穴住居 1 (1)



- ⑭ 明褐色土 (Hue7.5YR 5 / 6)
VI層ブロック多量、VII層ブロック少量混
- ⑮ 褐色土 (Hue7.5YR 4 / 4) 炭化物少量混
- ⑯ 暗褐色土 (Hue7.5YR 3 / 3)
焼土、VI層ブロック少量混
- ⑰ 明褐色土 (Hue7.5YR 5 / 6)
- ⑱ 褐色土 (Hue7.5Y 4 / 6)
炭化物、明褐色土ブロックとも少量混
- ⑲ 明褐色土 (Hue7.5 YR 5 / 6) 炭化物少量混
- ⑳ 褐色土 (Hue7.5YR 4 / 6)
炭化物少量、VII層ブロック多量混
- ㉑ 褐色土 (Hue7.5YR 4 / 6)
黒褐色土ブロック、VI層ブロックとも少量混
- ㉒ 褐色土 (Hue7.5YR 4 / 6)
- ㉓ 明褐色土 (Hue7.5YR 5 / 6)
炭化物少量、褐色土ブロック多量混
- ㉔ 褐色土 (Hue7.5YR 4 / 4) 炭化物少量混
- ㉕ 明褐色土 (Hue7.5Y 5 / 6)
褐色土ブロック、VI層ブロック混
- ㉖ 明褐色土 (Hue7.5Y 5 / 8) VI層ブロック多量混
- ㉗ 褐色土 (Hue7.5Y 4 / 4)
- ㉘ 褐色土 (Hue7.5Y 4 / 6)
黒褐色土ブロック、炭化物少量混
- ㉙ 明褐色土 (Hue7.5Y 5 / 8)
- ㉚ 褐色土 (Hue7.5Y 4 / 4)
炭化物、VI層ブロックとも少量混
- ㉛ 明褐色土 (Hue7.5Y 5 / 6)
炭化物少量、VII層ブロック多量混
- ㉜ 黒褐色土 (Hue7.5Y 3 / 2)
炭化物多量、VI層ブロック、VII層ブロック混
- ㉝ 褐色土 (Hue7.5Y 4 / 6)
炭化物、VI層ブロック、VII層ブロックとも少量混
- ㉞ 褐色土 (Hue7.5Y 4 / 6)
炭化物、VI層ブロック多量混

図19 竪穴住居 1 (2)

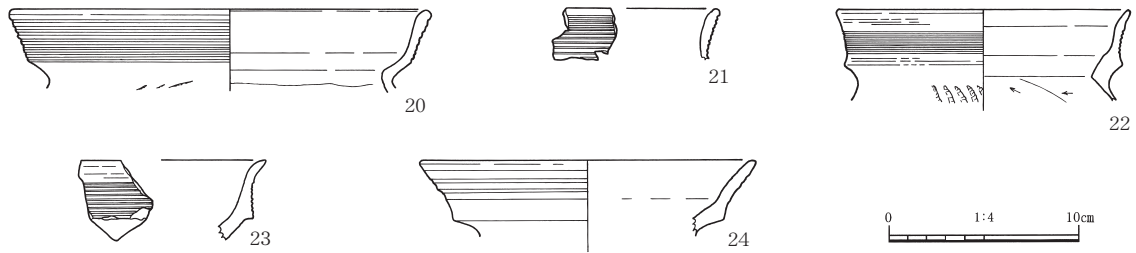


図20 竪穴住居1出土遺物

遺物番号	挿図番号	遺構層位	種別	器種	口径(cm) (底)	器高 (cm)	特徴	胎土 焼成	色調	備考
20	20	竪穴住居1 ⑭層直上	弥生	甕	* 21.0	△4.3	外面：口縁部平行沈線文、頸部ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部ケズリ	砂粒多量、礫少量 良	にぶい黄橙色	
21	20	竪穴住居1	弥生	-	-	△2.7	外面：口縁部平行沈線文 内面：口縁部ナデ	砂粒少量 良	外面：にぶい黄橙色 内面：浅黄橙色	
22	20	竪穴住居1 ⑬層	弥生	甕	* 15.6	△4.8	外面：口縁部平行沈線文後ナデ 頸部～肩部ナデ・刺突文 内面：口縁部ナデ、頸部以下ケズリ	砂粒多量 良	橙色	
23	20	竪穴住居1	弥生	-	-	△4.2	外面：口縁部平行沈線文後ナデ、頸部ナデ 内面：口縁部ナデ	細砂粒、礫少量 良	にぶい黄橙色	
24	20	竪穴住居1	弥生	甕?	* 17.8	△4.0	外面：口縁部平行沈線文後ナデ、頸部ナデ 内面：口縁部ナデ	細砂粒少量 良	浅黄橙色	

遺物番号	挿図番号	地区位	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
S39	-	竪穴住居1	敲石	角閃石安山岩	11.0	9.0	5.5	641.0	図版13-2
S40	19	竪穴住居1 P13埋土中	根石	角閃石黒雲母安山岩	20.0	12.3	8.6	1893.0	図版13-2

竪穴住居1 aの埋土は、明褐色土と褐色土に大別でき、前者は褐色土をブロック状に含むため、人為的に埋められた可能性がある。

出土した遺物は少なく、図化できたのは口縁部24のみである。24は住居の北辺壁際、いわゆる三角堆積層中で、床面からやや浮いた状態で出土した。竪穴住居1 aの時期は、資料に乏しいが口縁部24の年代観から、弥生時代終末期のものと考えられる。

竪穴住居1 bは調査当初、住居1 aとの新旧関係を誤認し、周壁の全体を検出し得なかった。おそらく平面形は不整な方形で、床面の規模は長軸4.1m、短軸3.7m、検出面からの深さ40cm、床面積は約12.3㎡である。住居1 bの掘り方は住居1 aの掘り方よりもわずかに深く穿たれていた。床面はほぼ平坦で、貼床は住居1 aと同様に南側のV層上に施されており、周壁下に1条の周壁溝(⑰・⑱層)を検出した。住居北辺は攪乱を受けており、周壁溝が全周していたかどうかは不明である。床面からピット6～15を検出した。ピット7・10・12・13は住居の四隅に位置し、近似した規模であることから支柱穴に相当する。ピット7・12・13は柱痕が遺存せず、柱材を抜き取ったものと考えられる。ピット13では面をもった扁平な石(S40)が出土した。根石と考えられる。ピット10の⑳層は柱痕に相当し、この幅から柱材の径は18cm前後であったと考えられる。ピット14は周壁溝の埋土を切っていた。ピット15は住居内のほぼ中央に位置し、いわゆる中央ピットに相当する。平面形は上端、下端共に不整形を呈し、底面には凹凸がある。埋土には炭が含まれるが、出土遺物は微量で機能等は不明である。

竪穴住居1 bの埋土は大きく明褐色土、褐色土、暗褐色土、黒褐色土に大別できる。黒褐色土①層は自然堆積である。中層以下の明褐色土、褐色土、暗褐色土は人為的に埋められた可能性がある。

遺物は少量で、図化できたのは4点である。口縁部21は床面直上で出土した。甕の口縁部22は⑬層から出土した。少量ながら出土した遺物の年代観から、竪穴住居1 bの時期は弥生時代終末期と考えられる。

られる。2基の住居は、時期を大きく隔てる遺物が出土していないため、時期幅はさほどないと考える。

(日置)

竪穴住居2 (図21・22 図版2-2・3、12-3、13-3・4、14-1・2)

調査地南東側の丘陵縁辺部緩斜面上に立地する。O・P3グリッドに位置し、I層下のV層上面で検出した。住居の東隣には近世以降に掘削されたとと思われる採土坑があり、住居東側の一部が攪乱を受けて流失している。平面形はいびつな隅丸形状を呈し、床面の規模は長軸3.4m、短軸2.8m、面積は約10.8㎡で、検出面からの深さは最大で68cmを測る。

床面には南西隅を除いて貼床が施される(⑥層)。また、被熱により硬化した焼土の広がりをも4箇所確認した。ピットは総数10基を検出した。住居内の四隅付近に位置するピット1～4は径約30cm、深さ60～70cmを測り、支柱穴と考える。ピット2には柱の痕跡を確認できるが、ピット1・3・4には柱痕が遺存しておらず、抜き取られたと考えられる。ピット5は、位置から中央ピットに該当すると思われる。断面形は下端が突出する形状を呈するが、突出部分(⑳層)は根による攪乱の可能性がある。ピット6～10は褐色系の埋土をもち、いずれも浅い。深さ3cm程度の細い溝がピット5を切って北方向にのび、ピット6・8が溝を切って重複する。竪穴部内を仕切る溝の可能性を考えている。周壁溝は東側、南側で攪乱のため途切れる箇所が認められるが、本来は全周していたものと思われる。ピット11は黄褐色土を埋土に持ち、周壁溝を切っている。貼床を除去すると底面には不整な凹凸がみられ、掘り方と考えている。

竪穴部埋土のうち、①層は自然堆積と思われるが、その下に堆積する②～⑤層には基盤土・焼土ブロックが混じり、人為的な埋め戻しの可能性がある。

埋土中からは少量の土器片のほか、鉄製品片(F1)が床面から浮いた状態であるが出土しており、錆化が著しいが刀子の可能性もある。床面直上では土器(25、26)、台石等の石器類(S41～43)を検出した。S42には被熱痕跡が認められる。

床面直上で出土した土器の年代観から、本遺構は弥生時代終末期に属すると考える。

(加藤)

竪穴住居3 (図23～25 図版3、14-3・4、16)

P2・3グリッドにまたがり、竪穴住居2の南東隣に位置する。I層下のV層上面で検出した。竪穴住居2と同様、近世以降の掘削と思われる採土坑により住居の北東～東側を一部失っている。また、竹等樹木の細かい根が密に埋土中に入り込み、床面にも若干その影響が及んでいる。平面形はいびつな隅丸形状を呈し、検出面からの深さは最大で70cmを測る。床面の規模は長軸4.1m、短軸3.9m、面積は約16.8㎡である。

床面にはほぼ全面に貼床が施され(㉑・㉒・㉓層)、硬化した焼土の広がりをも4箇所確認した。住居内四隅に位置するピット1～4は支柱穴であろう。埋土は部分的に根攪乱を受けているが、いずれも柱痕が遺存せず、抜き取られたと考えられる。住居中央付近検出のピット5は中央ピットに該当しよう。埋土は炭を少量含むが、攪乱のためかしまりが悪い。周壁溝は東・南側で一部途切れるが、本来は全周していた可能性が高い。床面の北東辺では周壁溝の内側約0.1mに細い溝がほぼ並行して掘られる。規模は周壁溝に近似し、竪穴部の拡張の痕跡もしくは、住居内を仕切る床溝と考えている。その他床面上では、褐色系の埋土を持ち深さ15cm程度の浅いピット(ピット6～9)を検出している。

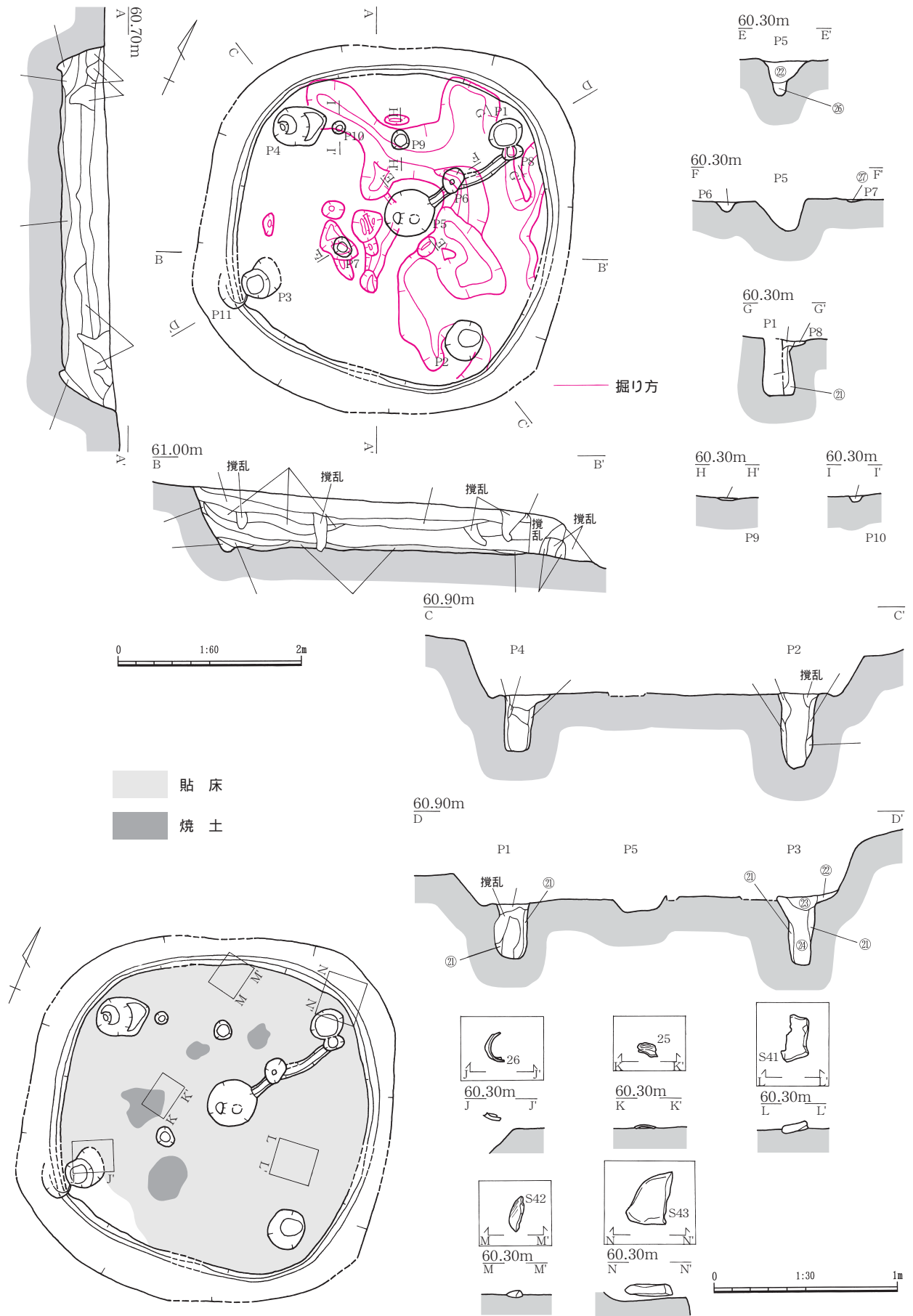


図21 竪穴住居2

竪穴住居 2 の土層堆積 (図21)

番号	層名	色調	備考	番号	層名	色調	備考
①	黒褐色土	(Hue10YR 3/2)		⑮	にぶい黄褐色土	(Hue10YR 5/3)	VI層ブロック、炭少量混
②	褐色土	(Hue10YR 4/6)	VI層ブロック、炭少量混	⑯	黄褐色土	(Hue10YR 5/8)	粘性強
③	明黄褐色土	(Hue10YR 6/8)	VI層ブロック、炭少量混	⑰	にぶい黄褐色土	(Hue10YR 5/4)	炭少量混
④	明黄褐色土	(Hue10YR 6/6)	炭、焼土少量混	⑱	にぶい黄褐色土	(Hue10YR 4/3)	炭少量混
⑤	にぶい黄褐色土	(Hue10YR 5/3)	炭、焼土少量混	⑲	にぶい黄褐色土	(Hue10YR 6/4)	炭少量混、粘性強
⑥	にぶい黄褐色土	(Hue10YR 4/3)	炭、焼土少量混	⑳	黄褐色土	(Hue2.5Y 4/4)	炭少量混、粘性強
⑦	にぶい黄褐色土	(Hue10YR 4/5)	VI層ブロック、炭少量混	㉑	橙色土	(Hue7.5YR 6/6)	炭少量混、粘性強
⑧	橙色土	(Hue7.5YR 7/6)	粘性強	㉒	にぶい黄褐色土	(Hue10YR 5/4)	VI層ブロック、炭少量混
⑨	黄褐色土	(Hue10YR 5/6)	VI層ブロック少量混	㉓	オリーブ褐色土	(Hue2.5Y 4/6)	炭少量混
⑩	灰黄褐色土	(Hue10YR 4/2)		㉔	にぶい黄褐色土	(Hue10YR 4/3)	VI層ブロック、炭少量混
⑪	黒褐色土	(Hue10YR 3/2)	炭混	㉕	明黄褐色土	(Hue10YR 6/6)	炭少量混
⑫	黄褐色土	(Hue10YR 5/6)		㉖	にぶい褐色土	(Hue7.5YR 5/4)	粘性強
⑬	明黄褐色土	(Hue10YR 6/8)	③層と類似、色調やや暗	㉗	褐色土	(Hue10YR 4/4)	炭少量混
⑭	にぶい黄褐色土	(Hue10YR 5/3)	VI層ブロック少量混				

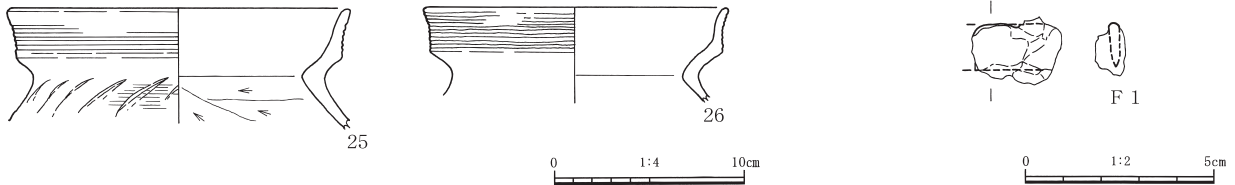


図22 竪穴住居 2 出土遺物

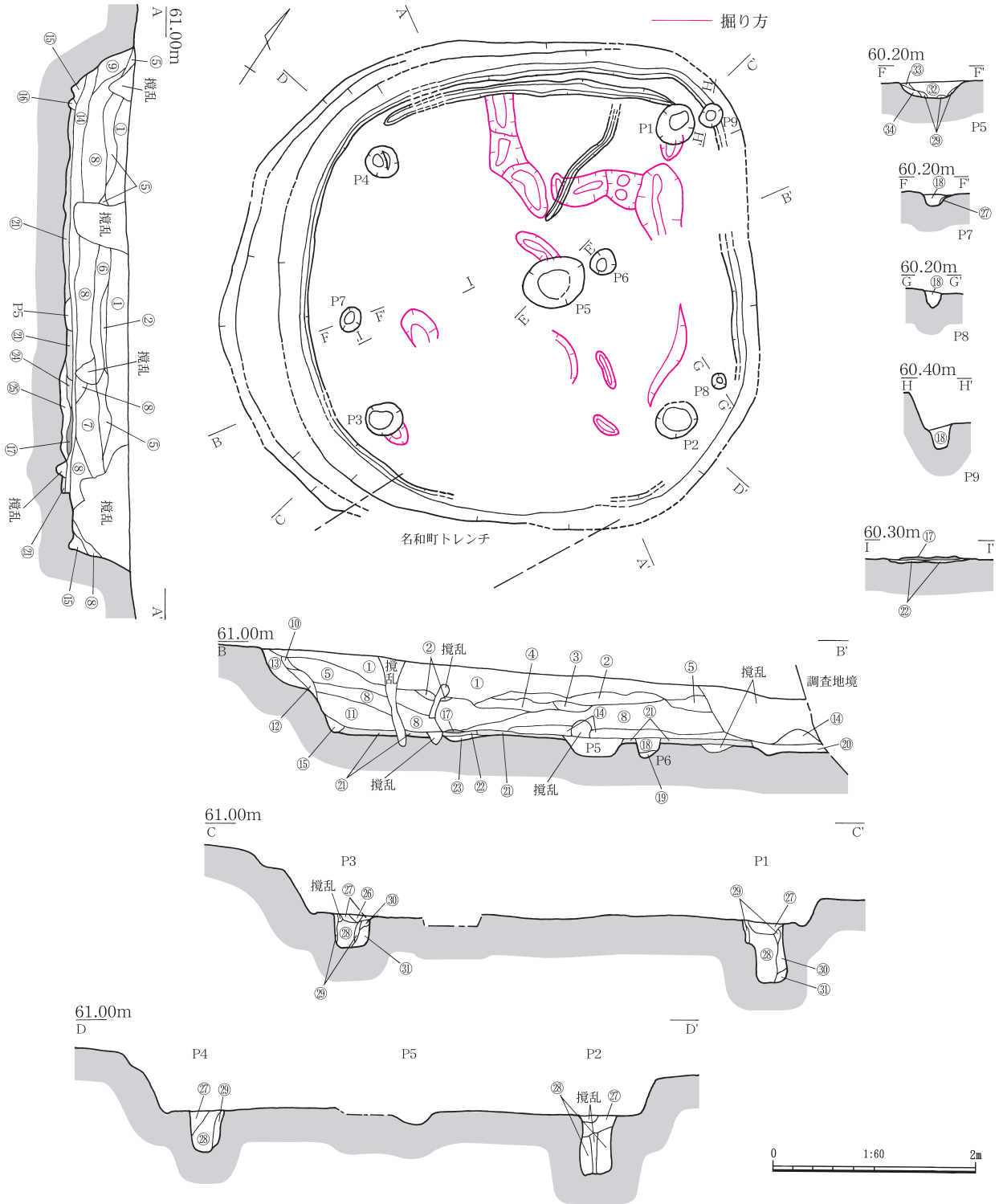
遺物番号	挿図番号	遺構位	種別	器種	口径(cm) (底)	器高 (cm)	特徴	胎土 焼成	色調	備考
25	22	竪穴住居 2 床直	弥生	甕	* 18.4	△6.3	外面：口縁部平行沈線文後ナデ 頸部～肩部ハケ・ナデ・刺突文 内面：口縁部ナデ、頸部以下ケズリ	砂粒多量 良	にぶい黄褐色	胎土分析試料 7
26	22	竪穴住居 2 床直	弥生	甕	* 16.3	△5.0	外面：口縁部平行沈線文後ナデ、頸部～肩部ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ケズリ	細砂粒・砂粒少量 良	浅黄褐色	胎土分析試料 6

遺物番号	挿図番号	遺構位	遺物名	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	磁着度	メタル度	特徴
F 1	22	竪穴住居 2 ④層	鉄製品(鍛造品) 刀子?	2.4	1.6	0.8	4.3	2	錆化(△)	幅1.2cm強を測る薄板状の鉄製品破片。 錆膨れが進み下面から下手には酸化土砂が厚い。 刀子の刃部破片か。

遺物番号	挿図番号	地区位	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
S 41	21	竪穴住居 2 床直	台石	角閃石安山岩	27.5	14.2	6.2	3595.0	図版13-4
S 42	21	竪穴住居 2 床直	不明	角閃石安山岩	19.5	7.2	5.8	940.0	被熱痕跡有り、図版13-4
S 43	21	竪穴住居 2 床直	台石	角閃石安山岩	32.2	22.5	11.0	10500.0	図版13-4

ピット 9 は周壁溝を切っている。貼床除去後、底面には若干の凹凸がみられ、掘り方と判断した。

住居の南西～北壁は二段に掘り込まれ、狭いテラス状となっている。竪穴部の埋土はテラス状部分を埋める⑬層を切って堆積していることから、竪穴掘削後テラス状の部分を程なく埋め戻し、周壁とした可能性がある。埋土下位の⑦・⑧層中では炭化材を検出した。これらの樹種同定を実施したところ(図24 樹種同定試料 1～10)、スダジイ、クリ、ヤマグワ等の結果を得た。これらの樹種は、焼失住居内で出土した住居構造材の樹種同定において頻繁にみられるもので、当地域の他遺跡でも数多く報告されている(詳細については第4章2を参照)。ただ本遺構出土の炭化材は、出土位置が床面からやや浮いていること、一般的な焼失住居と比較して出土量が少なく、周壁等に被熱した痕跡がみられないことから、埋没時に混入した可能性が高いと考えている。竪穴部埋土の堆積状況は水平に近く、人為的に埋め戻されたものであろう。竪穴部埋土上位の②～⑤層は炭や焼土が混じり、④層は焼



- | | |
|----------------------------------|---------------------------------------|
| ①黒褐色土 (Hue10YR 2 / 3) 炭、焼土混 | ⑫明黄褐色土 (Hue10YR 6 / 6) VI層ブロック混 |
| ②褐色土 (Hue10YR 4 / 6) 炭、焼土混 | ⑬黄褐色土 (Hue7.5YR 7 / 8) V層類似、炭少量混 |
| ③褐色土 (Hue10YR 4 / 6) ②より炭多量混 | ⑭黄褐色土 (Hue2.5Y 5 / 3) 炭、焼土少量混 |
| ④明褐色土 (Hue7.5YR 5 / 6) 炭、焼土多量混 | ⑮にぶい黄褐色土 (Hue10YR 5 / 4) 周壁溝埋土 |
| ⑤にぶい黄褐色土 (Hue10YR 5 / 4) 炭、焼土少量混 | ⑯にぶい黄褐色土 (Hue10YR 5 / 4) 炭少量混 周壁溝埋土 |
| ⑥褐色土 (Hue10YR 4 / 4) 炭、焼土ブロック混 | ⑰赤褐色土 (Hue 5 YR 4 / 6) 焼土、被熱により硬化 |
| ⑦オリーブ褐色土 (Hue2.5Y 4 / 6) 炭、焼土少量混 | ⑱にぶい黄褐色土 (Hue10YR 5 / 4) 炭少量混 |
| ⑧黄褐色土 (Hue2.5Y 5 / 4) 炭少量混 | ⑲にぶい黄褐色土 (Hue10YR 5 / 3) 炭少量混 |
| ⑨黄褐色土 (Hue10YR 5 / 8) 炭少量混 | ⑳明黄褐色土 (Hue10YR 5 / 4) VI層に類似 |
| ⑩明黄褐色土 (Hue10YR 6 / 6) | ㉑黄褐色土 (Hue7.5YR 7 / 8) 炭、焼土少量混、粘性強 貼床 |
| ⑪黄褐色土 (Hue10YR 5 / 6) 炭少量混 | ㉒明黄褐色土 (Hue10YR 7 / 6) 粘性強 貼床 |

図23 竪穴住居 3 (1)

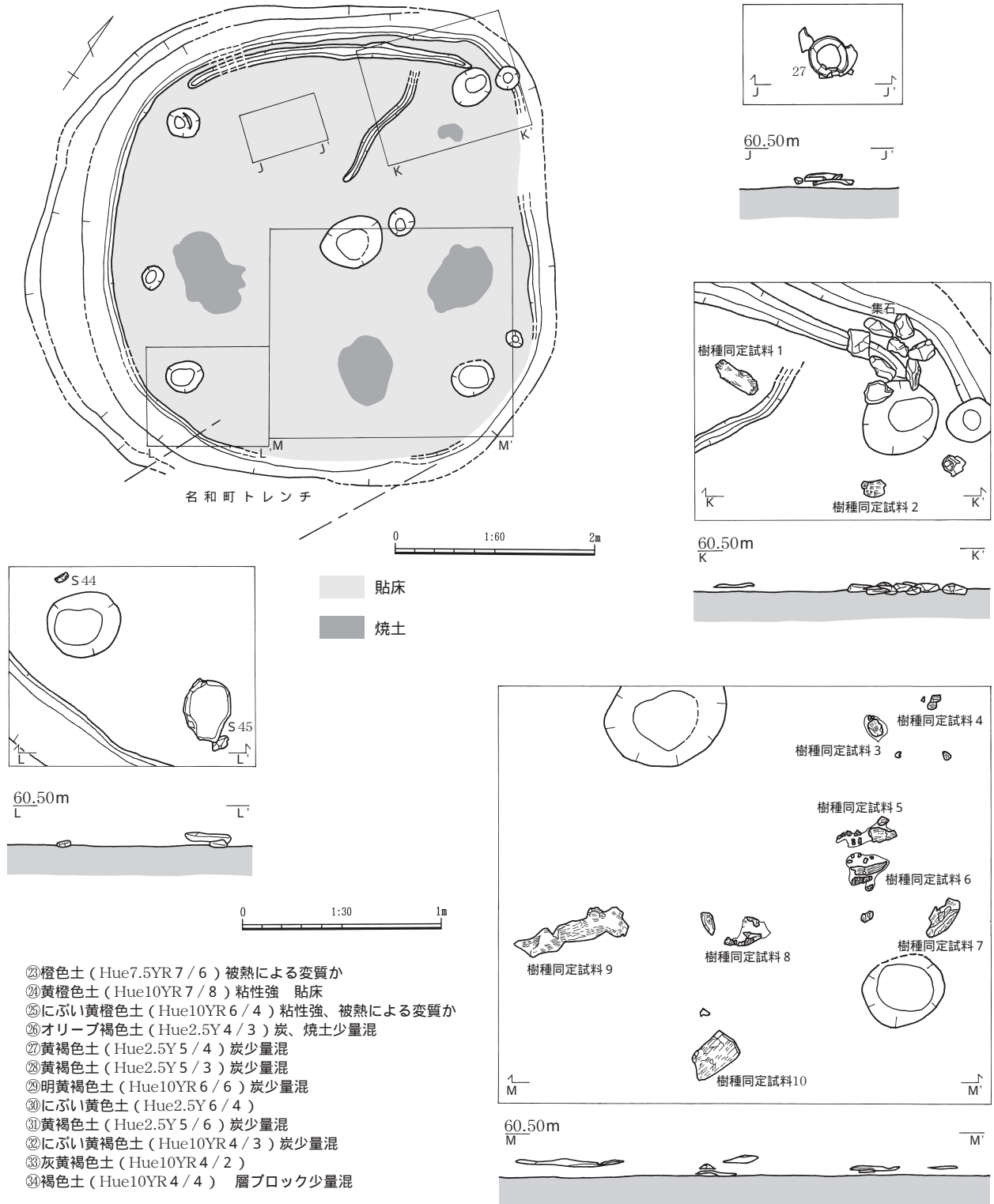


図24 竪穴住居 3 (2)

土ブロックを多量に包含する。自然堆積と考えられる①層が堆積する以前、本住居は廃絶後、廃棄土坑として使用されたと考えられる。

埋土上・中層からは土器片が出土しているが、床面直上出土分のみ図示した (27・28)。そのほか床面上では砥石 (S44)、台石 (S45)、竪穴部北東隅に集石を確認した (図24)。拳大の礫群で石材は角閃石黒雲母安山岩である。

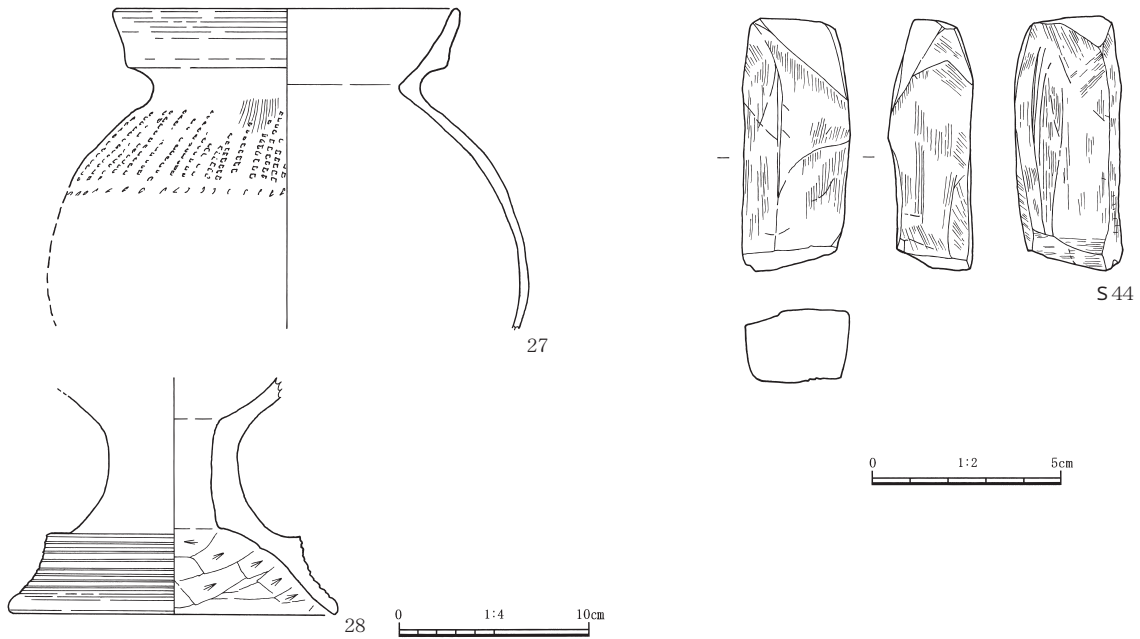


図25 竪穴住居3出土遺物

遺物番号	挿図番号	遺層	構位	種別	器種	口径(cm) (底)	器高 (cm)	特徴	胎土 焼成	色調	備考
27	25	竪穴住居3	床直	弥生	甕	*18.6	△16.8	外面：口縁部平行沈線文後ナデ、頸部ナデ 肩部ハケ・ナデ・刺突文 内面：口縁部ナデ、頸部以下ケズリ	砂粒多量、礫少量 良	外面：浅黄橙色、 一部橙色 内面：にぶい黄橙色	胎土分析試料10
28	25	竪穴住居3	床直	弥生	器台	*12.5	△17.2	外面：脚柱部ナデ、脚裾部平行沈線文後ナデ 内面：器受部・脚柱部ナデ、脚裾部ケズリ	砂粒多量、礫少量 良	にぶい橙色、 部分的に赤褐色 (赤色塗彩)	胎土分析試料8

遺物番号	挿図番号	地層	区	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
S44	24・25	竪穴住居3	床直	砥石	粘板岩	6.7	2.95	2.25	64.0	
S45	24	竪穴住居3	床直	台石	角閃石安山岩	30.0	24.8	10.9	12500.0	図版14-4

竪穴住居4の土層堆積（図26）

番号	層名	色調	備考	番号	層名	色調	備考
①	黒褐色土	(Hue10YR 3/2)	炭混	⑮	にぶい黄橙色土	(Hue10YR 7/3)	
②	暗灰黄色土	(Hue2.5YR 4/2)		⑯	にぶい黄褐色土	(Hue10YR 4/3)	炭、VI・VII層ブロック少量混
③	暗灰黄色土	(Hue2.5YR 5/2)		⑰	明黄褐色土	(Hue10YR 6/6)	炭、VI・VII層ブロック少量混
④	にぶい黄橙色土	(Hue10YR 6/4)	炭少量混	⑱	黄褐色土	(Hue10YR 5/8)	炭、VI層ブロック少量混
⑤	にぶい黄褐色土	(Hue10YR 5/3)	炭少量混	⑲	にぶい黄褐色土	(Hue10YR 5/3)	
⑥	明褐色土	(Hue7.5YR 5/6)	炭、VI層ブロック少量混	⑳	黒褐色土	(Hue10YR 3/3)	炭少量混
⑦	明赤褐色土	(Hue2.5YR 5/6)	焼土、炭混	㉑	にぶい黄褐色土	(Hue10YR 5/4)	VII層・黄褐色土ブロック少量混
⑧	にぶい黄橙色土	(Hue10YR 5/4)	炭、VI層ブロック、焼土少量混 貼床	㉒	にぶい黄褐色土	(Hue10YR 5/4)	
⑨	明黄褐色土	(Hue10YR 6/6)	炭少量、VI層ブロック多量混	㉓	黄褐色土	(Hue10YR 5/6)	
⑩	にぶい黄褐色土	(Hue10YR 6/3)		㉔	にぶい黄褐色土	(Hue10YR 5/3)	炭、VI層ブロック少量混
⑪	にぶい黄褐色土	(Hue10YR 5/3)	炭、焼土少量混	㉕	褐色土	(Hue10YR 4/4)	VII層ブロック少量混
⑫	にぶい黄褐色土	(Hue10YR 5/4)		㉖	黄橙色	(Hue10YR 7/8)	
⑬	褐灰色土	(Hue10YR 4/1)	VI・VII層ブロック少量混				
⑭	にぶい黄褐色土	(Hue10YR 5/4)	炭少量混				

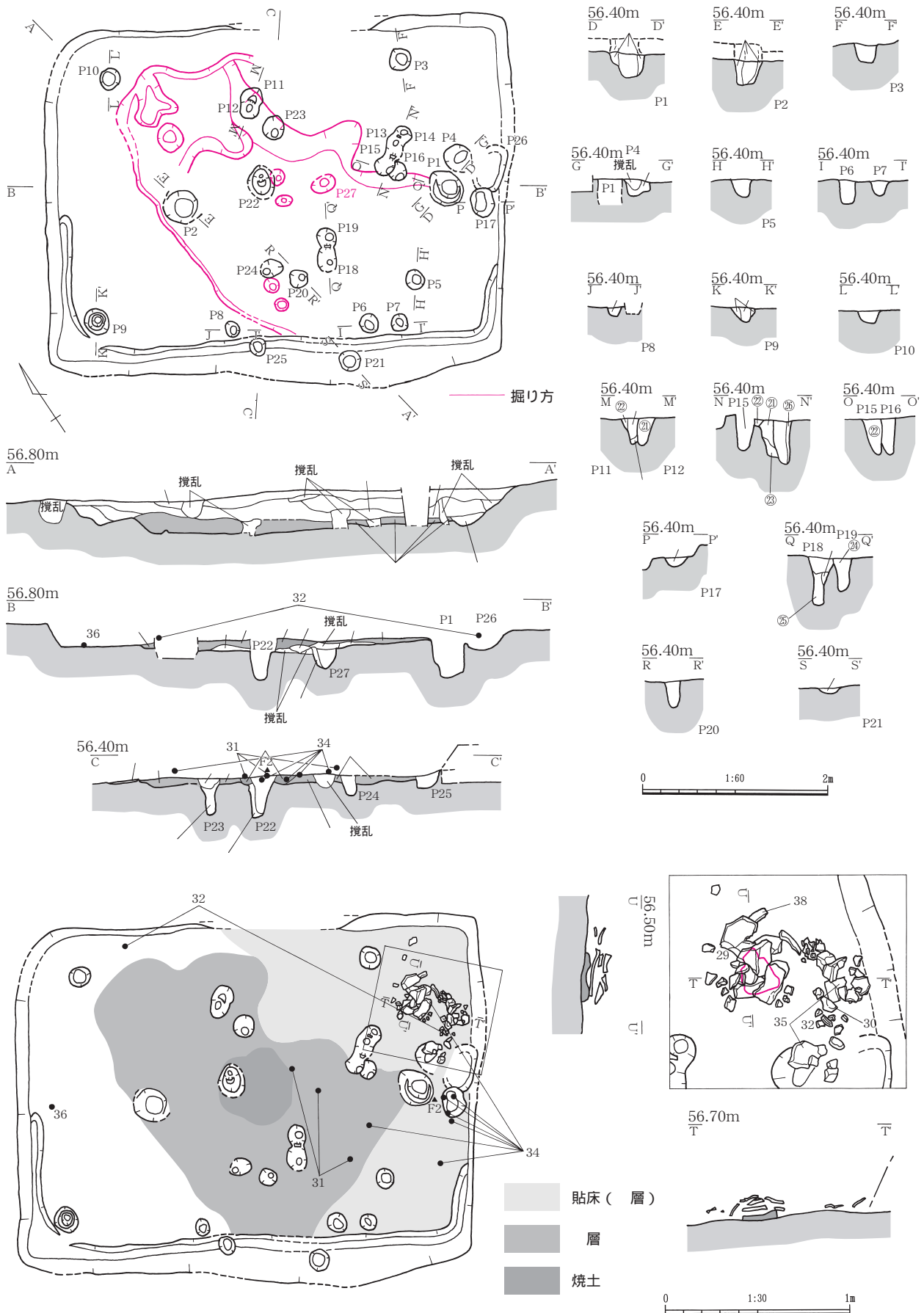


図26 竪穴住居4

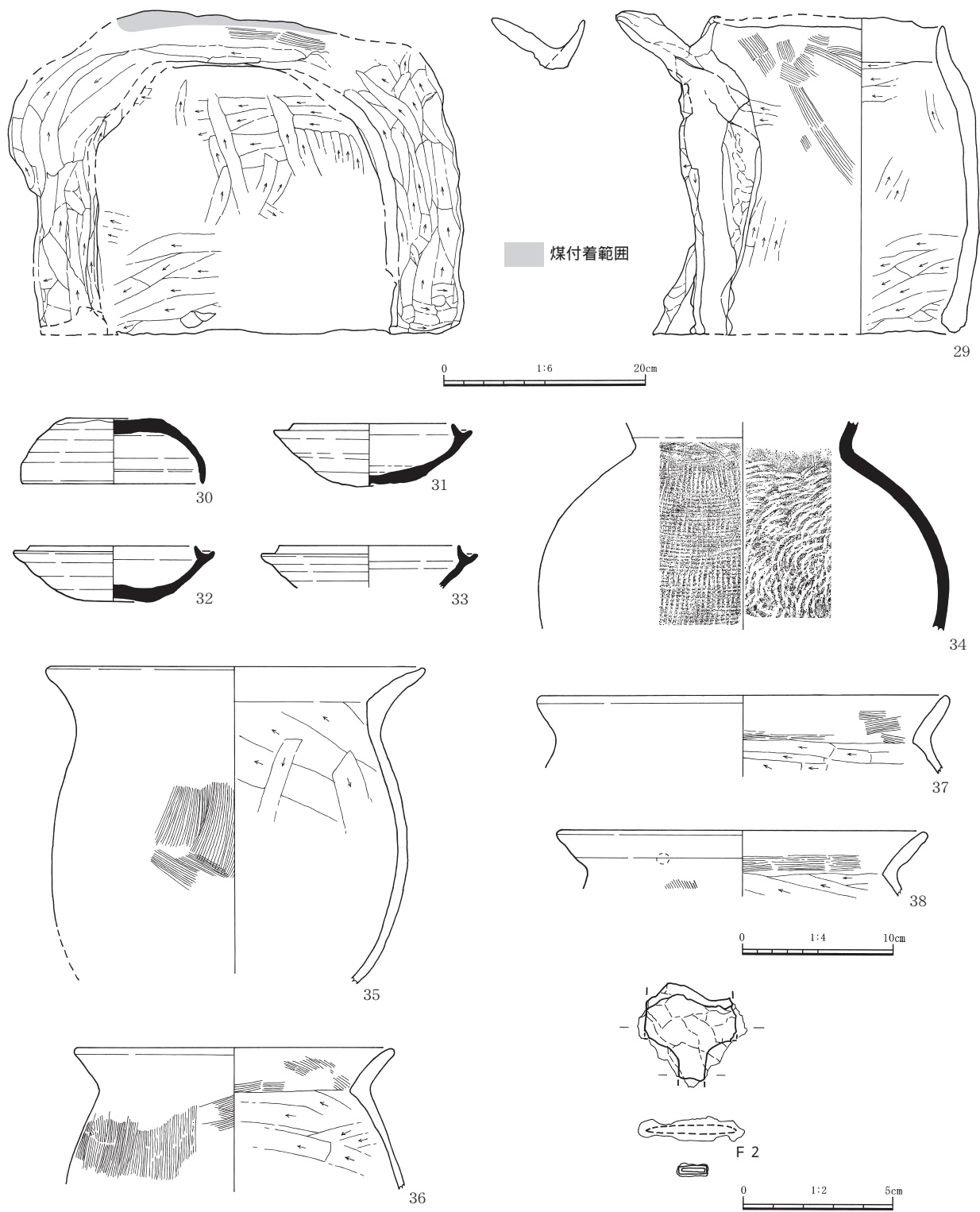


図27 竪穴住居4出土遺物

床面直上より出土した土器が示す時期から、本遺構は弥生時代終末期に属すると考える。隣接する竪穴住居2との時期差はほとんど認められないが、先後関係についてははっきりしない。

(加藤)

遺物番号	挿図番号	遺構層位	種別	器種	口径(cm) (底)	器高 (cm)	特徴	胎土 焼成	色調	備考
29	27	竪穴住居4 床直	土製品	移動式竈	* 24.0	33.25	体部外面：ハケ、ナデ、ケズリ 内面：ケズリ、ナデ 底部内面：ハケ後ナデ・ケズリ、煤付着箇所有り 底部外面：ハケ、ナデ、ケズリ	砂粒多量 良	橙色	焚口縁に底貼付 胎土分析試料11
30	27	竪穴住居4 床直	須恵	坏蓋	* 12.8 (*6.5)	4.4	外面：口縁部～体部回転ナデ 天井部回転へラ切り後粗いナデ 内面：口縁部～体部回転ナデ 天井部回転ナデ後不整方向ナデ	砂粒少量 良	灰黄褐色	胎土分析試料19 ロクロ回転方向右
31	27	竪穴住居4 床直	須恵	坏身	* 11.0 (4.9)	4.1	外面：口縁部～体部回転ナデ 底部回転へラ切り後粗いナデ 内面：口縁部～体部回転ナデ 底部回転ナデ後不整方向ナデ	砂粒少量 良	灰色	胎土分析試料18 ロクロ回転方向左
32	27	竪穴住居4 床直	須恵	坏身	* 11.2 (*4.7)	3.7	外面：口縁部～体部回転ナデ 底部回転へラ切り後粗いナデ 内面：口縁部～体部回転ナデ 底部回転ナデ後不整方向ナデ	砂粒少量 良	灰黄褐色	胎土分析試料16 ロクロ回転方向左
33	27	竪穴住居4 床直	須恵	坏身	* 12.2	△3.0	外面：口縁部～体部回転ナデ 内面：口縁部～体部回転ナデ	砂粒少量 良	灰黄褐色	胎土分析試料17
34	27	竪穴住居4 床直	須恵	甕	—	△13.8	外面：頸部回転ナデ、体部ナデ・タタキ 内面：頸部回転ナデ、体部ナデ・当て具痕	砂粒少量 良	外面：灰色 内面：明オリブ灰	胎土分析試料20
35	27	竪穴住居4 床直	土師	甕	* 25.6	△22.0	外面：口縁部ナデ、胴部ハケ・ナデ 内面：口縁部ナデ、胴部ケズリ	砂粒・礫多量 良	外面：浅黄褐色 内面：にぶい橙色	胎土分析試料14
36	27	竪穴住居4 床直	土師	甕	* 21.0	△9.4	外面：口縁部風化著しく不明、胴部ハケ・ナデ 内面：口縁部ハケ・ナデ、胴部ケズリ	砂粒多量、礫少量 良	にぶい黄褐色	胎土分析試料13
37	27	竪穴住居4 床直	土師	甕	* 27.2	△5.2	外面：口縁部～肩部上半風化のため不明 内面：口縁部ハケ・ナデ、胴部上半ケズリ	砂粒多量、礫少量 良	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色 にぶい橙色	胎土分析試料12
38	27	竪穴住居4 床直	土師	甕	* 24.2	△4.2	外面：口縁部ナデ・ユビオサエ、肩部ハケ・ナデ 内面：口縁部ハケ・ナデ、胴部ケズリ	砂粒多量、礫少量 良	にぶい黄褐色、 橙色	胎土分析試料15

遺物番号	挿図番号	遺構層位	遺物名	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	磁精度	メタル度	特徴
F 2	27	竪穴住居4 ⑨層	鉄製品（鍛造品）鏃、有茎三角式？	3.5	3.7	1.05	7.8	2	錆化(△)	下手側に平作りの茎部がわずかに残る有茎三角式鉄鏃。 鏃身部は大半が破面で元の形状を読み取りにくい。右側の側部 はわずかに生きている可能性あり。両側の返りは欠落する。

4. 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代に属する遺構は竪穴住居1棟に留まる（図17）。土師器・須恵器片を表土・攪乱土中で確認したが、I層中に包含しているかどうかは判然としない。先述したように、調査地中央部東側～南側にかけて検出したピット群のいずれかは当該期に属する可能性がある。

（加藤）

竪穴住居4（図26・27 カラー図版3・4 図版11・12）

I・J9グリッドに位置し、表土下V層上面で検出した。平面形が長形状を呈する竪穴住居である。床面の長軸4.7m、短軸3.5m、床面積は約16.6㎡、検出面からの深さは最大で33cmを測る。住居北東部は後世に掘削された溝により削平を受け（図7）、残存状況は不良である。

床面には住居北東～東側にかけて貼床（⑧層）が施され、表面が固く締まる。中央部は一段深く掘り込まれ、基盤土に類似し若干の炭が混じる⑨層が充填され、西～南西側は基盤層（VI層）をそのまま床面としている。周壁溝は住居南側を中心に認められた。住居北半は残存状態が悪いため全周していたかどうかは不明である。ピットは多数検出され、27基を数える。埋土は概ね褐・黄褐色系土で基盤土ブロックや炭を少量包含する。他に黒褐色系土を埋土とするものを多数検出したが、断面観察から大方が根攪乱と判断し除外している。ピット1・2は共に径約35cm、床面からの深さは40cm強を測り、位置と規模から支柱穴と考えられる。いずれも柱痕が遺存している（⑩・⑱層）。また、ピット3・5・9・10は深さ15～21cmと浅いが住居四隅に位置することから、上屋構造を支える補助柱の可能性を考えている。貼床除去後の底面には若干の凹凸がみられ、掘り方と判断した。貼床下ではピット27を検出している。

出土遺物は埋土上・中層から土器片が少量出土しているが、床面直上出土遺物について図示した（図26・27）。29は移動式竈である。焚口の周縁に底を貼り付けるタイプで、底部裏側に煤の付着が確認できる。住居内北東端においてつぶれた状況で出土した。直下には硬化した焼土が遺存しており、

その厚さは約9 cmである。焼土の平面的な広がりや竈の基部径とほぼ一致することから、竈の使用痕跡と思われ、竈は原位置を留めていると考える（図26中拡大図）。また、焼土位置とその周辺にかけてわずかな窪みが認められる。竈をしっかりと据えるためと推測するが、竈周辺は根攪乱の影響が認められ、明確ではないため可能性に留める。一方、住居のほぼ中央で平面形が不整な円形を呈する焼土の広がりを確認した。断面形は浅く椀状に窪み、炭混じりの焼土（⑦層）が堆積する。地床炉と思われるが、ピット22に切られている。ピット22の埋土は他のピットと同様に黄褐色系を呈するため、床面から掘り込んだものと判断した。住居を建てた後、ある段階で炉の使用を止めた可能性が考えられる。竈との併用の有無等、両者の使用について関係性が窺われるが、判然としない。竈の近辺には土師器甕（35・37・38）、須恵器甕（34）・坏蓋（30）・坏身（32）が出土しており、竈付近に置かれていたものと考えられる。また、鉄製品が一点出土し（F 2）、残存状態が不良だが有茎三角式鉄鍬の可能性はある。

床面直上出土の須恵器坏蓋・坏身（30～33）は出雲編年5期、陶邑編年TK217型式に併行すると考えられ、これらの年代観から本遺構は古墳時代終末期に属すると考える。

（加藤）

※製鉄関連遺物観察表中の「磁着度」とは鉄滓分類用の標準磁石を用いて資料との反応を1～8までの数字で表現したもので、数値が大きいほど磁着度が強い。「メタル度」とは小型金属探知機により判定された金属鉄の残留度を示し、H・M・L・特Lの4段階で表される。後者ほど残留度が高い。本遺跡堅穴住居2・4出土鉄製品はいずれも「錆化」で、金属鉄が残留していないことを示す。

5. その他の遺構と遺物

調査地では前述の遺構に加えて、掘立柱建物7棟、堅穴1基、土坑15基、溝3条、多数のピットを確認した（図7・28）。多くの遺構は地山面のV層上面で検出し遺物もほとんど出土せず、時期が不明なものである。調査地中央部～南側、堅穴住居の分布域に掘立柱建物も概ね位置するが、堅穴住居

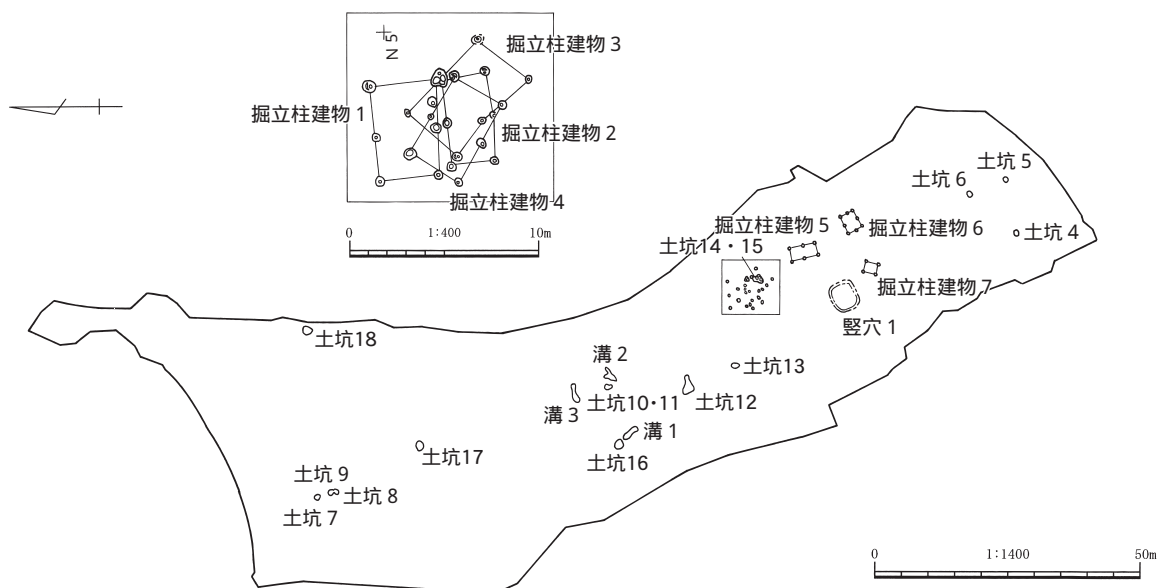


図28 その他の遺構配置

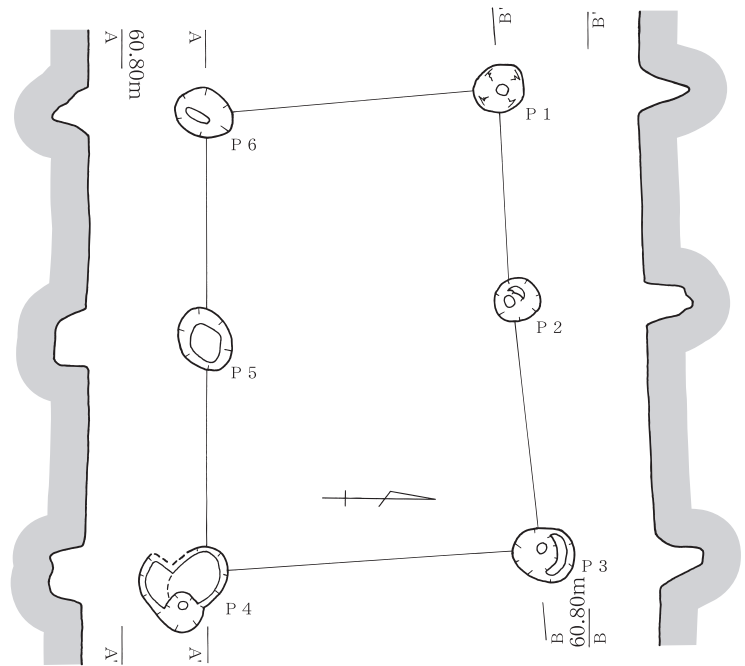
とのセット関係は不明である。製炭土坑と考えられる遺構は調査地北半に分布する。ピットは664基を確認し、調査地中央部～南側に多く分布する。柱痕が遺存しないものが大半である。ピット個々の詳細については、本節末尾に計測表を掲げているので参照されたい。

(加藤・日置)

掘立柱建物 1 (図29 図版5-1)

台地上中軸よりやや東側のM・N5グリッド、I層下のⅢ層上面で検出した。梁行1間、桁行2間の掘立柱建物である。柱間距離は梁行約3.5m、桁行平均2.4m、床面積は16.3㎡である。方位は約3度北に傾いた東西棟である。棟は等高線に対して平行する。なおピット4は掘立柱建物2ピット3と掘立柱建物3ピット2と重複する。図示できなかったが埋土の観察から、掘立柱建物1－掘立柱建物2－掘立柱建物3の順に建てられたと考える。掘立柱建物4とも重複するが、その新旧関係は不明である。柱穴の埋土は黒褐色系であった。柱穴からは遺物は出土しなかった。建物の時期は不明である。

(日置)



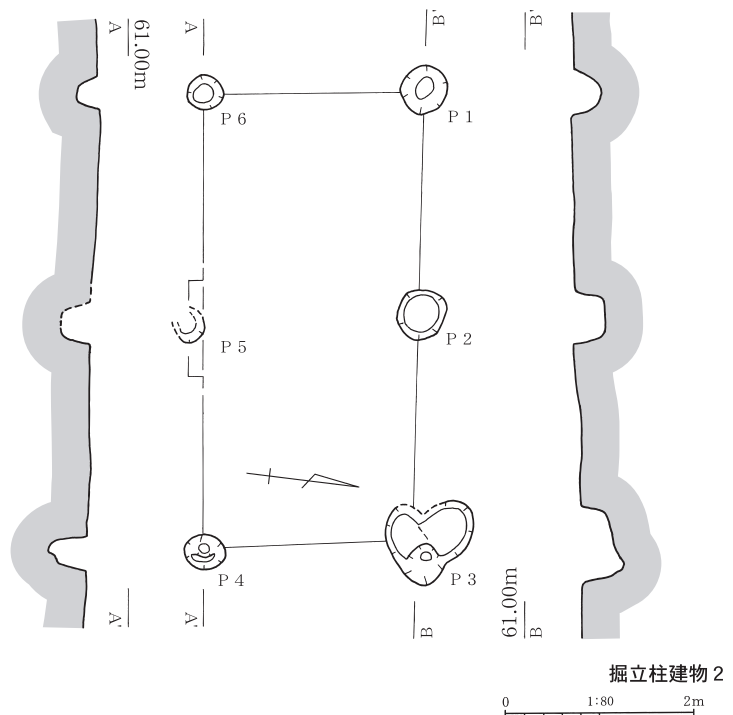
掘立柱建物 1

掘立柱建物 2

(図29 図版5-2)

N5グリッドにおいて、I層下のⅢ層上面で検出した。梁行1間、桁行2間の掘立柱建物である。柱間距離は梁行約2.1m、桁行平均2.4mである。床面積は11.04㎡である。方位は7度北に傾いた東西棟である。棟は等高線に対して平行する。前述したようにピット3は、掘立柱建物1ピット4と掘立柱建物3ピット2と重複する。これらの新旧関係は前述の通りである。掘立柱建物4とも重複するが、その新旧関係は不明である。柱穴の埋土は黒褐色系であった。遺物は出土しなかった。建物の時期は不明である。

(日置)

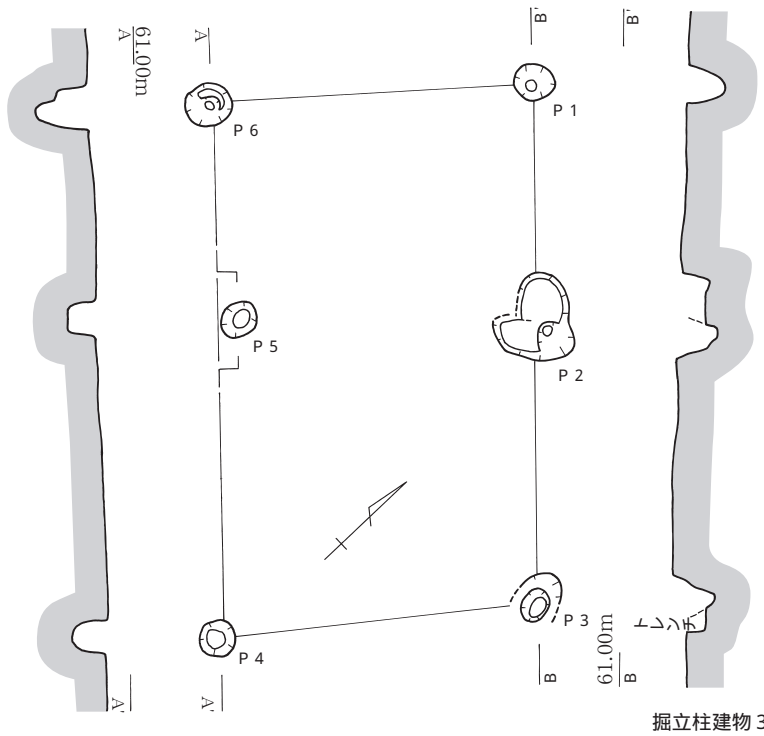


掘立柱建物 2

図29 掘立柱建物 1・2

掘立柱建物 3 (図30 図版5-2)

N5グリッド、I層下のⅢ層上面で検出した。梁行1間、桁行2間の掘立柱建物である。柱間距離は梁行約3.4m、桁行は平均2.8mである。床面積は19.3㎡である。方位は42度西に傾いた南北棟である。前述のように、ピット2は掘立柱建物1ピット4と、掘立柱建物2ピット3と重複する。新旧関係は前述の通りである。掘立柱建物4とも重複するが新旧関係は不明である。柱穴の埋土は黒褐色系であった。遺物は出土しなかった。建物の時期は不明である。



(日置)

掘立柱建物 4

(図30 図版5-2)

N5グリッドにおいて、I層下のⅢ層上面で検出した。梁行1間、桁行2間の掘立柱建物である。柱間距離は梁行約3m、桁行平均2.4m、床面積15.8㎡である。方位は32度北に傾いた東西棟である。掘立柱建物1～3と重複するが、これらとの新旧関係は不明である。遺物は出土しなかった。建物の時期は不明である。

(日置)

掘立柱建物 5

(図31 図版5-3)

台地の中軸よりやや東側、平坦に近い部分に位置する。O4グリッドにおいて、1層下のV層上面で検出した。梁行1間、桁行2間の掘立柱建物である。柱間距離は梁行約2.4m、桁行平均2.5mである。床面積は11.8㎡である。方位は12度西に傾いた南北棟である。棟は等高線に平行する。柱穴の埋土は黒褐色系を呈する。柱穴から遺物は出土しなかった。建物の時期は不明である。

(日置)

掘立柱建物 6

(図31 図版6-1)

台地の東側に位置する。現況地形

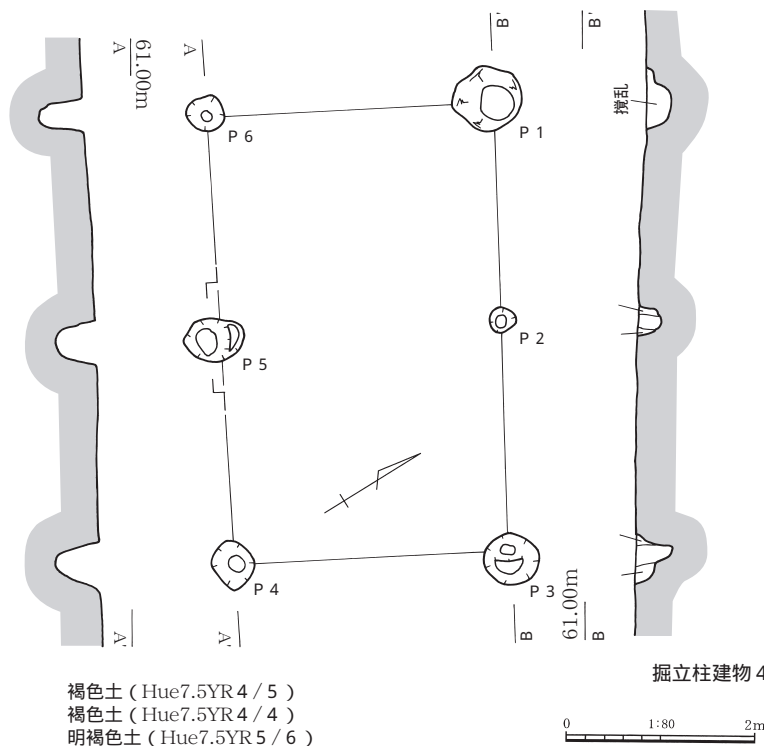


図30 掘立柱建物 3・4

における縁辺に近く、竪穴住居2に隣接する。P4グリッドにおいて、I層下のV層上面で検出した。梁行2間、桁行2間の掘立柱建物である。柱間距離は、梁行平均1.4m、桁行平均1.5mである。床面積は7.5㎡である。方位は30度北に傾いた東西棟である。ほかの建物に比べ、斜面に立地し、棟は等高線に対し直交する。柱穴の埋土は褐色を呈する。ピット5とピット7から弥生土器の細片が出土したが、図化できなかった。弥生時代終末期に属する建物の可能性がある。

(日置)

掘立柱建物7

(図32 図版6-2)

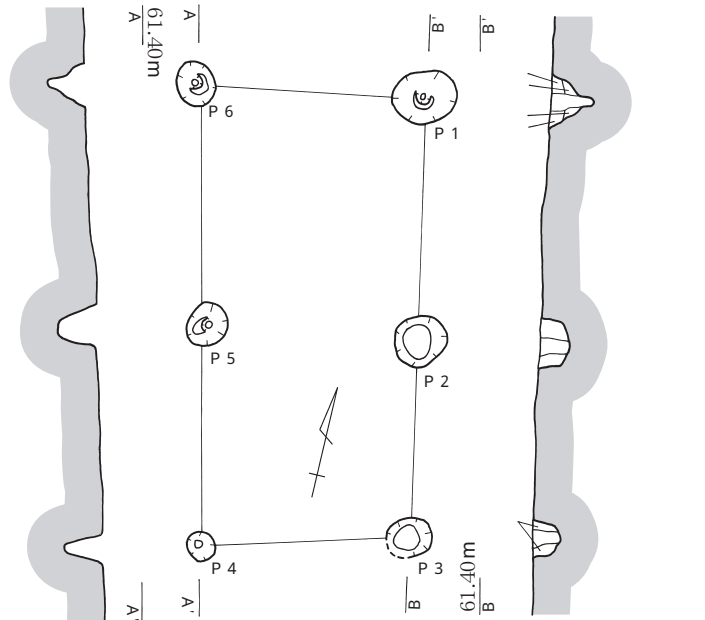
台地のほぼ中軸上に立地する。P5グリッドI層下のV層上面で検出した。梁行1間、桁行1間の掘立柱建物である。柱間距離は梁行2.0m、桁行2.6mである。床面積は5.2㎡である。方位は20度東に傾いた南北棟である。柱穴から遺物は出土せず、時期は不明である。

(日置)

竪穴1

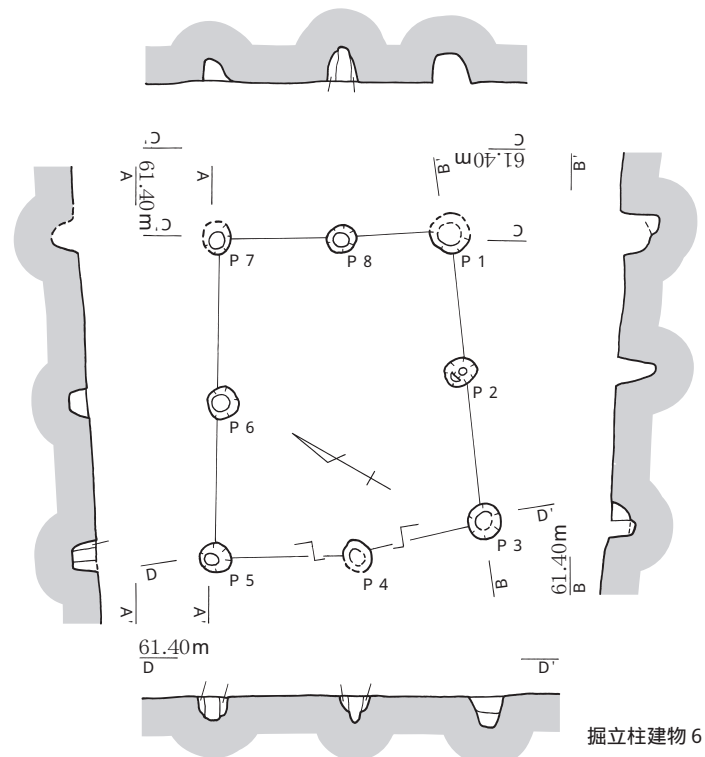
(図33 図版6-3)

台地のほぼ中軸上に位置する。O・P5グリッドにおいて、I層下V層上面で検出した。上屋構造を復原できず、竪穴と呼称する。平面は不整な方形で、規模は長軸5.6m、短軸4.9mである。検出面からの深さは約24cm、床面の標高は約61.10mである。床面はVI層上面にあたり凹凸がみられる。周壁下に断続的な1条の周壁溝を検出した。この周壁溝を切るピット1を検出したが、柱痕は遺存せず、小型で位置的にも主柱穴ではない。床面にはこのほかに遺構を見出せなかった。また、掘り方の周囲でも竪穴1に伴うと推察できる柱穴や土坑は見出せず、焼土面や炭化物などの痕跡も認められなかった。



黒褐色土 (Hue7.5YR3/2)
 暗褐色土 (Hue7.5YR3/4)
 褐色土 (Hue7.5YR4/4)
 褐色土 (Hue7.5YR4/4) 黒褐色土ブロック混

掘立柱建物5



黒褐色土 (Hue7.5YR3/2) 炭化物少量、褐色土ブロック混
 黄褐色土 (Hue10YR5/8) 褐色土ブロック多量混
 黒褐色土 (Hue7.5YR3/2)
 褐色土 (Hue7.5YR4/4) 黒褐色土ブロック多量混
 褐色土 (Hue7.5YR4/6)

掘立柱建物6

0 1:80 2m

図31 掘立柱建物5・6

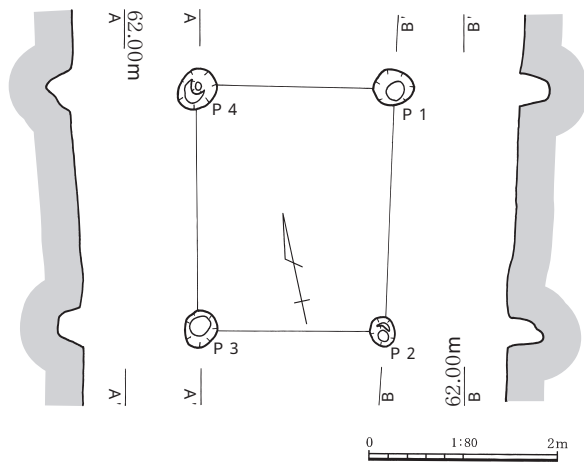


図32 掘立柱建物7

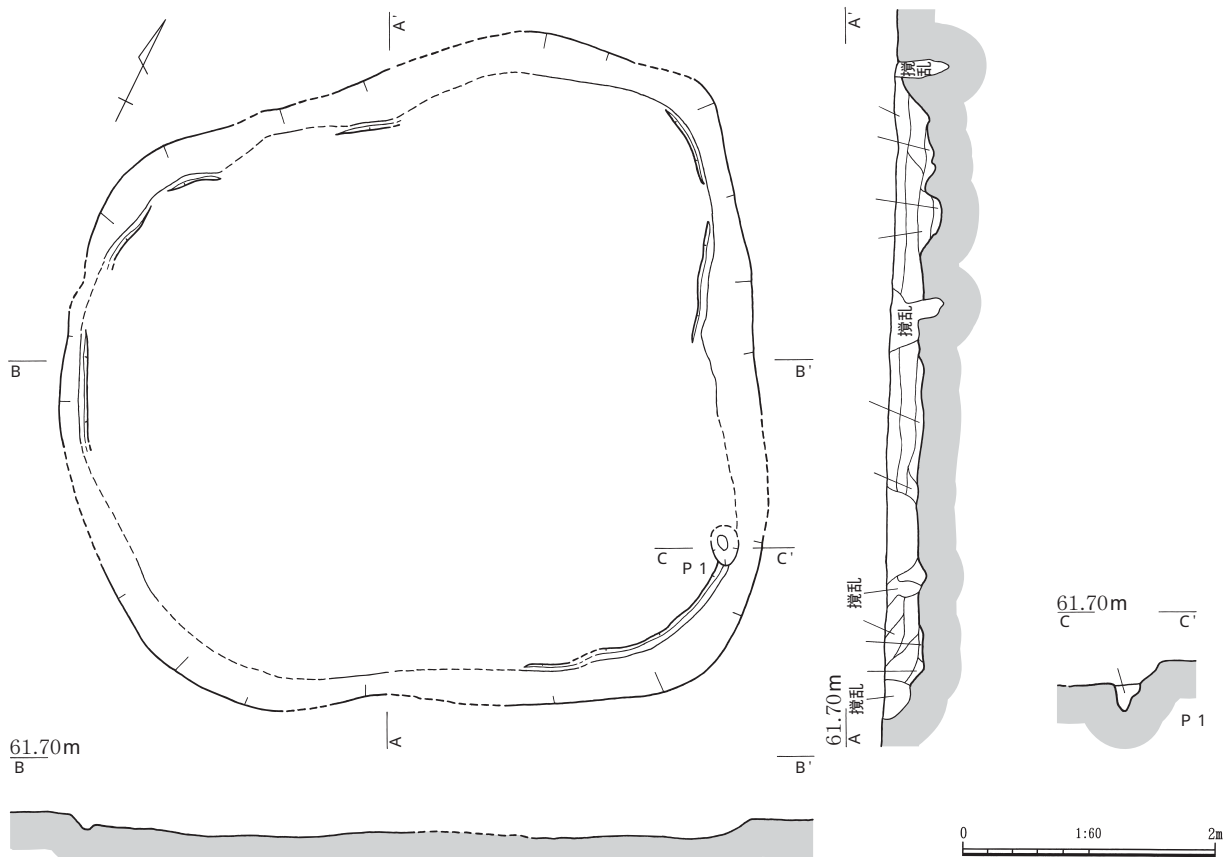
攪乱のため境界が明確ではない。溝1が土坑16に先行すると考えられる。北西-南東方向に主軸をとり、その走向は直線的で、等高線にほぼ直交する。幅は北西部0.8m、南東部1.0m、中央部0.6mである。底面の標高は、北西端57.7m、南東端57.8mであり、北西端がやや低い。検出面から底面までの

埋土は概ね褐色を呈し、地山土をブロック状に含むことから、人為的に埋められた可能性がある。①層は土坑と思われるが、大部分がトレンチ内であって記録できなかった。本遺構から遺物の出土はなく、時期は不明である。

(日置)

溝1 (図34 図版7-1)

調査地中央部西側L8グリッド、標高57.9~58.1mの緩斜面上に位置し、Ⅲ層下、Ⅴ層上面で検出した。北西端は土坑16に接するが、



褐色土 (Hue7.5YR 4 / 4) 明褐色土ブロック少量混
 褐色土 (Hue7.5YR 4 / 6) 暗褐色土ブロック混
 褐色土 (Hue7.5YR 4 / 6)
 明褐色土 (Hue7.5YR 5 / 8) 褐色土ブロック多量混
 褐色土 (Hue7.5YR 4 / 6) 層ブロック混
 明褐色土 (Hue7.5YR 5 / 6) 暗褐色土ブロック混
 褐色土 (Hue7.5YR 4 / 6) 明褐色土ブロック混

明褐色土 (Hue7.5YR 5 / 6) 褐色土ブロック、層ブロック少量混
 褐色土 (Hue7.5YR 4 / 6) 明褐色土ブロック、層ブロックとも多量混
 橙色土 (Hue7.5YR 6 / 8) 層ブロック少量混
 褐色土 (Hue7.5YR 6 / 6) 層ブロック多量混
 褐色土 (Hue7.5YR 5 / 8) 橙色土ブロック、層ブロック混
 褐色土 (Hue7.5YR 4 / 6) 明褐色土ブロック少量混

図33 竪穴1

深さは20cmである。埋土は褐色土を主体とし、流水の痕跡は窺えない。遺物は出土していないため、遺構の時期は不明である。

(木山)

溝 2

(図16・35 図版 7-2・15-3)

調査地中央部東側K 6・7グリッド、標高58.1~58.2mの緩斜面上に位置する。Ⅲ層下、Ⅴ層上面で検出した。北東-南西方向に主軸をとり、平面形態は「y」字状を呈し、等高線にほぼ平行する。幅は北東端0.3m、北西端0.3m、中央部1.1m、南西端0.8mである。底面の標高は、北東端58.1m、北西端58.0m、中央部58.0m、南西端58.1mであり、検出面から底面までの深さは10~20cmである。埋土は橙色土を主体とし、溝3の埋土と類似している。流水の痕跡は窺えない。遺物は、安山岩を素材とする石匙(S37)が底面よりわずかに浮いた状態で出土しており、別項に図示した(図16)。土器片も出土しているが、残存状況が不良なため、遺構の時期は不明である。

(木山)

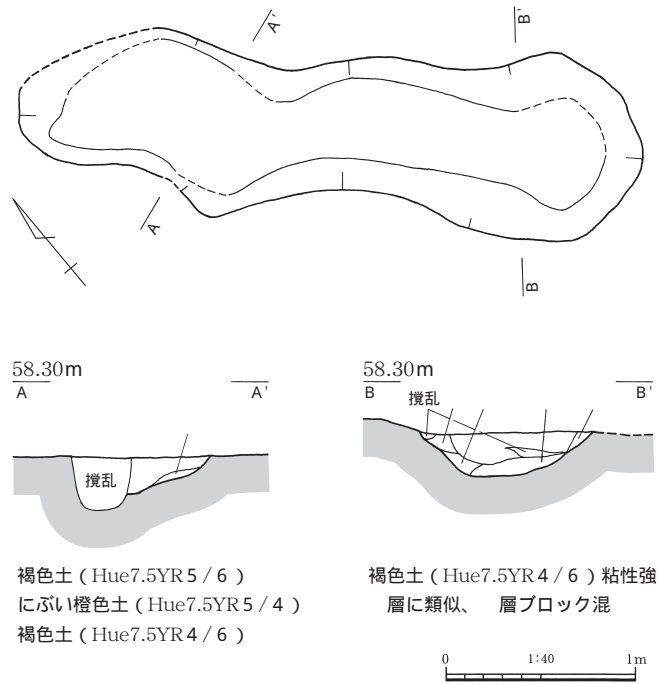


図34 溝 1

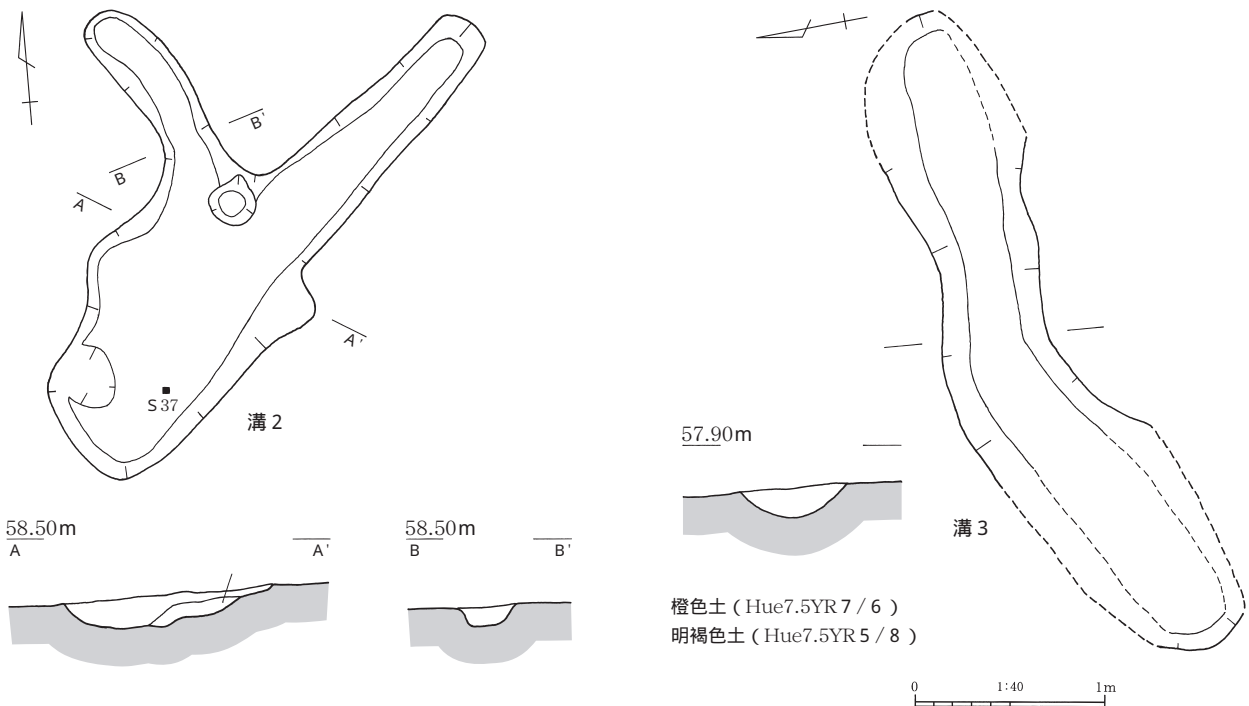


図35 溝 2・3

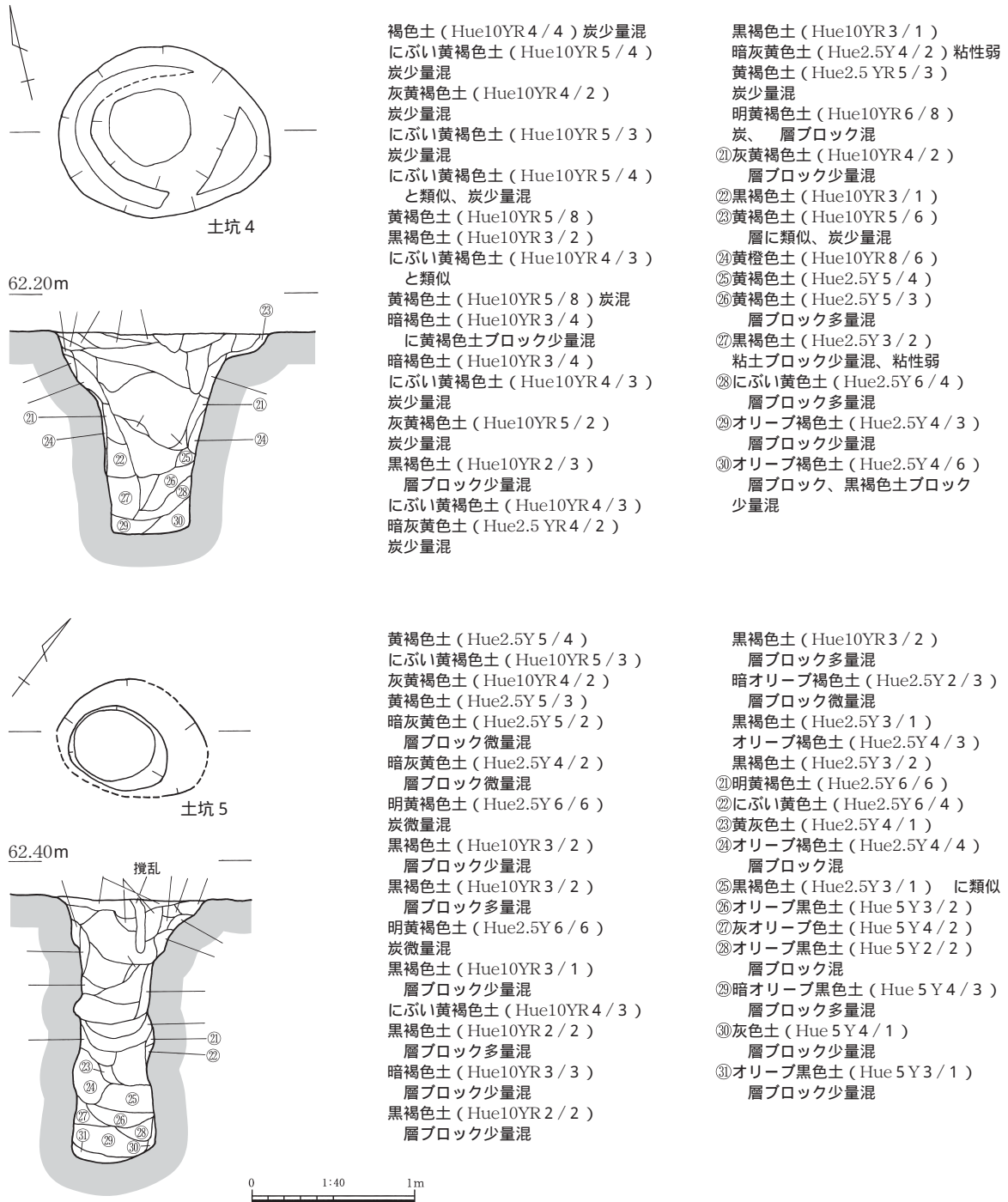


図36 土坑 4・5

溝 3 (図35 図版 7-3)

調査地中央部東側K7グリッド、標高57.6~57.7mの緩斜面上に位置する。Ⅲ層下、Ⅴ層上面で検出し、西側部分がトレンチで切られている。南東側6mに溝2が位置している。東-西方向に主軸をとり、その走向は直線的で、等高線にはほぼ平行する。幅は0.5~0.8mである。底面の標高は、東端57.6m、西端57.5mであり、西側がわずかに低い。検出面から底面までの深さは20cmである。埋土は橙色土を主体とし、流水の痕跡は窺えない。遺物の出土はなく、遺構の時期は不明である。

(木山)

土坑 4

(図36 図版 8 - 4)

調査地南西側S 4 グリッド、標高62.0mの平坦面上に位置する。I層下、V層上面で検出した。平面形態は、長軸1.3m、短軸1.1mの不整な楕円形を呈する。ほぼ垂直に掘り込まれ、上方において開き気味に立ち上がる。底面は平坦で径0.5mのいびつな円形である。検出面から底面までの深さは120cmである。埋土上層は炭が少量混じる黄褐色系土、中層が黒褐色系土、下層が基盤層ブロックを包含する褐色系土である。出土遺物はなく、遺構の時期は不明であるが、形態から落とし穴の可能性はある。

(木山)

土坑 5

(図36 図版 8 - 5)

調査地南東側S 3 グリッド、標高62.1mの平坦面上に位置する。I層下、V層上面で検出した。平面形態は、長軸0.9m、短軸0.7mの不整な楕円形状を呈する。断面はほぼ垂直に立ち上がる。底面はややくぼんだ平面径0.5mの楕円形である。検出面から底面までの深さは160cmである。埋土は黒褐色土を主体とし、底面近くに基盤層ブロックが混じる黒色系土が堆積している。遺物は埋土上位より土器片が出土したが、残存状況が不良で、遺構の時期比定は難しい。底面にピットを持たないが、形態から落とし穴であろう。

(木山)

土坑 6 (図37 図版 8 - 6)

調査地南東側R 3 グリッド、標高61.9mの平坦面上に位置する。I層下、V層上面で検出した。南側上面部分はトレンチ内の検出である。平面形態は、長軸0.9m、短軸0.8mの不整な楕円形を呈すると思われる。断面はほぼ垂直に立ち上がり、底面はややくぼんだ平面径0.5mのいびつな楕円形である。検出面から底面までの深さは140cmである。埋土は基盤層ブロックが混じる黄褐色系土を主体と

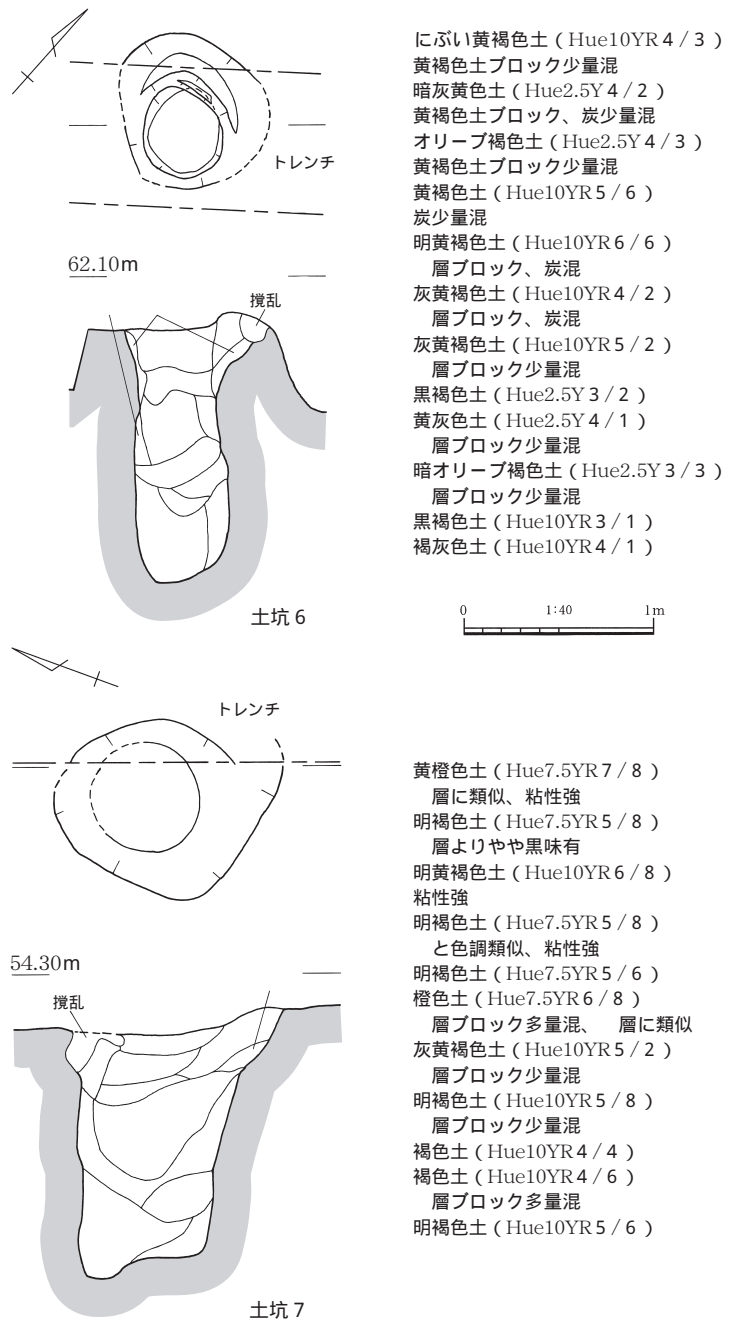


図37 土坑 6・7

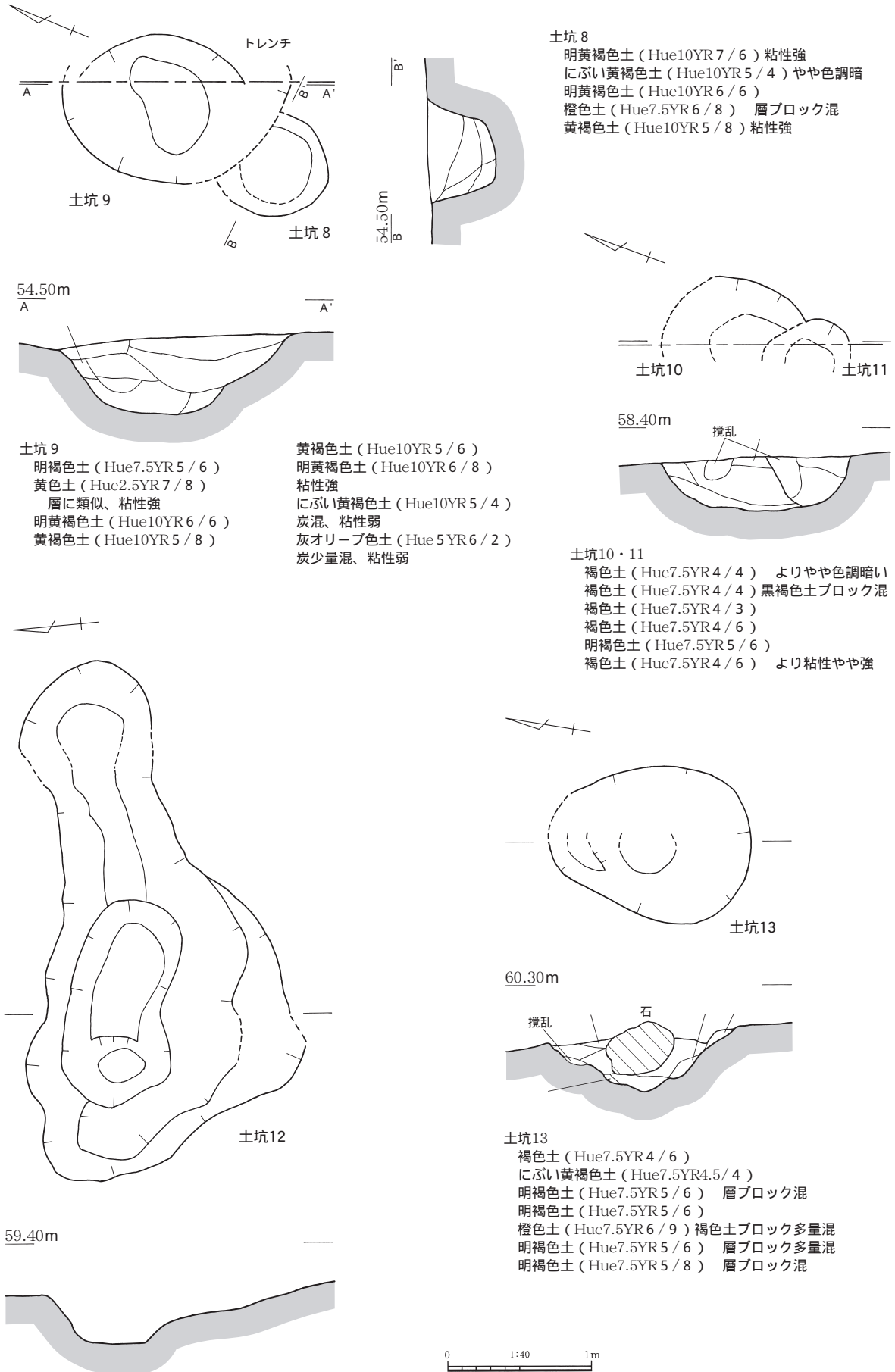


図38 土坑 8・9・10・11・12・13

し、底面近くに黒褐色土が堆積している。出土遺物はなく、遺構の時期は不明である。底面にピットを持たないが、形態から落とし穴と考える。

(木山)

土坑7 (図37 図版9-1)

調査地北西側F9グリッド、標高54.1mの緩斜面上に位置する。I層下、V層上面で検出した。北東側がトレンチで切られている。平面形態は、長軸1.2mの隅丸方形と思われる。断面はほぼ垂直に立ち上がり、上面においてやや開き気味となる。底面は北側がくぼむ径0.6mの不整な円形である。検出面から底面までの深さは140cmである。埋土は上層に明褐色系土、中層に基盤層ブロックが混じる黄褐色系土、下層は基盤層ブロックが混じる褐色系土が堆積している。出土遺物はなく、遺構の時期は不明であるが、形態から落とし穴の可能性はある。

(木山)

土坑8・9 (図38 図版9-3・4)

調査地北西側F9グリッド、標高54.3mの緩斜面上に位置する。I層下、V層上面で検出した。土坑8・9は重複しているが、土層断面の観察より、土坑9が土坑8を掘り込んでおり、土坑9は土坑8に後出する。また、土坑9は北東側がトレンチと重複する。平面形態は土坑8が長軸0.7mの円形、土坑9が長軸1.6mの楕円形である。底面は土坑8が比較的平坦な円形、土坑9がレンズ状にくぼむ不整な楕円形である。検出面から底面までの深さは、土坑8が50cm、土坑9が60cmを測る。埋土は、土坑8・9ともに黄褐色系土を主体とし、土坑9の下層には炭が混じる。両遺構ともに出土遺物はなく、遺構の時期は不明である。

(木山)

土坑10・11 (図38 図版9-2)

調査地中央部東側K7グリッド、標高58.2mの緩斜面上に位置する。Ⅲ層下、V層上面で検出し、西側部分がトレンチで切られている。土坑10・11は重複しているが、土坑11が土坑10を掘り込んでおり、土坑11は土坑10に後出する。平面形態は土坑10が長軸1.0mの円形、土坑11が長軸0.6mの円形を呈すると思われる。断面はいずれも緩やかに立ち上がり、底面は比較的平坦である。検出面から底面までの深さはともに40cmを測る。埋土は褐色系土を主体とし、土坑11には黒褐色土ブロックが混じる。遺物はいずれも土器片が出土したが、残存状況が不良なため、遺構の時期は不明である。

(木山)

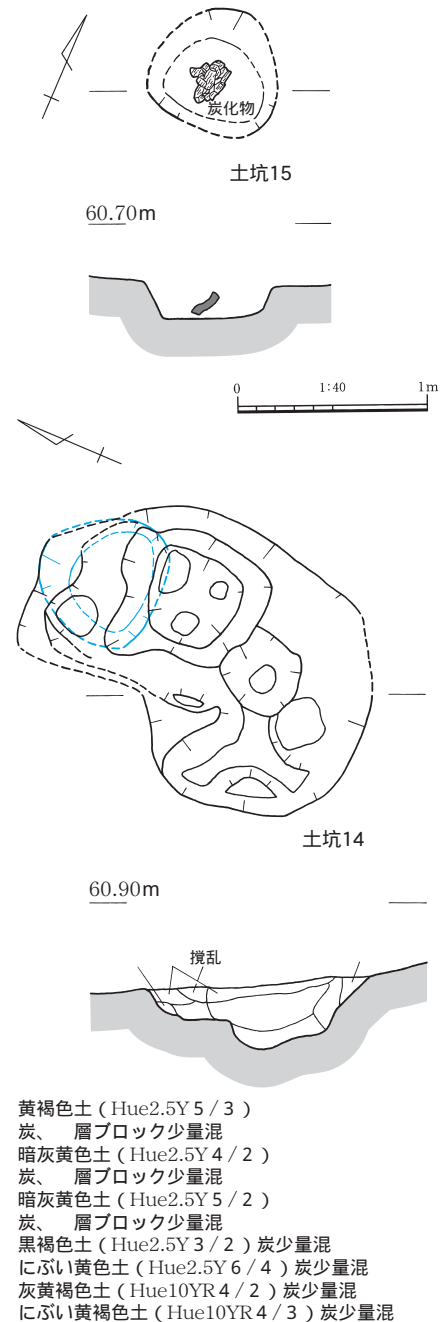


図39 土坑14・15

土坑12 (図38 図版9-5)

調査地中央部西側M7グリッド、標高59.0～59.1mの緩斜面上に位置する。Ⅲ層下、Ⅴ層上面で検出した。平面形態は長軸3.2m、短軸1.8mを測る不整形である。東側はテラス状の段を持ち、検出面から底面までの深さは40cmである。出土遺物はなく、遺構の時期は不明である。

(木山)

土坑13 (図38 図版9-6)

調査地中央部西側N6グリッド、標高59.9～60.0mの緩斜面上に位置する。Ⅱ層下、Ⅲ層上面で検出した。平面形態は、長軸1.4m、短軸1.1mの不整な楕円形である。底面は径0.4mの円形を呈すると思われる、検出面から底面までの深さは50cmである。埋土は基盤層ブロックの混じる明褐色土を主体として堆積している。縦47cm、横40cm、幅10cm、重さ25.0kgの平石が、立った状態で出土した。人為的な所作による可能性があるが、他に出土遺物はなく、遺構の性格や時期は不明である。

(木山)

土坑14・15 (図39 図版10-1・2・3)

調査地中央部東側N5グリッド、標高60.3～60.5mの緩斜面上に位置する。Ⅲ層下、Ⅴ層上面で検出した。土坑14・15は重複しており、土坑15が土坑14を掘り込み、土坑15は土坑14に後出する。土坑14は、平面形態は長軸2.0m、短軸1.4mの不整形、西側に1段テラスをもち、中心よりやや北東部を最深部として、レンズ状にくぼむ。検出面から底面までの深さは60cmである。埋土は炭が混じる暗灰黄色土を主体として堆積し、上層では基盤層ブロックが混じる。出土遺物はない。土坑15は、平面形態は径0.7mの不整な円形、底面は長軸0.5m、短軸0.4mの不整形の楕円形を呈すると思われる。検出面から底面までの深さは20cmである。埋土は焼土と炭を含んだ褐色土が堆積し、中央付近で底部から少し浮いた状態で炭化材が出土した。土器片が出土したものの残存状況が不良なため、遺構の時期は比定できなかった。

(木山)

土坑16 (図40 図版10-4)

調査地中央部西側K8グリッド、標高57.9mの緩斜面上に位置する。Ⅰ層下、Ⅴ層上面で検出した。平面形態は、長軸1.8m、短軸1.5mの不整な隅丸方形を呈する。底面は長軸1.1m、短軸1.0mの隅丸方形で比較的平坦である。検出面から底面までの深さは40cmである。埋土は全体的に炭化物、焼土を含み、特に底面に炭化物・焼土を多量に包含する層(Ⅰ層)がある。南・北・東壁面と底面は被熱しており、焼土塊が認められた。炭化物層(Ⅰ層)には根が入りこみ、攪乱を受けている。遺物は埋土中から弥生時代終末期の土器片と黒曜石の剥片が出土しているが、流入の可能性が高く、遺構の時期は特定できない。本遺構は諸特徴から、製炭土坑であろう。

(木山)

土坑17 (図40 図版10-5)

調査地中央部北西側H8グリッド、標高55.7mの緩斜面上に位置する。表土下、Ⅴ層上面で検出した。中央部がトレンチで切られている。平面形態は、長軸1.7m、短軸1.3mの不整な楕円形で、底面は長軸1.1m、短軸1.0mのいびつな隅丸方形を呈する。検出面から底面までの深さは50cmである。埋土は全体的に炭塊を含んでおり、根による攪乱を強く受ける。底部に炭化物を多量に含む層(⑧・⑨層)が堆積し、東・西壁面には被熱痕跡が認められた。底部より直径3.5cm、長さ10cm程度の炭化

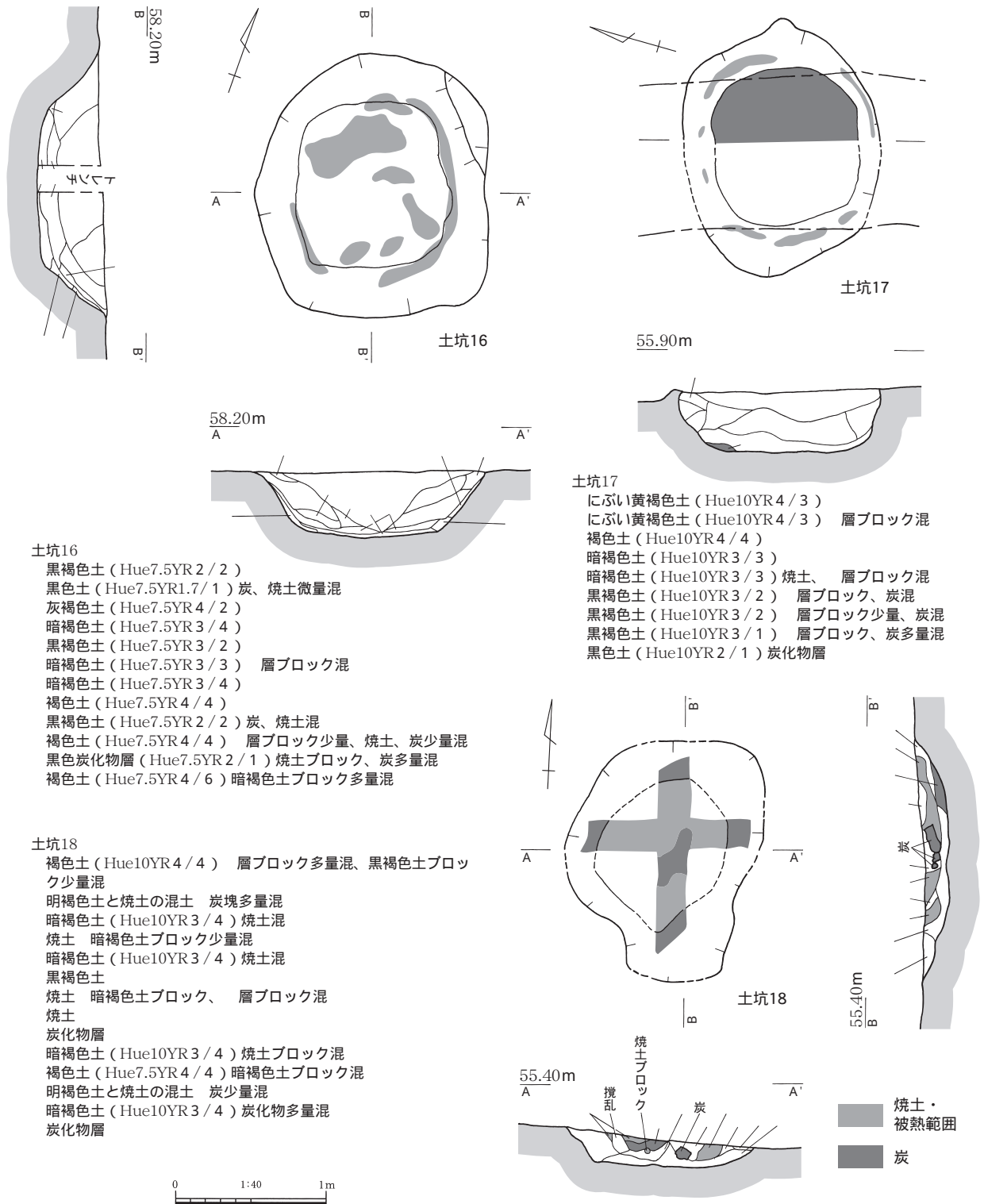


図40 土坑16・17・18

物が多数出土したが、他に出土遺物は認められず、遺構の時期は不明である。本遺構は諸特徴から、製炭土坑と考えられる。

(木山)

土坑18 (図40 図版10-6)

調査地北東部側F6グリッド、標高55.1mの緩斜面上に位置する。表土下、V層上面で検出した。平面形態は、長軸1.6m、短軸1.3mの不整な楕円形状を呈する。断面は緩やかに立ち上がり、底面は

長軸0.8mのいびつな楕円形で、検出面から底面までの深さは30cmである。埋土は全体的に炭と焼土を多量に含み、土坑中央の埋土上層に焼土塊が広がり、下層に炭化物を多く含む層（⑬・⑭層）が堆積している。土器等の出土遺物はなく遺構の時期は不明であるが、南側の凸部は焚口と考えられ、製炭土坑であろう。

(木山)

遺構外出土石器（図41・42 図版15-2）

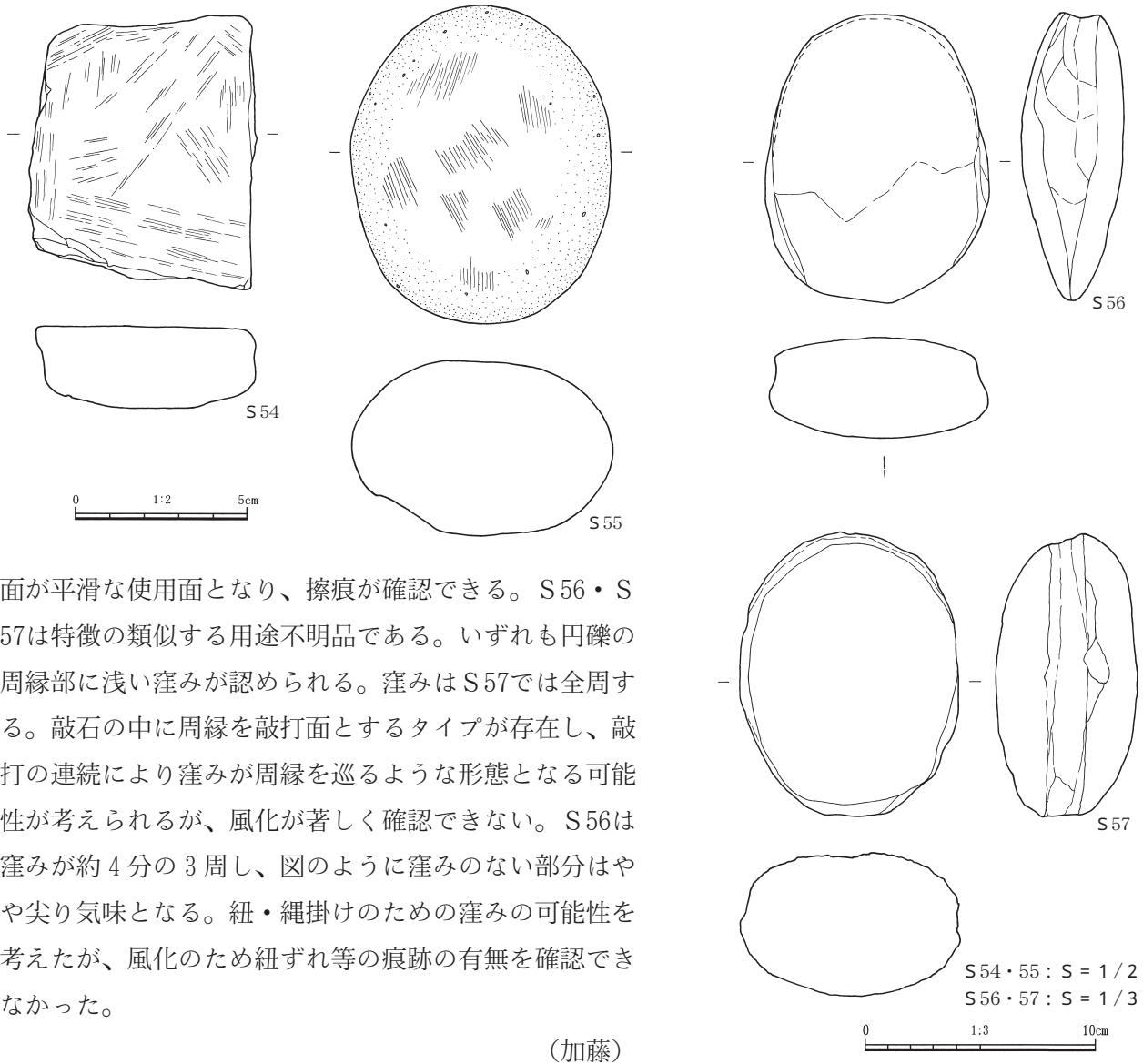
本項では用途不明の石器を含め、12点を図示した。

S46～S53は石錘である。いずれも円礫を使用し、S46～S52は長軸両端を打ち欠く打欠石錘である。S53は切目石錘に該当すると思われ、長軸両端の打ち欠きに加え、切り込みを入れている。本遺跡出土の石錘の重量は66.5g～143gで、200gを超える大型のものは出土していない。

S54は砥石で長石斑岩の角礫を用いており、片面に平滑面が認められる。S55は磨石で、円礫の片



図41 遺構外出土石器（1）



面が平滑な使用面となり、擦痕が確認できる。S56・S57は特徴の類似する用途不明品である。いずれも円礫の周縁部に浅い窪みが認められる。窪みはS57では全周する。敲石の中に周縁を敲打面とするタイプが存在し、敲打の連続により窪みが周縁を巡るような形態となる可能性が考えられるが、風化が著しく確認できない。S56は窪みが約4分の3周し、図のように窪みのない部分はやや尖り気味となる。紐・縄掛けのための窪みの可能性を考えたが、風化のため紐ずれ等の痕跡の有無を確認できなかった。

(加藤)

図42 遺構外出土石器（2）

遺物番号	挿図番号	地区 地層位	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
S46	41	I 10 表土下	石錘	安山岩	5.3	4.95	1.85	66.5	円礫長軸の両端打欠
S47	41	H 9 表土中	石錘	安山岩	3.95	3.55	1.6	32.4	円礫長軸の両端打欠
S48	41	G 7 V層上面	石錘	安山岩	6.15	4.9	2.1	92.0	円礫長軸の両端打欠
S49	41	F 10 表土下	石錘	安山岩	4.6	4.5	1.5	35.0	円礫長軸の両端打欠
S50	41	I 9 表土下	石錘	安山岩	6.2	6.6	1.9	91.5	円礫長軸の両端打欠
S51	41	R 3 I層	石錘	安山岩	6.5	5.1	2.15	94.5	円礫長軸の両端打欠
S52	41	F 8 表土下	石錘	安山岩	7.7	6.1	2.2	143.0	円礫長軸の両端打欠
S53	41	G 7 表土下	石錘	角閃石安山岩	6.6	4.1	2.6	94.0	円礫長軸の両端打欠・切込
S54	42	I 9 表土下	砥石	長石斑岩	7.9	6.7	2.5	209.0	
S55	42	F 8 表土下	磨石	安山岩	9.3	7.6	5.1	480.0	
S56	42	J 9 表土下	不明	安山岩	12.7	9.9	4.5	536.0	
S57	42	L 7 I層	不明	粗粒安山岩	12.5	9.7	6.3	849.0	

第4章 特論

1. 名和中畝遺跡出土土器胎土分析

岡山理科大学自然科学研究所 白石 純

分析の目的

名和中畝遺跡から出土した弥生時代終末、古墳時代後期の土器のあいだで時期が異なれば胎土がどうなるか検討した。また、古墳時代後期の土師器、須恵器、移動式竈と名和飛田遺跡の同時期の土器と比較し、胎土が類似しているかどうか調べた。

分析方法

分析は、蛍光X線分析法と実体顕微鏡による胎土観察の二つの分析法で検討した。

蛍光X線分析法では、エネルギー分散型蛍光X線分析計（セイコーインスツルメンツ社製SEA2010L）を使用し、胎土中の成分（元素）量を調べた。測定した成分は、13元素でそのうちK(カリウム)、Ca(カルシウム)、Rb(ルビジウム)、Sr(ストロンチウム)などの成分に顕著な違いがあることから、これらの成分を用いて、XY散布図を作成し検討した。

実体顕微鏡による土器表面の観察では、胎土に含まれる砂粒（岩石・鉱物）の種類、大きさ、含有量について調べた。

分析した土器は、下表に示した弥生時代10点、古墳時代10点の合計20点である。

蛍光X線分析法による分析結果

図43 K-Ca、図44 Sr-Rbの散布図では、遺跡内での時期ごとに胎土に違いがあるかどうか検討した。すると弥生時代終末期の土器が3つにわかれた。それは、1・4と7・10と2・3・5・6・8・9である。また古墳時代後期の土師器も2つにわかれた。それは、14と12・13・15で、須恵器は1つに

名和中畝遺跡出土土器分析値一覧表（%）ただし、Rb・Sr・Zrはppm

試料番号	出土遺構	層位	種別	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P	Rb	Sr	Zr	時期
1	竪穴住居1	㊸層上面	弥生土器	60.48	1.07	25.55	5.19	0.07	2.09	1.22	3.26	0.80	0.08	67	404	333	弥生終末期?
2	竪穴住居1	㊸層上面	弥生土器	65.64	0.99	19.73	6.06	0.06	1.98	0.67	2.76	1.76	0.13	203	250	354	弥生終末期?
3	竪穴住居1	㊸層上面	弥生土器	66.24	1.06	20.34	6.34	0.07	1.69	0.72	1.61	1.66	0.08	198	276	373	弥生終末期?
4	竪穴住居2	床直	弥生土器	63.95	1.08	23.02	4.73	0.05	1.89	1.58	2.27	1.14	0.09	163	493	348	弥生終末期
5	竪穴住居2	㊸層上面	弥生土器	65.55	1.08	20.81	6.65	0.07	1.95	0.55	1.06	1.93	0.05	235	193	336	弥生終末期
6	竪穴住居2	床直	弥生土器 甕	64.92	1.10	20.94	6.42	0.07	1.82	0.63	1.92	1.90	0.06	196	197	416	弥生終末期
7	竪穴住居2	床直	弥生土器 甕	66.55	1.01	19.23	5.34	0.07	1.89	1.30	2.38	1.93	0.08	256	424	333	弥生終末期
8	竪穴住居3	床直	弥生土器 器台	66.95	1.12	20.27	3.99	0.03	1.79	0.65	2.96	1.94	0.12	190	281	319	弥生終末期
9	竪穴住居3	㊸層	弥生土器 甕	64.21	0.99	22.07	5.00	0.06	1.89	0.80	3.14	1.58	0.09	201	295	336	弥生終末期
10	竪穴住居3	床直	弥生土器 壺	66.46	1.16	19.64	4.74	0.05	1.88	1.29	2.02	2.43	0.12	258	423	291	弥生終末期
11	竪穴住居4	床直	移動式竈	64.34	0.92	19.93	5.89	0.08	2.10	1.34	3.22	1.85	0.13	174	435	263	古墳時代後期
12	竪穴住居4	床直	土師器 甕	65.99	1.16	20.92	6.10	0.07	1.96	1.10	0.52	1.82	0.08	223	327	428	古墳時代後期
13	竪穴住居4	床直	土師器 甕	63.47	1.15	21.16	5.66	0.07	2.12	0.96	3.33	1.74	0.14	212	317	304	古墳時代後期
14	竪穴住居4	床直	土師器 甕	63.66	1.05	22.60	4.72	0.06	2.03	1.80	2.67	1.10	0.11	102	533	284	古墳時代後期
15	竪穴住居4	床直	土師器 甕	64.61	1.03	20.87	5.49	0.06	2.03	1.10	2.67	1.84	0.08	208	371	344	古墳時代後期
16	竪穴住居4	床直	須恵器 坏身	68.72	0.88	18.32	4.76	0.05	2.01	0.40	2.89	1.66	0.11	179	126	358	古墳時代後期
17	竪穴住居4	床直	須恵器 坏身	71.04	0.81	17.56	3.39	0.03	1.76	0.39	2.78	1.82	0.17	178	133	324	古墳時代後期
18	竪穴住居4	床直	須恵器 坏身	69.35	0.83	18.60	3.80	0.04	1.97	0.35	2.96	1.73	0.16	198	127	311	古墳時代後期
19	竪穴住居4	床直	須恵器 坏蓋	71.32	0.90	16.78	4.34	0.04	1.72	0.31	2.34	1.82	0.22	235	128	387	古墳時代後期
20	竪穴住居4	床直	須恵器 甕	67.51	1.45	18.62	5.81	0.08	2.00	0.32	2.39	1.43	0.14	166	143	536	古墳時代後期

まとまった。

図45 K-Ca、図46 Sr-Rbの散布図では、古墳時代後期の時期に限定して名和飛田遺跡と比較し、胎土に違いがあるか検討した。その結果、両遺跡とも土師器と須恵器で胎土に違いがみられ、識別できた。また、移動式竈も土師器の分布域に入った。なお、名和中畝遺跡の14のみが単独で分布した。

実体顕微鏡観察（肉眼観察）による結果

実体顕微鏡による肉眼観察では胎土に含まれる砂粒の岩石、鉱物の種類を同定した。観察倍率は10倍～30倍で随時観察した。

弥生時代終末期および古墳時代後期の土器には3mm以下の石英、長石、0.5mm以下の角閃石と3mm以下の安山岩が含まれていた。14の土師器は他の土器に比べ、石英などの砂粒が少なく角閃石が多く観察された。

まとめ

名和中畝遺跡出土土器の胎土分析(蛍光X線分析法・砂粒観察)を実施した結果、以下のことが指摘できよう。

遺跡内で時期ごとに胎土に違いがあるかどうかでは、弥生時代終末期の土器が蛍光X線分析で3つに分類できたが、実体顕微鏡による砂粒観察では差はみられなかった。古墳時代後期では14が他の土器に比べ、角閃石の砂粒が多くみられ、識別できた。また、弥生時代終末期と古墳時代後期の砂粒観察では、弥生のほうが、石英などの砂粒が少ない傾向にあった。そして、須恵器では1つにまとめり同じ産地からもたらされた可能性がある。

以上のように、古墳時代後期の名和飛田遺跡との比較では、器種・質により分布域がほぼ似ていた。データ試料を蓄積し追認する必要がある。

この分析の機会を与えていただいた、鳥取県埋蔵文化財センターの職員の方々には、いろいろご教示いただいた。末筆ではありますが記して感謝いたします。

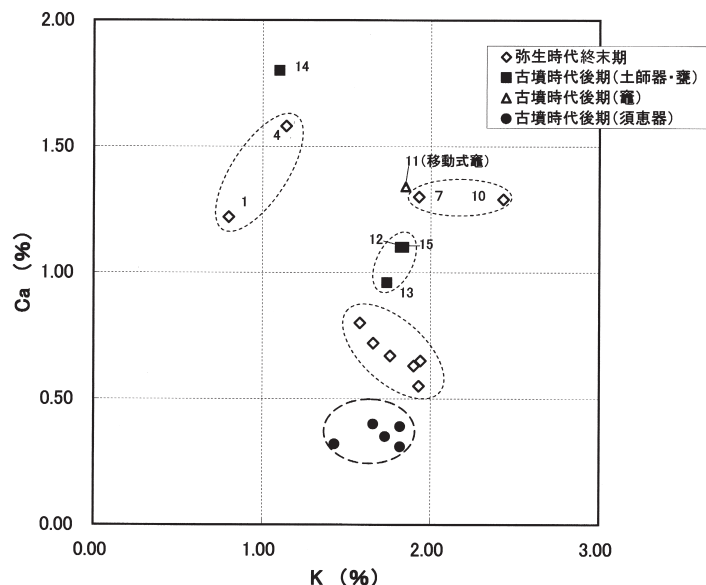


図43 遺跡内での時期別の胎土比較(K-Ca)

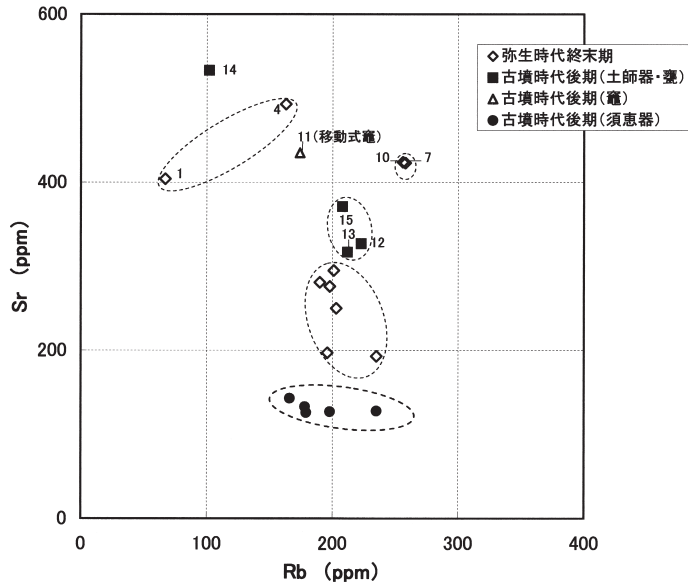


図44 遺跡内での時期別の胎土比較(Rb-Sr)

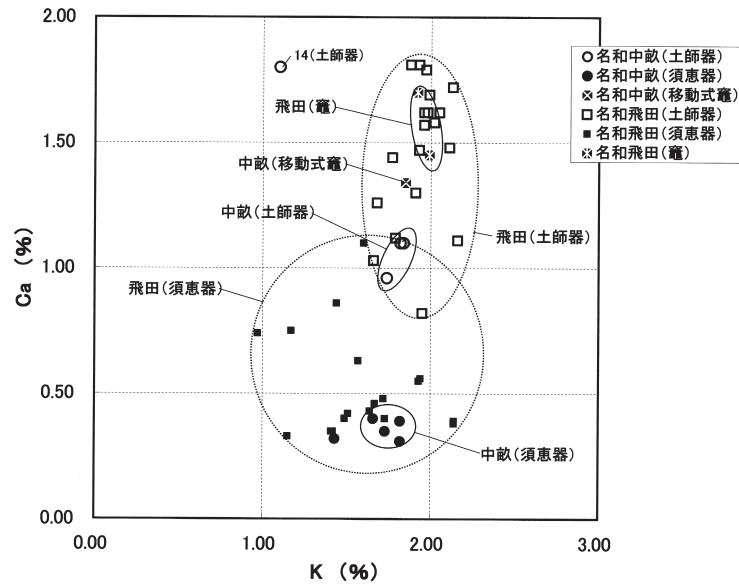


図45 古墳後期土器の器種・焼成別胎土の比較(K-Ca)

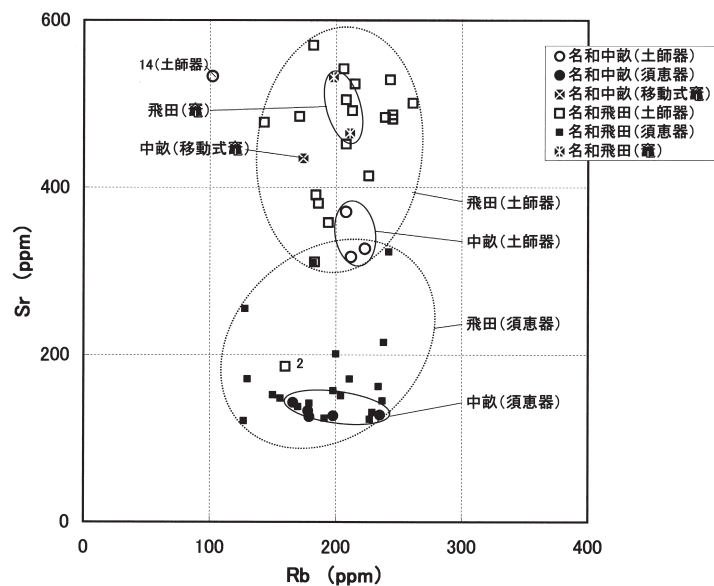


図46 古墳後期土器の器種・焼成別胎土の比較(Rb-Sr)

2. 名和中畝遺跡出土炭化材の樹種同定

パリーノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

名和中畝遺跡は、大山北麓に位置し、縄文時代～古墳時代の遺構が検出されている。このうち、弥生時代終末期の竪穴住居3からは住居構築材の可能性がある炭化材が出土している。

本報告では、木材利用状況についての情報を得るため、出土炭化材の樹種同定を実施する。

試料

試料は、竪穴住居3から出土した炭化材10点である。

分析方法

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

結果

樹種同定結果を右表に示す。炭化材は、広葉樹4種類（クリ・スダジイ・ヤマグワ・クスノキ科）に同定された。解剖学的特徴等を記す。

樹種同定結果

遺構	年代	番号	樹種
竪穴 住居3	弥生時代終末期	1	スダジイ
		2	スダジイ
		3	クリ
		4	スダジイ
		5	スダジイ
		6	ヤマグワ
		7	スダジイ
		8	クスノキ科
		9	クスノキ科
		10	スダジイ

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は2-3列、孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高。

・スダジイ (*Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii* (Makino) Nakai) ブナ科シイノキ属

環孔性放射孔材で、道管は接線方向に1-2列幅で放射方向に配列する。孔圏部は3-4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管の穿孔は基本的に単穿孔であるが、小道管に階段穿孔が認められることがある。壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高。

・ヤマグワ (*Morus australis* Poiret) クワ科クワ属

環孔材で、孔圏部は3-4列、孔圏外への移行は緩やかで、小道管は年輪界に向かって管径を漸減させ、のち塊状に複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-6細胞幅、1-50細胞高で、しばしば結晶を含む。

・クスノキ科 (Lauraceae)

散孔材で、管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独または2個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-2細胞幅、1-20細胞高。

考 察

樹種同定を行った炭化材は、全て弥生時代終末期の竪穴住居3から出土したものである。合計4種類の木材が確認され、スダジイが6点で最も多く、他の3種類は1、2点であった。この結果から、スダジイを中心に少なくとも4種類の木材が利用されていたことが推定される。

確認された種類のうち、クスノキ科を除く3種類は、重硬で強度が高く、クリやヤマグワは比較的耐朽性も高い。クスノキ科は、大径木になる種類から低木まで多くの種類があり、材質も比較的重硬なものからやや軽軟なものまで幅広い。これらの結果から、基本的には硬く強度の高い木材を選択していることが推定される。スダジイは、暖温帯常緑広葉樹林の構成種となる常緑高木である。一方、クリやヤマグワは、二次林等の落葉広葉樹林中に生育する落葉高木である。クスノキ科は、常緑性の種類が多いが、落葉性の種類も含まれており、科としての生育範囲は広い。

本遺跡周辺では、押平尾無遺跡で弥生時代終末期、古墳時代前期前葉とされる3軒の竪穴住居跡から出土した炭化材について樹種同定が実施されており、コナラ属アカガシ亜属、クリ、スダジイ、ヤマグワ、クスノキ科、イネ科が確認されている⁽¹⁾。コナラ属アカガシ亜属とイネ科を除く4種類は、今回の樹種同定結果でも認められた種類である。コナラ属アカガシ亜属は、クリやスダジイ等と同様に重硬で強度の高い材質を有する。一方、イネ科は材質を考慮すれば、屋根材等の萱材として利用された可能性がある。今回の結果は、押平尾無遺跡の結果とも調和的である。また、古御堂新林遺跡の弥生時代終末期の住居構築材と考えられる炭化材でもクリ、スダジイ、クスノキ科が認められており⁽²⁾、今回の結果と類似する結果が得られている。これらの結果から、本地域では弥生時代末から古墳時代前期初頭頃の住居構築材にクリ、スダジイ、クスノキ科などが多く利用されていた可能性がある。こうした木材は、周辺から入手していたと考えられ、遺跡周辺に常緑広葉樹のスダジイや落葉広葉樹のクリ、ヤマグワ等が生育していたことが推定される。

今回の樹種同定では少なくとも4種類が利用されていることが明らかとなった。しかし、同定点数は、1軒の住居構築材の総数に比較すれば少ない。また、硬い木材は燃焼の際に燃え残り易いことが推定される。実際に弥生時代終末期の6軒の住居跡から出土した炭化材の樹種同定を実施した倉吉市下張坪遺跡では、合計12種類の木材が確認されている⁽³⁾。そのため、本地域においても確認された他にも木材が利用されていた可能性があり、今後の資料蓄積が課題である。

註

(1) パリノ・サーヴェイ株式会社 2003「古御堂笹尾山遺跡・茶畑第1遺跡・押平尾無遺跡における出土炭化材の樹種」『鳥取県教育文化財団調査報告書93 茶畑遺跡群第3分冊 古御堂笹尾山遺跡 古御堂新林遺跡』鳥取県教育文化財団 3-187~3-191.

(2) 前掲(1)文献

(3) パリノ・サーヴェイ株式会社 1997「下張坪遺跡C地区から出土した炭化材の樹種」『倉吉市文化財調査報告書第88集 下張坪遺跡発掘調査報告書』倉吉市教育委員会 113-123.

第5章 まとめ

1. 調査のまとめ

この度の調査では、前述の通り縄文時代から古墳時代に至るまでの遺構や遺物を確認した。時期毎に留意点をいくつか述べ、まとめとしたい。

縄文時代

早期～中期に比定される土器片、黒曜石製を中心とした石器類を検出した。埋土から遺物の出土した土坑1・2・3を除いて、明確に当該期とする遺構は無いが、土坑4～7は形態から落とし穴の可能性が高い。落とし穴は縄文期の遺構として、大山北麓丘陵上に立地する近隣の遺跡からも数多く報告されている。また、多数確認された石器類の出土状況は、本遺跡周辺で石器製作が行われていたことを示している。今後は関連遺構の確認が課題といえよう。

弥生時代・古墳時代

弥生時代の遺構は竪穴住居1～3である。いずれも弥生時代終末期に属し、当地域では一般的な住居といえよう。竪穴住居3の北東隅で確認した集石(図24)の石材は角閃石黒雲母安山岩である。きめが粗く、竪穴住居1ピット13埋土中出土資料(根石)や敲石等に同材を使用している。簡便な礫石器用石材として利用されていたことが窺える。

竪穴住居1から南東へ約48m離れて竪穴住居2・3が分布するが、両住居間に多数検出されたピット群・掘立柱建物群の帰属が問題となる。掘立柱建物6のピット5・7埋土中からは、弥生時代終末期と思われる土器小片を確認しており当該期に属する可能性があるが、ピット562等からは古墳時代中期～後期と考えられる土器片を散見している。埋土の色調は大きく4種類確認したが、出土遺物との対応関係が掴めず、時期を明確にできなかった。

古墳時代の遺構として確実なのは、竪穴住居4のみである。先述のように、本住居からは移動式竈

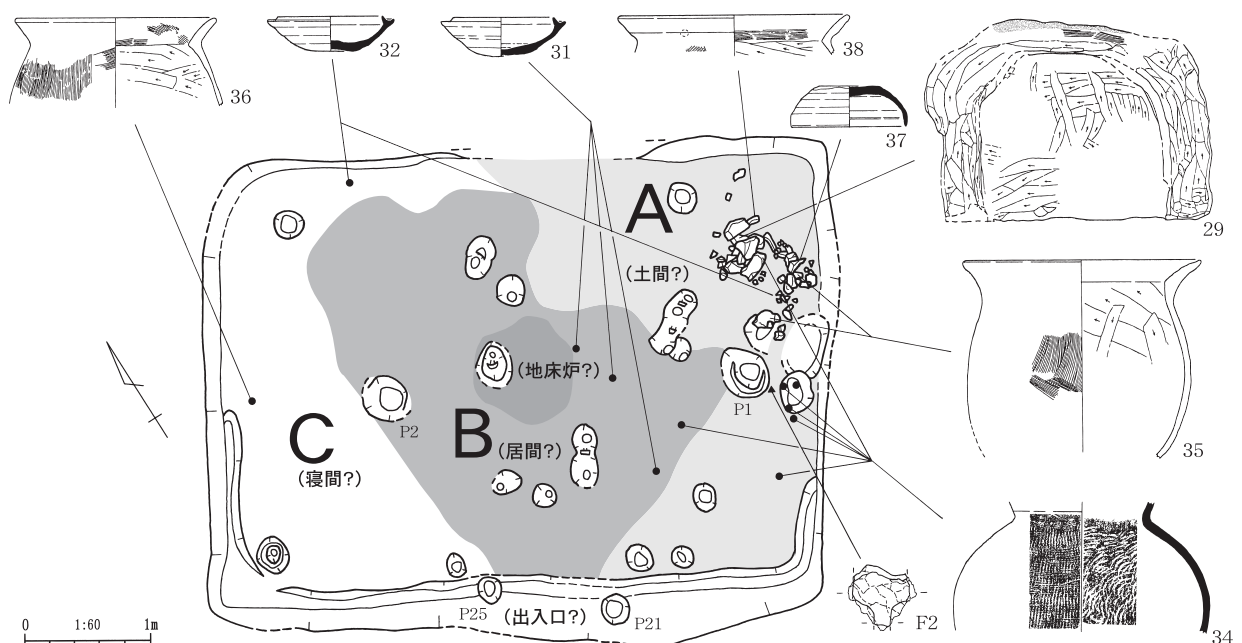


図47 竪穴住居4間取り想定図

が使用位置を留めた状況で出土した。また、床面の遺存状況が概ね良好で、須恵器や土師器等の遺物も比較的まとまった量が検出されている。本項では、これらを材料として本住居内の間取りについて一考してみたい。まず、床面を形成する土質の相違により、A・B・Cと3つの範囲に分類した(図47)。Aは貼床(図26中⑧層)の施された範囲で、表面が固く締まる。住居内北東～東部分を占め、北東隅に竈が位置する。32は攪乱のため若干動いていると思われるが、竈周辺には土師器甕、須恵器甕・坏蓋・坏身が置かれていたのであろう。床面検出遺物のほとんどがこの範囲に収まる。Bは平均で深さ10cm程掘り込まれ、図26⑨層が充填される範囲である。Aエリアのようなしまりは無い。住居内の中央部を占め、地床炉と思われる焼土の広がりを中心に位置する。Cは住居内西側の範囲で、基盤層であるVI層上面を直接床面としている。BとCの土質は近似しており、掘り込みの意図については判然としないが⁽¹⁾、両者を区別する意識は存在したと推測する。また、Bは住居南東壁の際まで広がり、その近くには浅いピット21・25が間隔1m程で並ぶ。梯子穴の可能性があり、入り口と想定する⁽²⁾。以上から各範囲の空間利用状況について推察すると、Aは竈を中心とした厨房、物置等のいわゆる土間、Bは炉を中心とした居間的な場所⁽³⁾、残るCは寝間となろうか。古墳時代における竈の導入により、竪穴住居の空間構造の中心が縄文時代以来の炉から竈に移行し、大きく変容することが指摘されている⁽⁴⁾。動産的な移動式竈の使用位置を推定できる例は少ないが⁽⁵⁾、類例の蓄積により当該期住居内の空間利用の実態に迫れるものと思われる。今後の課題としたい。

(加藤)

2. 移動式竈について

古墳時代中期(5世紀代)の竪穴住居には竈が造り付けられるようになり、炊飯形態に変化が生じる。こうした不動産的な竈に加えて、持ち運び可能な竈形土製品(移動式竈)が出現する。古墳時代後期(6世紀)には、畿内を中心に西日本で多数出土し、東日本でも関東を中心に出土例が増加している⁽⁶⁾。山陰地域は造り付け竈の検出例が少ない一方、移動式竈が出土する地域として知られる⁽⁷⁾。本節では従前の研究成果をふまえつつ、鳥取・島根両県の移動式竈について概観してみたい。

時期や形態がある程度明らかな代表例に限定し、地域、時期別に並べた(図49)。山陰地域における移動式竈の初現は、須恵器陶邑編年⁽⁸⁾TK208、TK23型式併行期頃に求められる。鳥取県園第6遺跡では、時期は下るが(陶邑MT85併行期)、畿内の初期須恵器共伴例に形態が類似した竈(図49中7)が出土しており、朝鮮半島系遺物の可能性が指摘されている⁽⁹⁾。6世紀後半になると出土量は増加し、出雲6B期(陶邑TK48併行)以降、徐々に出土量を減らしながら8世紀前半頃まで一定数みられる。その後両地域とも8世紀後半～9世紀代の資料を散見するが、その頃に収束していくものと思われる。

分布状況であるが、鳥取県は因幡・伯耆の両地域で出土している。ただ、山間地域の様相については調査例が少なく詳細は不明であり、今後の調査を待ちたい。

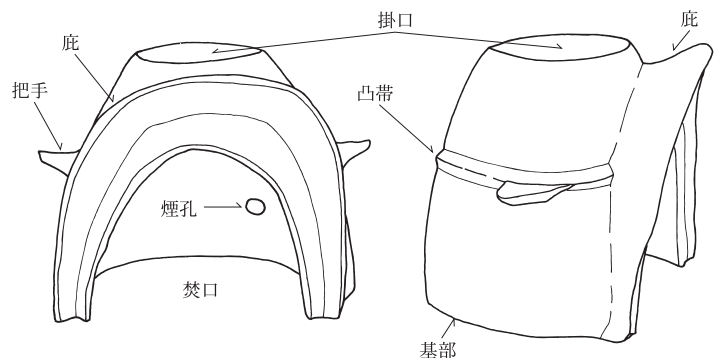
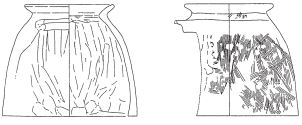
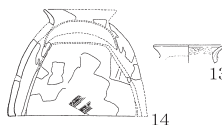
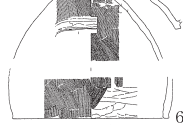





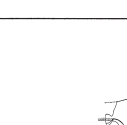
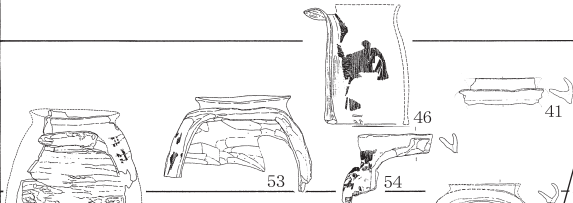
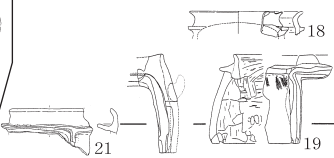
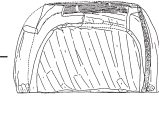
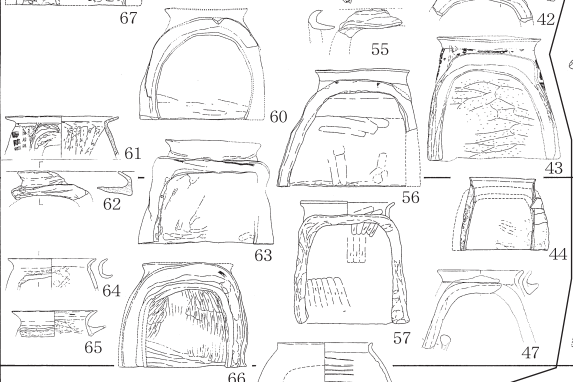
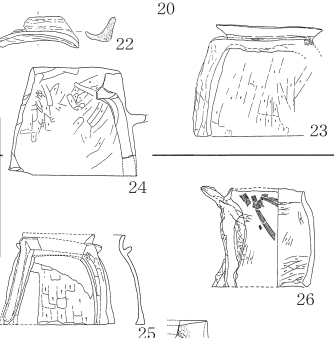
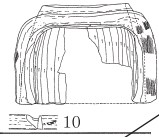
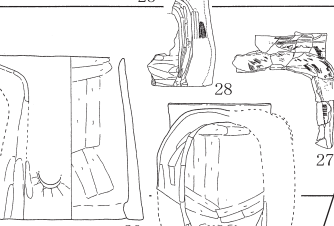
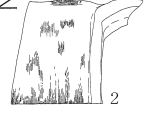
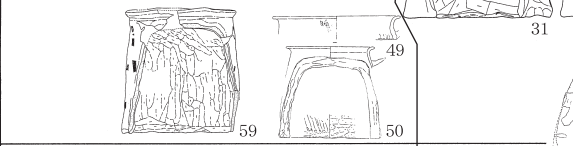
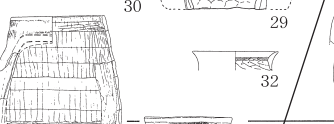

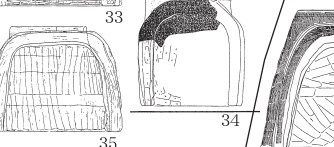
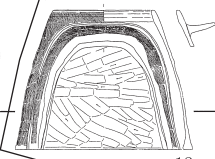
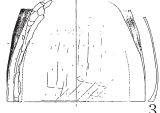
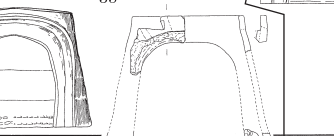
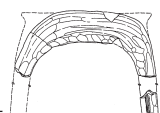



図48 移動式竈部位名称(近澤1992をもとに作図)

島根県	鳥取県			時期 出雲 大塚1994 畿内 中野1981
	西伯耆	東伯耆	因幡	
 39	 13 14	 6		出雲1 TK47 以前
	 15	 7	 1	出雲 2(A) MT15
 40	 16			出雲 2(A) 2(B)
	 17			TK10 出雲 2(B) 2(C) MT85
 41 42 43 44 46 47	 18 19 20 21 22	 8		出雲3 TK43
 45 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58	 23 24 25 26 27 28	 9 10		出雲4 TK209
	 29 30 31 32		 2	出雲5 TK217
 59 60 61 62 63 64 65 66	 33 34 35	 11		出雲 6(A) TK46
	 36 37	 12	 3	出雲 6(B) TK48
	 38		 4	出雲7 MT21
			 5	出雲8 MT21
				9世紀 以降

(※縮尺:24分の1)

図49 山陰地方の移動式竈変遷図

島根県では安来市、松江市とその周辺（東出雲町、玉湯町、宍道町）、西部出雲地域（出雲市、斐川町）、出雲南部地域の一部（木次町）、石見中部の海岸部（江津市）に出土例がある。石見・出雲の山間部は造り付け竈が設けられ、移動式竈の出土が無い地域である。中国山地を隔てた広島県北部の影響との指摘がある⁽¹⁰⁾。

出土する遺構は、①竪穴住居・テラス状遺構・掘立柱建物及びその周辺、②旧河道・大溝等、③古墳副葬品がある⁽¹¹⁾。山陰地域では一部古墳の周溝等からの出土があるが、ほとんどが①・②に該当し、①が多数を占める。先述したように山陰では造り付け竈を採用する地域に限られるため、炊飯具としての活発な使用が想定されるが、検出された住居の総数のうち移動式竈が出土した住居の数は、甕や甑形土器に比べかなり少ない⁽¹²⁾。加えて、他地域では竪穴住居内で造り付け竈と共伴する例がみられることや、正倉院文書、延喜式等の史料記載より非日常的な祭事での使用を強調する説があり⁽¹³⁾、現状では竈の明確な性格付けは困難である。島根県域、伯耆地域では土製支脚との共伴例が多数みられる。竈と土製支脚は甕や甑等を支持するという使用方法や用途が重複すると思われるが、サイズのセットでの使用は難しい。ハレとケの調理においてこれらを使い分ける可能性も指摘されている⁽¹⁴⁾。

移動式竈は、基本的に図48の部位からなる。底部の仕様により「付け庇」と「曲げ庇」の2系統が知られているが⁽¹⁵⁾、山陰地域では付け庇系のみがみられ、煙孔は確認されていない。掛口端部の形状に特徴があり、土師器甕口縁部に類似した断面「くの字」状を呈するものがみられる⁽¹⁶⁾。以下、掛口端部の形状に着目し3タイプに分類する。

A類：掛口の立ち上がりが内傾または直立する。（図49中2、8、12等）

B類：掛口が外方に屈曲し、くの字状を呈する。（図49中14、23、39、61等）

C類：掛口が外反しながら立ち上がり、如意状を呈する。（図49中25、56、66等）

形態的な変遷は、体部形状の漸移的な変化が認められる。導入期（出雲1期、陶邑TK47併行期前後）から陶邑TK217併行期頃までは体部が丸みを帯びるもの（39、9、25等）が多いが、以後体部が直線的な例（30、37等）が主体となる傾向が確認できる。掛口形態については、各地域に点的な例外はあるが島根県内は先の分類のB・C類、鳥取県内では因幡・東伯耆がA類、西伯耆はA・B・C類全てを確認できる。西伯耆は、島根県と鳥取県東部（因幡・東伯耆）との折衷的な様相を示している点は興味深い⁽¹⁷⁾。時期的な変遷は完存する資料が少ないため詳細な検討ができないが、大枠を述べたい。

導入期は西伯耆～島根県内ではB類、東伯耆、因幡ではA類が出土する。その後、島根県内ではB類が出雲3期以後C類と併存し、出雲4～5期頃に減少し、以降はC類が主体となる。因幡・東伯耆では点的な例外を除きA類が卓越する。TK23併行の倉吉市夏谷遺跡出土竈（6）は掛口の内傾度が強く、小さな庇が焚き口上部に付き以後の例とやや一線を画するが、良好な後出資料が無く詳細な変遷過程を現状では辿れない。7世紀後半～8世紀前半期の資料は器壁が薄い造りのものが増加し、厚み6、7mm程の例もみられる。西伯耆の出現期は島根県内と同様B類がみられる。古墳時代中期後葉に比定される米子市研石山遺跡例（14）の庇は焚口上面にのみ付く。やや時期が開くが、陶邑MT15～TK10併行の米子市長砂第3遺跡資料（15）は焚口側部の中位程まで庇が付く。以降の資料では庇が基部まで巡り、変遷が窺える。ただ、この庇の変化が当地域で普遍的なものか、他地域でも見られるかどうかは資料が少なく現時点では判断できない⁽¹⁸⁾。MT85併行期には、B類に加えてA・C類が出土する。体部に突帯が巡り、把手が付くものが含まれ、米子市、西伯郡会見町で主に出土している。突帯や把手は畿内、山陽地域で見られる属性であり、TK217併行期頃まで散見される。安来市山ノ神

遺跡出土例（40）の体部には突帯が巡り同様な特徴を有し、鳥取－島根県境付近に本タイプは主に分布すると思われる。TK217～TK48併行期以降はB・C類が減少し、A類が主体となる。導入期から6世紀代頃の折衷的な様相から、古墳時代終末期以降は東伯耆～因幡地域のAタイプへと変遷することが窺える。

山陰地域の移動式竈 地域別分類変遷表

時 期	島 根 県			鳥 取 県								
				西 伯 耆			東 伯 耆			因 幡		
	A類	B類	C類	A類	B類	C類	A類	B類	C類	A類	B類	C類
TK47以前	39			14			6					
MT15												1
TK10				16	15							
MT85				17								
TK43		46		20								
TK209	67	41		24	23		21	8				
TK217	62	58		26			25					2
TK46	64	65		28								
TK48				30								
		59		33		32		11				3
MT21				35				12				4
		51		37								
9世紀以降		52		38								5

表中番号は図49中と対応

山陰地域出土の移動式竈について形態的特徴を中心に概観してきた。破片資料が多く詳細な検討にはほど遠いが、近年出土例が増加しており、更なる検討が可能になると思われる。また、6世紀後半の出土数増加は竈の普及拡大を示すと思われ、土製支脚の出現期とも重なることから炊飯形態変化の画期と捉えられている⁽¹⁹⁾。安来平野～松江周辺では、出雲4～5期に集落構成主体が竪穴住居から掘立柱建物へと変化し、炊飯形態の画期とほぼ連動することが分かってきており⁽²⁰⁾、興味深い。今後このような視点から各地域の検討が進めば、移動式竈についても新たな知見が得られると考える。

(加藤)

註

- (1) 福岡県甘木市宮原遺跡等の古墳時代中期～奈良期の竪穴住居では、貼床下に一段深く掘り込まれる範囲が存在する。ただ、住居中央部分ではなく、周壁との間に認められるもので本例とは異なる。
福岡県教育委員会 1997『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－46－ 宮原遺跡Ⅲ（AⅡ・D地区）』等
- (2) 都出比呂志 1989「竪穴式住居の立体構造」『日本農耕社会の成立過程』岩波書店
- (3) 浅川滋男 2001「竪穴住居の空間分節」『竪穴住居の空間分節に関する復元研究』奈良国立文化財研究所
床面の硬軟から住居内利用状況を考える研究がいくつか為されており、出入口～住居中央に位置する炉の周囲が固く、壁際が柔らかい傾向を示している。一方、炉の周辺が柔らかい例として、板敷きによる揚床の痕跡を残す住居（縄文時代）が紹介されている。本遺跡例ではそうした痕跡は確認されていないが、可能性として注目される。
- (4) 前掲（3）文献
- (5) 例えば、鳥取県福成早里遺跡のテラス状遺構（SS33）では直径40cm、深さ5cm程度の被熱範囲があり、竈を据えた場所の可能性が指摘されている。島根県渋山池遺跡では掘立柱建物（SB-08）等において径40～50cm、厚み約3cmの被熱した粘土貼りがあり、竈床と推定されている。同遺跡では竈が多量に出土しており、注目される。ただ、両例とも竈が被熱範囲に接して出土したわけではない。
- (6) 財団法人大阪府文化財センター、日本民家集落博物館 2004『カルチュアはっとりNo.3 シリーズ ここまで分かった考古学 竈形土器の語るもの』日本民家集落博物館企画展示資料
- (7) 杉井 健 1993「竈の地域性とその背景」『考古学研究』第40巻第1号 考古学研究会
なお、本節において「山陰地域」とは島根・鳥取両県のことを示し、長門・但馬地域は含めていない。
- (8) 田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
- (9) 鳥取県教育文化財団 1999『長瀬高浜遺跡Ⅷ 園第6遺跡』
- (10) 岩橋孝典 2003「山陰地域の古墳時代後期～奈良時代の炊飯具について」『古代文化研究』第11号 島根県古代文化センター

- (11) 近澤豊明 1992「竈形土製品について」『長岡京古文化論叢Ⅱ』三星出版
- (12) 移動式竈の出土数が増加する6世紀後半～7世紀前半頃の資料からいくつか例を示す。鳥取県八橋第8・9遺跡で竪穴住居総数23棟のうち7棟、鳥取県上種第6遺跡で全17棟のうち4棟、鳥取県百塚第5遺跡で全17棟のうち1棟である。
- (13) 稲田孝司 1978「忌の竈と王権」『考古学研究』第25巻第1号 考古学研究会
- (14) 前掲(10)文献 因幡地域は土製支脚出土が希薄な地域で、秋里遺跡や桂見遺跡等で散見される程度である。
- (15) 前掲(13)文献 「付け庇」は焚口周縁及び周辺に粘土を貼付け庇とし、「曲げ庇」は焚口の切り口上部を前方に折り曲げ庇とするものである。
- (16) 前掲(11)文献 この形態の竈は山陰、北陸を中心とした日本海側に分布の中心があるようである。
- (17) 前掲(10)文献 本稿分類のA類が東部型、B・C類が西部型に該当する。
- (18) 石見中部の江津市半田浜西遺跡例(図49中67)でも庇が焚口上部に付く例(B類)が報告されているが、6世紀後半と時期が下る。当地域周辺においても資料の増加が待たれる。
- (19) 前掲(10)文献
- (20) 鳥根県教育委員会 1997『石田遺跡Ⅲ』

山陰地域の移動式竈 出土遺跡一覧

鳥取県

(*:市町村名は2003年現在)

遺跡名	所在地	検出遺構	時期	番号	分類	備考	遺跡名	所在地	検出遺構	時期	番号	分類	備考	
粟谷Ⅱ	福部村	土器溜	不明	-	-		八橋第8・9	東伯町	SI1	TK48	-	-		
新井三嶋谷	岩美町	1号墳丘墓北側斜面	6世紀末～7世紀中葉?	-	A?				SI2	MT85	-	-		
									SI3	MT15	-	-		
久能寺孤塚	郡家町	SI-5	古墳中期?	-	-				SI6	TK43	-	-		
									SI9	TK209	-	-		
余井唐堀	用瀬町	第1トレンチ	古墳後期後半～飛鳥Ⅱ期	-	-				SI13	TK43	-	-		
									SD02	古墳後期後半～中世	-	-		
秋里(西峯竹)	鳥取市	SK66	TK209～217	2	A				南谷部第Ⅰ層	6～8世紀	-	-		
秋里Ⅳ	鳥取市	土器群1	8世紀前半?	4	C				南谷部第Ⅱ層	6～8世紀	-	-		
秋里	鳥取市	BⅠ区遺構外	不明	-	-				南谷部第Ⅲ層	6～8世紀	-	-		
							南谷部土器集中ブロック	7世紀後半中心	-	-				
岩吉Ⅳ	鳥取市	SX-01	奈良後半～平安中葉	5	A		小倉山	関金町	SB03	古墳後期中葉～後葉	-	-		
							遺構外	不明	-	A				
西大路土居	鳥取市	SI19・20	TK47～MT15	1	A	竈壇部?	野口 B地区	倉吉市	1号住居址	6世紀後半	-	-		
							遺構外	不明	-	-				
山ヶ鼻	鳥取市	自然河道	不明	-	-		中電八橋線鉄塔建設予定地内	倉吉市	No.32地区	2号住居址	7世紀後半	-	-	
									遺構外	不明	-	-		
古市Ⅰ	鳥取市	SK-08	8世紀前半?	-	-		大山	倉吉市	D地区2号墳丘周溝中	27号住居	TK23	6	A	
		SK-09	8世紀前半?	-	-									
		SK-12	8世紀前半?	-	-									
古市Ⅱ	鳥取市	SD-B01	7世紀後半?	3	-		夏谷	倉吉市	1号大壁住居状遺構	不明	-	-		
		遺構外	7世紀後半～平安時代	-	A?									
桂見八ッ割地区・桂見堤谷東地区	鳥取市	SD10	奈良～平安時代	-	-		クズマ	倉吉市	1号墳周溝上層	7世紀後半～8世紀前半	11	A		
		SB10	奈良～平安時代	-	A?		福田寺	倉吉市	2号土坑	8世紀前半以降	-	A		
本高門ノ前	鳥取市	遺構外	不明	-	-		立道東古墳群	倉吉市	2・3号墳表土、周溝内	不明	-	-		
									周溝内土坑	6世紀前半	-	A	突帯	
寺戸第1	泊村	土器溜02	不明	-	-		東高田	名和町	遺構外	不明	-	-		
小浜小谷	泊村	SS01・SI01	7世紀後半以降	-	-		茶畑第1	名和町	竪穴住居18	古墳後期中葉	-	-		
園第6	泊村	ヒット群1	MT15	7	-	朝鮮半島系?	古御堂笹尾山	名和町	竪穴住居15	古墳後期後葉	-	-		
長瀬高浜Ⅱ	羽合町	遺構外	不明	-	-		名和衣笠谷	名和町	Ⅱ層	竪穴2	TK209	23	B	
長瀬高浜Ⅵ	羽合町	11BSK01	TK209	9	A						竪穴住居3	TK209	-	-
上種第5	大栄町	竪穴住居跡9号	TK43～209	8	A		名和飛田	名和町	竪穴住居4	TK217	26	A		
			MT15～TK10	-	-									
			TK209?	-	-									
上種第6	大栄町	竪穴住居跡15号	TK209～217?	-	-		名和中畝	名和町	SI05	6世紀前半?	-	-		
			TK209	10	A					A区遺構外	不明	-	-	
曲第1(曲岡)	北条町	SS-02	7世紀中葉?	-	A		仁王堂(平第2)	大山町	谷部遺物	不明	-	-		
曲宮ノ前	北条町	遺構外	不明	-	-		大下畑	淀江町	3号住居跡	古墳後期?	-	-		
中浜	北条町	包含層	不明	-	-		百塚Ⅲ	淀江町	SI01	TK209	24	A	把手	
三保	東伯町	5区Ⅱ層	不明	-	A		百塚第5	淀江町	7号住居跡	TK209	22	A		
笠見第3	東伯町	3号墳墳丘	TK209～217	-	A?		百塚Ⅶ	淀江町	MGSI-73	TK217～TK46	-	A		
複谷	東伯町	S14	MT15	-	-		妻木晩田	淀江町	MGSI-74	TK217～TK46	28	A		
松谷中峰	東伯町	B区遺構外	古墳中期後葉	-	-		福岡谷ノ上	淀江町	SI-05	TK48	32	C		
井岡地頭	東伯町	表土・攪乱土	不明	-	-									

第5章 まとめ

遺跡名	所在地	検出遺構	時期	番号	分類	備考	遺跡名	所在地	検出遺構	時期	番号	分類	備考	
福岡谷ノ上	淀江町	A区遺構外	不明	-	A		陰田第6(市)	米子市	C6・C7・D7 7世紀上層	TK217以降混在	-	A		
福岡柳谷	淀江町	A区土器溜	MT85~平城京IV	-	A					C6・C7・D7 奈良期堆積	TK217~ MT21混在	-	C?	
小町石橋ノ上	岸本町	SD11	不明	-	-		陰田 マノカンヤマ	米子市	遺構外	不明	-	-		
宮尾	会見町	SI02	6世紀後半	19・20	A	突帯・把手	陰田小犬田	米子市	遺構外	不明	-	A	羽釜?	
天王原	会見町	F区SI-02	6世紀中葉	17	A	突帯	陰田荒神谷	米子市	SS-02	TK217~TK46	-	-		
天萬土井前	会見町	SD20	6世紀中葉以降	21	C	突帯			SS-02 SB-7	TK46	-	-		
福成早里	西伯町	SI3	TK217	-	-				SS-02 SI-3	TK217~TK48	-	-		
		SS19	TK209	-	-				SS-4	MT21?	-	-		
		SS18	7世紀後半?	-	-		SS-6	不明	-	-				
		SI6 埋土上層	TK217以降	-	-		陰田広畑	米子市	2テラス	6世紀末~8世紀後葉(主体は6世紀末~7世紀初頭)	-	C/A	8個体分	
		SS21・22	TK217	-	-				3テラス	6世紀末~8世紀後葉	-	C/A	7個体分	
		SS29・30	TK209	-	-				6テラス	6世紀末~8世紀後葉(主体は8世紀中葉~後葉)	-	-		
		SS31	TK217~TK46	-	-				遺構外	不明	-	-		
古谷銭神I	米子市	遺構外	不明	-	C?			6テラス	不明	-	-			
今在家下井ノ上	米子市	遺構外	不明	-	C			1区SS04	古墳後期~末期	25	C	突帯		
古市カハラケ田	米子市	SD40	古墳後期~奈良期	-	B/C		研石山	米子市	5区SB06・07	古墳中期後葉	13・14	B		
古市宮ノ谷山	米子市	テラス15 集石1	8世紀前半?	34	A/C		8 E-1古代流路	不明	-	B/C				
長砂第3	米子市	SI08	MT15~TK10	15	B		青木I	米子市	FSI05	TK10	16	A		
石州府第4	米子市	遺構外	7世紀中葉~後葉	29・30・31	A	把手、ミニチュア土器出土	青木II	米子市	FSI26	MT21?	37	A		
陰田第6(県)	米子市	SI-11	TK209~TK217	-	-		青木III	米子市	CSX01	MT15以降?	-	-		
		SS-2	TK209~TK217	-	-				ESI02	TK48?	-	-		
		SS-4	TK209~TK217	-	-				ESI06	TK48~MT21	33	A		
		SS-8	TK217~TK46	-	-				ESS01	MT21?	35	A		
SS-22	MT21	-	-		ESS02	奈良期	-	-						
陰田第6(市)	米子市	テラス状遺構3 C6・C7・D7 7世紀中層	TK217~TK46 以降混在	27	A/C		JSS01	奈良期	36	-	把手			

島根県

(※市町村名は2003年現在)

遺跡名	所在地	検出遺構	時期	番号	分類	備考	遺跡名	所在地	検出遺構	時期	番号	分類	備考
石田	安来市	I-3区土器溜	出雲4期	-	B/C		福富I	松江市	6区SB05	出雲6B期?	-	-	
石田Ⅲ	安来市	I-S区SR01	出雲4期	42	C		田中谷	松江市	旧河道1土器溜	6世紀後半~未頃	53	B/C	
高広	安来市	SX-01下層	出雲4~5期	44	C				加工段1	出雲6B期	59	C	
山ノ神	安来市	建物3	出雲3期	-	-		加工段4	出雲6期?	-	-			
五反田	安来市	建物6	7世紀末	45	A		久米	松江市	土器溜まり	不明	-	C	
		建物11	TK217	-	C	造付け竈	久米B	松江市	SI-01	出雲5~6期	57	C	
徳見津	安来市	溝状遺構1	出雲4期	43	B/C		米坂	松江市	西区SD-3	不明	-	-	
上野II	安来市	II区包含層	出雲3期?	41	C		イガラビ	松江市	堆積層	不明	-	-	
春日シヌン谷	東出雲町	遺構外	不明	-	-		池ノ奥A	松江市	包含層	不明	-	-	
渋山池	東出雲町	第4号テラス	出雲3期	46	C		矢田平所	松江市	加工段下埋土	6世紀末~8世紀?	-	-	
		SB-17	出雲6A期	48	B/C		島田池	松江市	8区SB03	不明	-	-	
		SB-22	不明	-	-		梨子谷	松江市	遺構外	古墳後期~奈良期?	-	-	
		加工段9	出雲6B期	50	B/C		石田	松江市	遺構外	不明	-	-	
		土器溜2	出雲5期?	47	B/C		西I	斐川町	段状遺構1	出雲4期?	-	-	
		土器溜3	8世紀以降	-	-		段状遺構2	出雲4~5期?	60	B			
渋山池古墳群	東出雲町	土器溜4	出雲6B期?	49	B/C		三田谷I	出雲市	SI16	出雲1期	39	B	
土器溜5	出雲6B期	-	-		I区SD03	出雲2期?	-	-					
林廻り	東出雲町	土器溜5	出雲6B期	-	-		II区SD01	出雲2期?	-	-			
勝負	東出雲町	SB01	古墳後期以降	-	-		壺丁田	出雲市	土器群1	6世紀後半~8世紀初頭	-	B	
堂床	玉湯町	SB02・03	6世紀後半~7世紀代	-	C		古志本郷I	出雲市	C区 SK23	古墳後期~奈良	-	B	
		加工段下方平坦面	不明	-	-		C区 SD18	古墳後期~奈良	-	B			
		SB05	出雲3期	-	-	暖炉状遺構	SD01	8世紀以降	-	-			
		SB08・09	出雲3期	-	-		古志本郷V	出雲市	SD39上層	出雲4~5期?	61・62	B	
岩屋II	玉湯町	加工段4	8世紀中頃	-	-	古志本郷VI	出雲市	K区土坑埋土	不明	-	-		
有ノ木	玉湯町	SB10	出雲3期	-	-		浅柄	出雲市	SD02	7世紀初頭~前葉	64・65	B	
竹ノ崎	宍道町	東区包含層	不明	-	-		遺構外	不明	-	-	B		
堀田ヶ谷	宍道町	客土	不明	-	-		加工段01	出雲4~5期	63	B/C			
西川津V	松江市	V-4-1砂レキB	7世紀?	-	C		長廻	出雲市	遺構外	不明	-	-	
西川津VI	松江市	Ⅲ区右岸青灰色砂礫層2	7世紀前半~中葉	-	-		高浜II	出雲市	遺構外	不明	-	-	
		Ⅲ区右岸青灰色砂層3	6世紀末	-	-		小山	出雲市	遺構外	不明	-	-	
西川津VII	松江市	遺構外	7世紀?	-	-		小山第3地点	出雲市	遺構外	不明	-	-	
四ツ廻II	松江市	土器溜りC	出雲4~5期	56	C		下合志	出雲市	G区 SE08	不明	-	-	
福富I	松江市	4A区SB05	出雲4期	55	C		垣ノ内	木次町	加工段2土器溜	6世紀後半~7世紀代	66	C	
4B区SB15	出雲5~6A期?	58	C?		遺構外	6世紀後半~8世紀			-	-			
							半田浜西	江津市	東側土器溜り	6世紀後半	67	B	
							飯田C	江津市	包含層	不明	-	-	

圖 版

PLATE

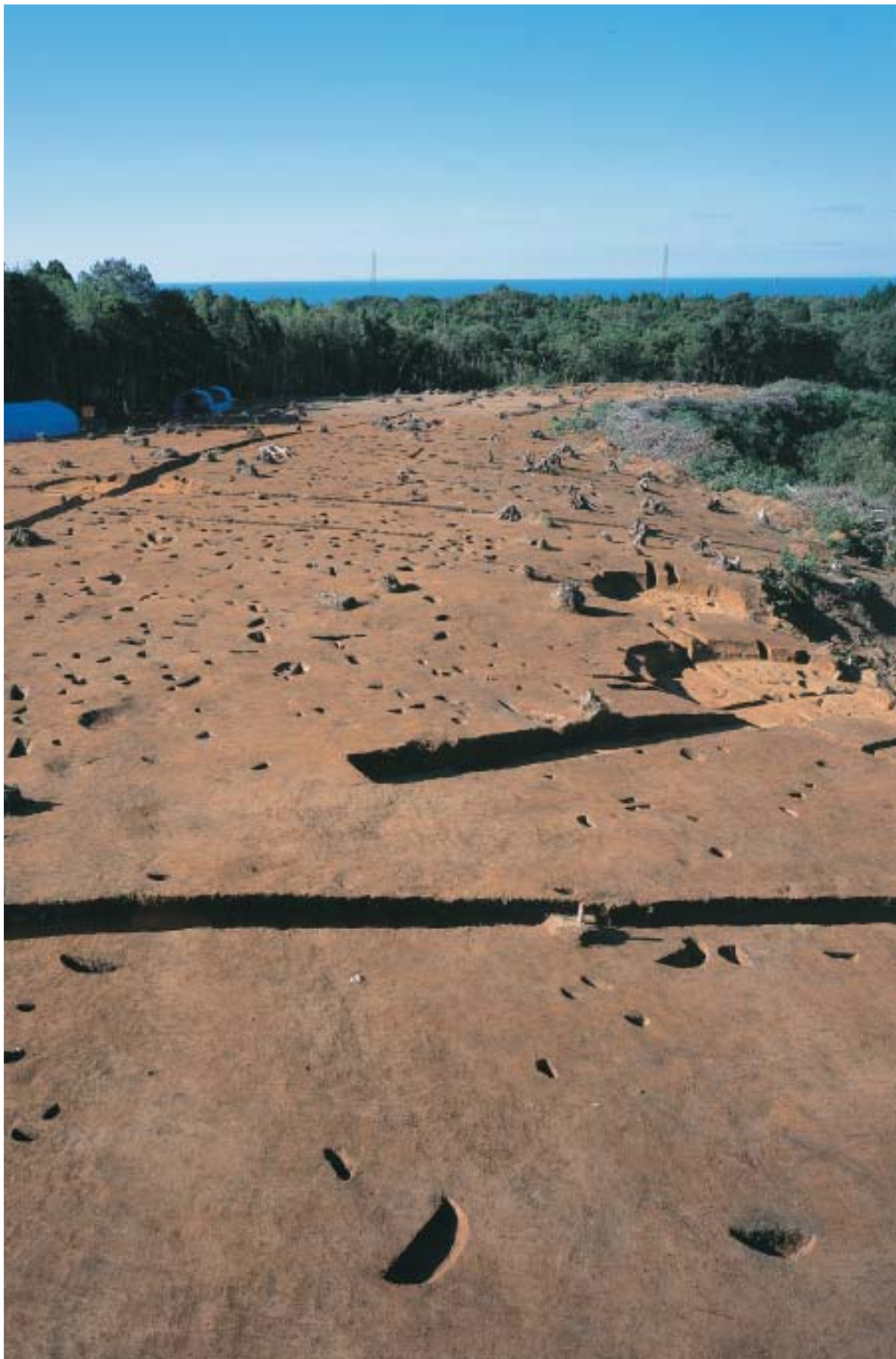


1 調査地周辺の地形（東から）



2 調査後調査地全景（左が北西方面）

カラー図版2



調査地完掘状況（南から）



1 竪穴住居4遺物出土状況（南西から）



2 移動式竈出土状況（北西から）

カラー図版4



1 竪穴住居4完掘状況
(南西から)



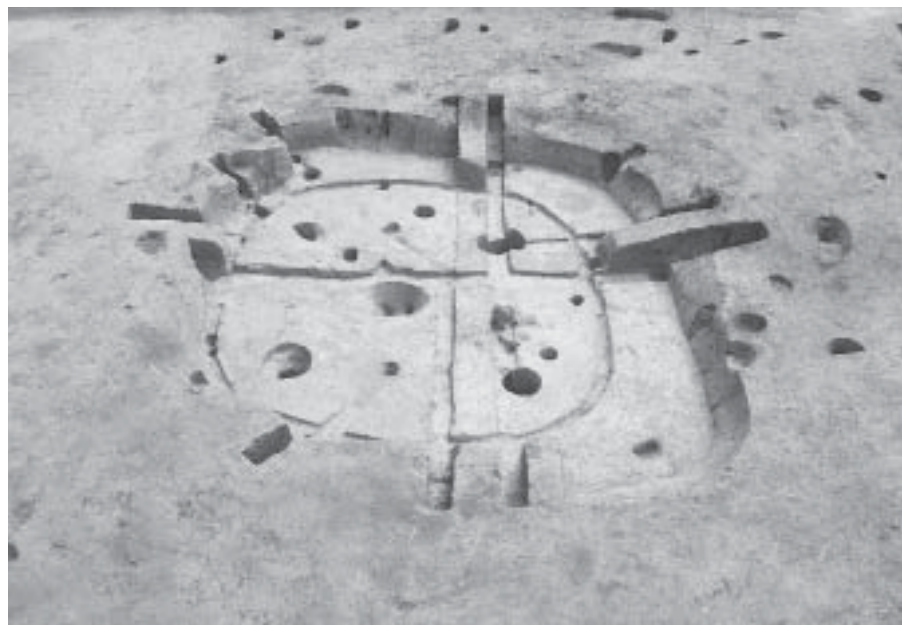
2 竪穴住居4
竈下焼土検出状況
(北西から)



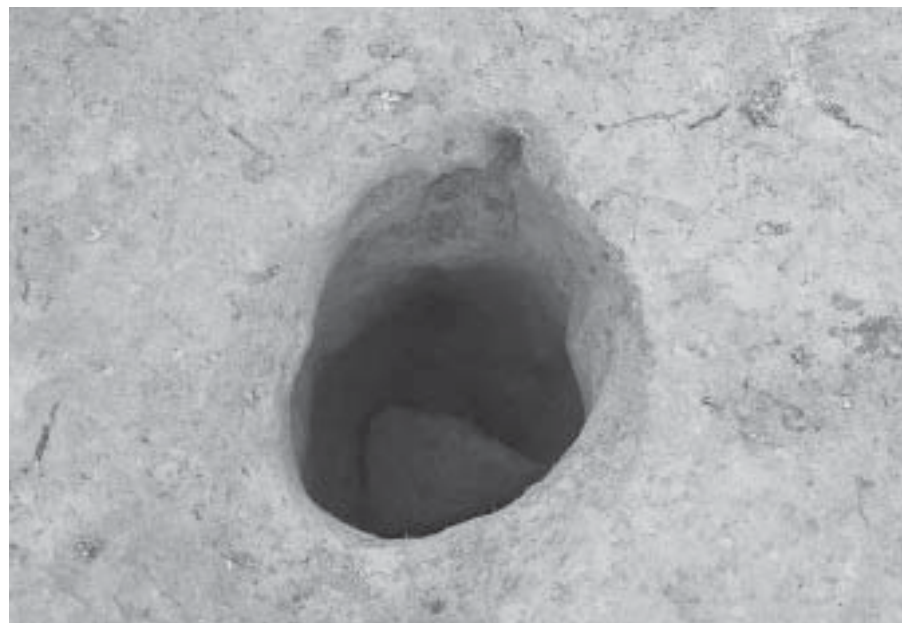
3 竪穴住居4
貼床除去後完掘状況
(南西から)



1 竪穴住居 1
土層断面状況
(南から)



2 竪穴住居 1 b
完掘状況 (西から)



3 竪穴住居 1 b
P13根石検出状況
(南から)

図版 2



1 竪穴住居 1 a
完掘状況（北西から）



2 竪穴住居 2
遺物出土状況
（西から）



3 竪穴住居 2
完掘状況（西から）

1 竪穴住居3
遺物出土状況
(南西から)



2 竪穴住居3
炭化材検出状況
(東から)



3 竪穴住居3
完掘状況 (西から)



図版4



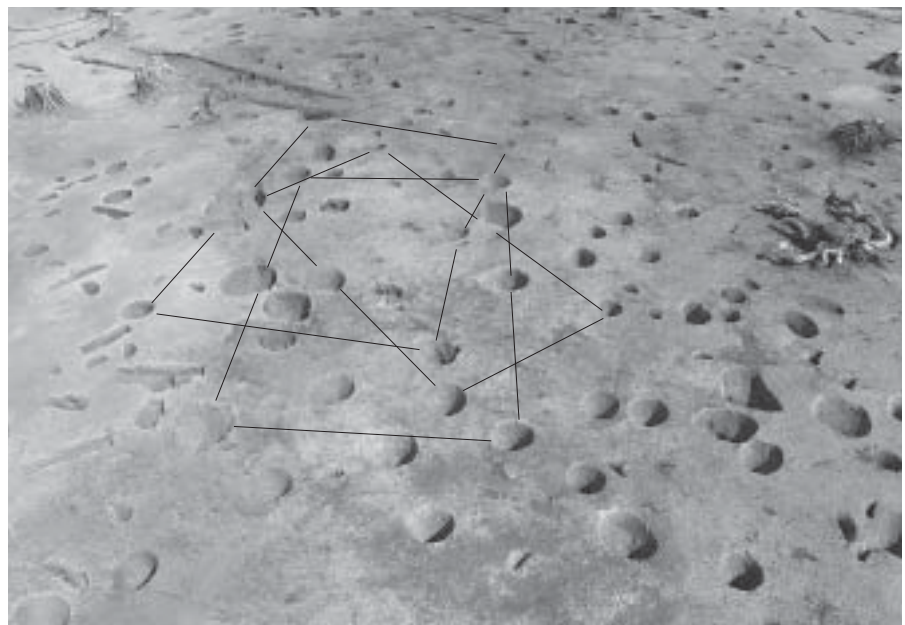
1 調査地中央部ピット群完掘状況（南東から）



2 調査地南側ピット群完掘状況（北から）



1 掘立柱建物1
完掘状況（北西から）

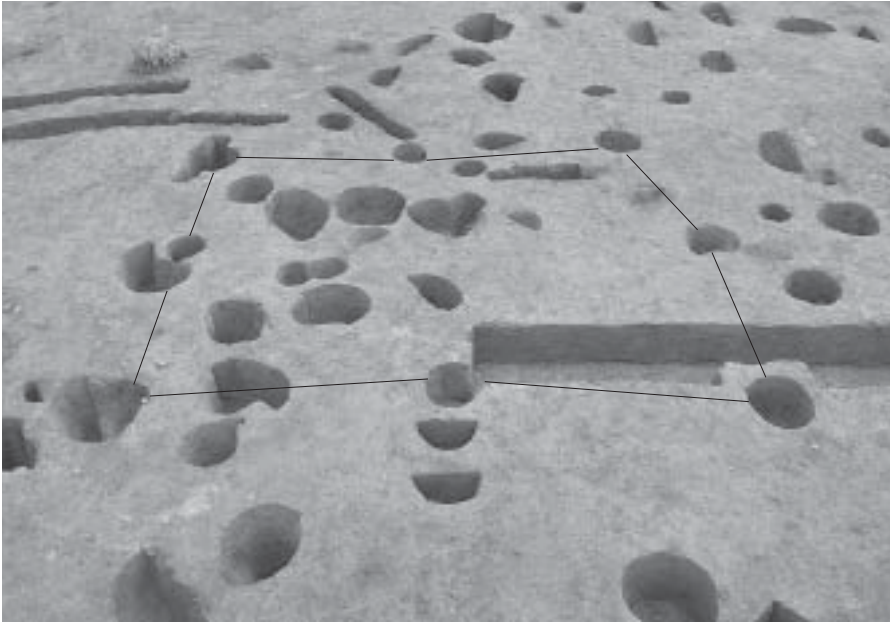


2 掘立柱建物2・3・4
完掘状況（北から）

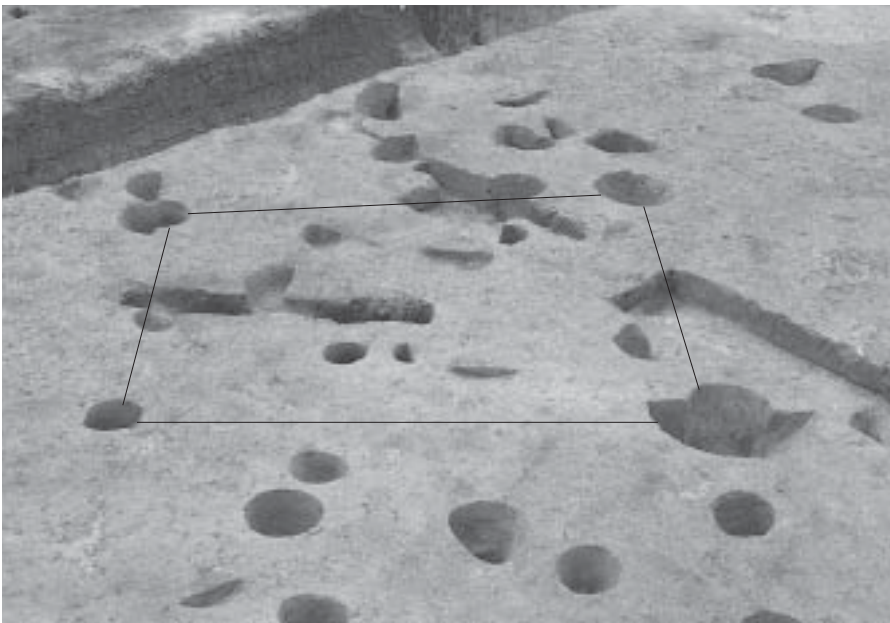


3 掘立柱建物5
完掘状況（北から）

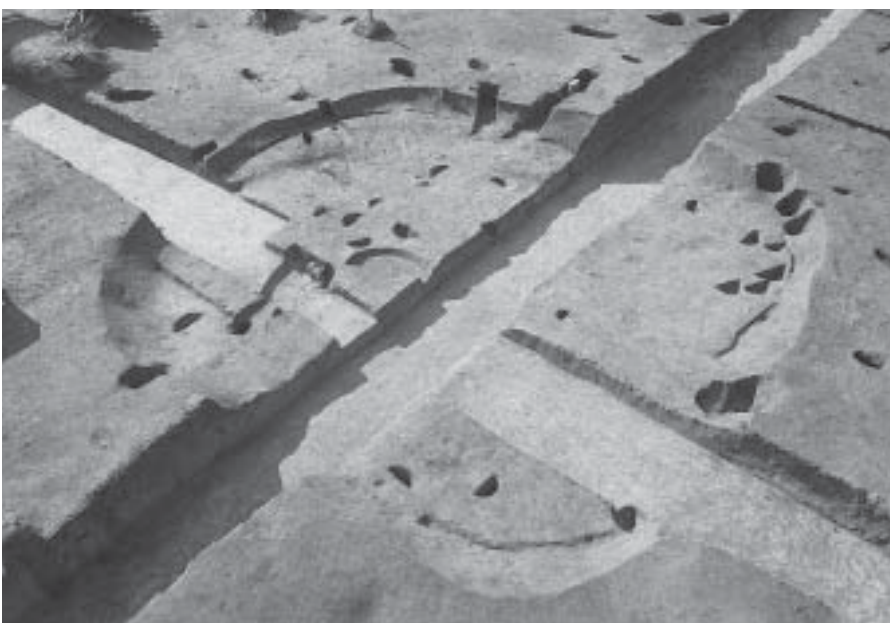
図版6



1 掘立柱建物6
完掘状況（北から）



2 掘立柱建物7
完掘状況（南東から）



3 竪穴1完掘状況
（南東から）

1 溝1完掘状況
(東から)



2 溝2土層断面状況
(南西から)



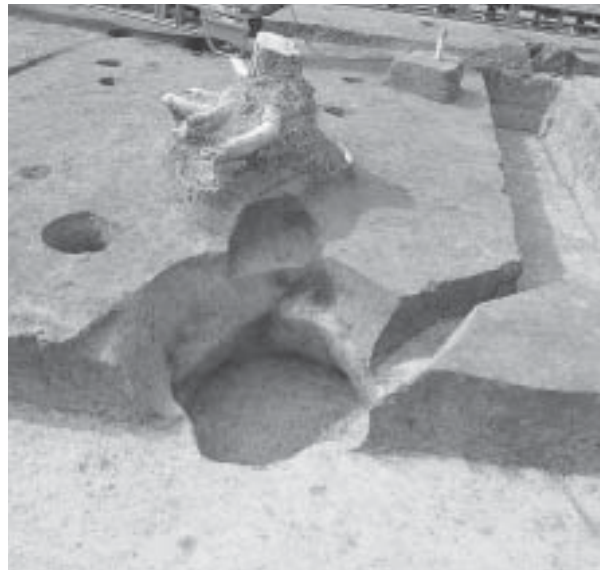
3 溝3完掘状況
(西から)



図版 8



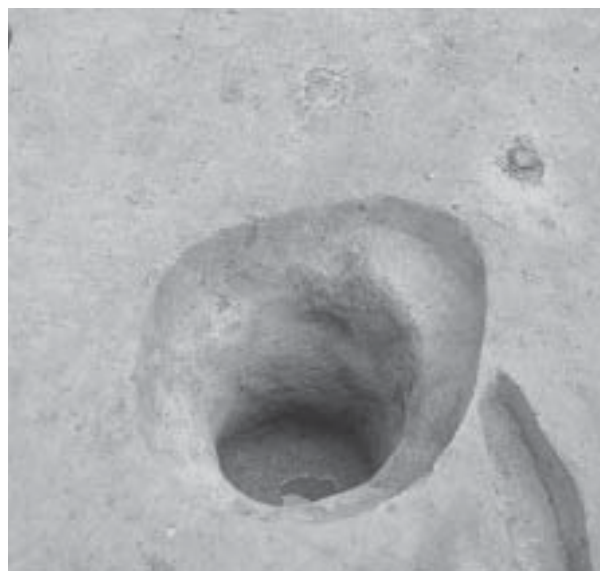
1 土坑 1・2・3 土層断面状況（東から）



2 土坑 2 完掘状況（東から）



3 土坑 1 完掘状況（南東から）



4 土坑 4 完掘状況（西から）



5 土坑 5 完掘状況（北から）



6 土坑 6 土層断面状況（南から）



1 土坑7完掘状況（東から）



2 土坑10・11完掘状況（南西から）



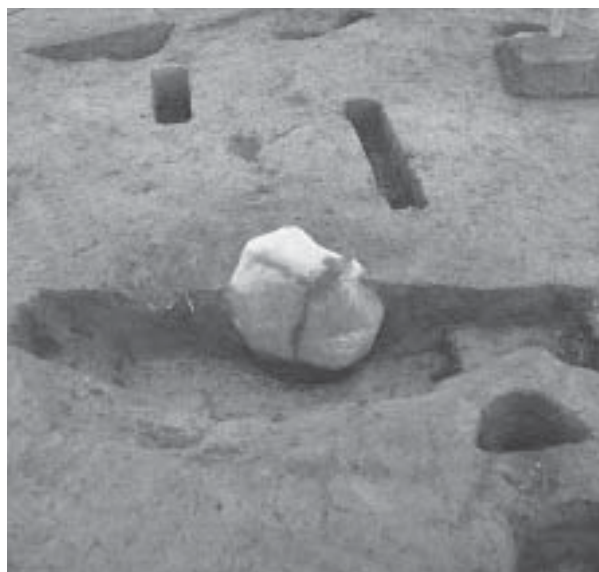
3 土坑8土層断面状況（北から）



4 土坑8・9完掘状況（北から）



5 土坑12完掘状況（西から）



6 土坑13土層断面状況（東から）

図版10



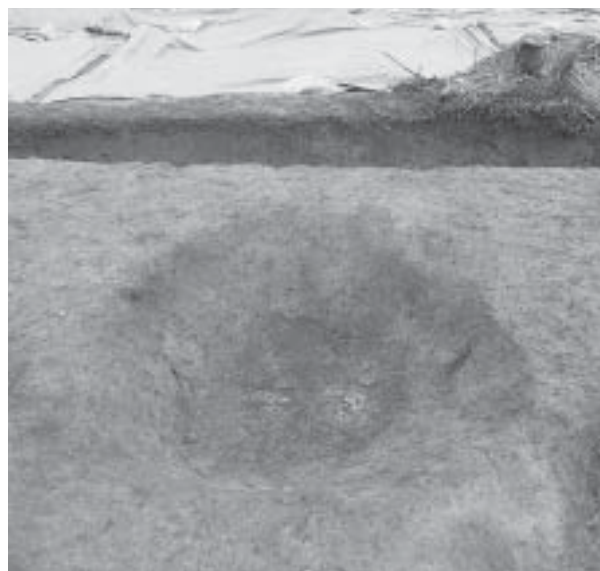
1 土坑15炭化材検出状況（北から）



2 土坑14土層断面状況（東から）



3 土坑14完掘状況（北東から）



4 土坑16底部炭・焼土検出状況（南から）



5 土坑17底面炭検出状況（西から）



6 土坑18土層断面状況（西から）



竖穴住居 4 出土遺物

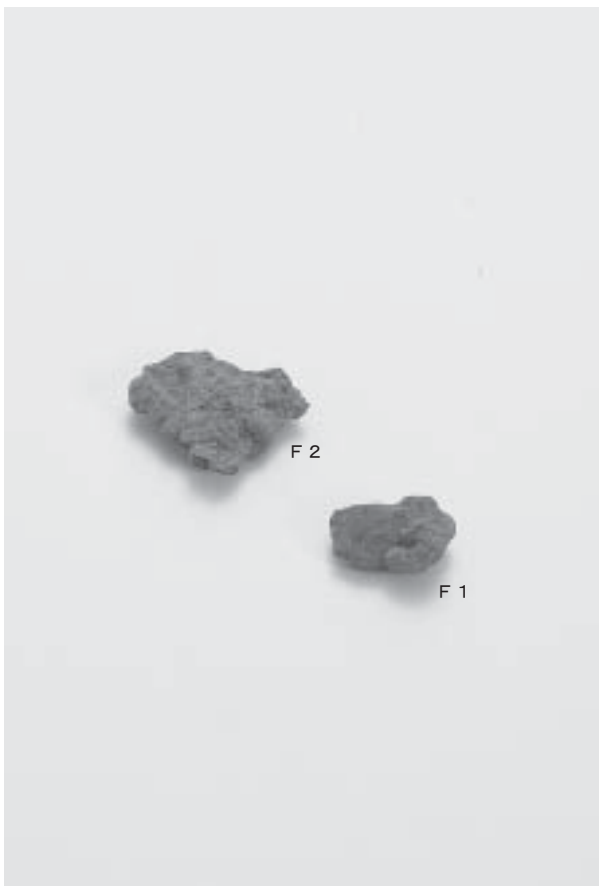
図版12



1 竪穴住居4出土移動式竈（1）



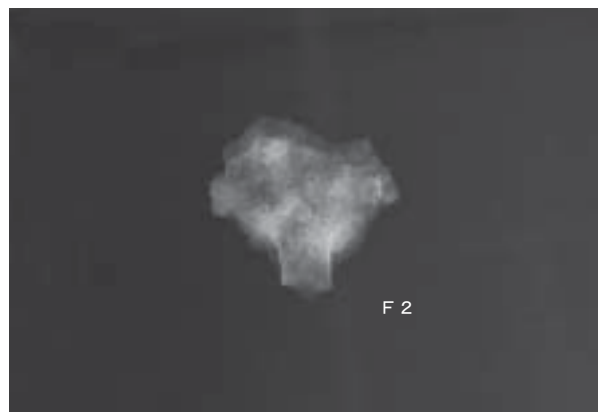
2 竪穴住居4出土移動式竈（2）



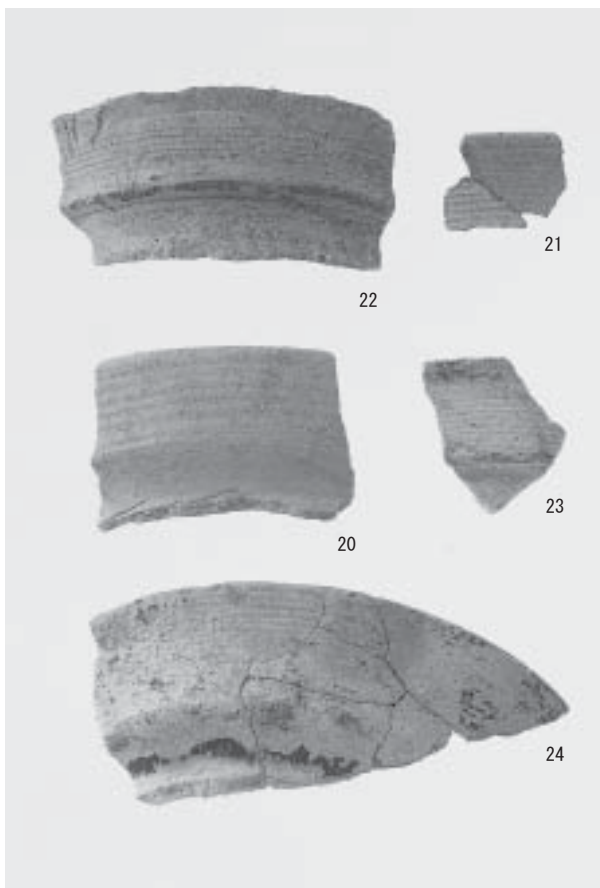
3 竪穴住居2・4出土鉄製品



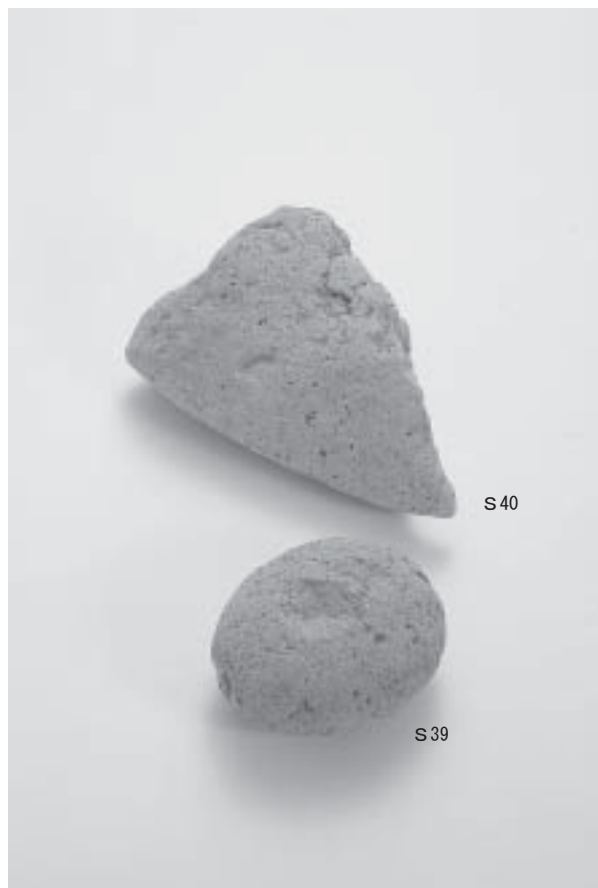
4 竪穴住居4出土鉄製品



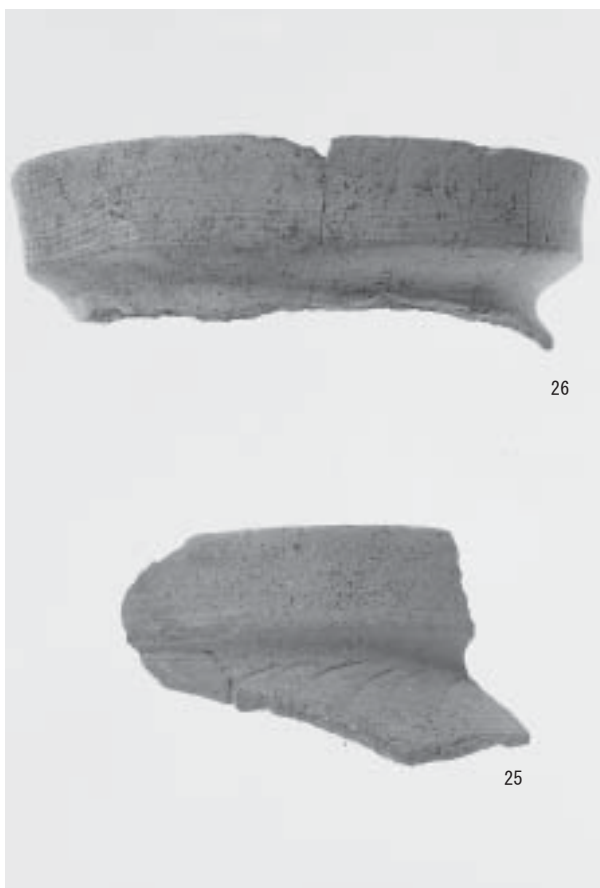
5 竪穴住居4出土鉄製品×線写真



1 竖穴住居 1 出土土器



2 竖穴住居 1 出土石器



3 竖穴住居 2 出土土器



4 竖穴住居 2 出土石器

図版14



1 竪穴住居 2 出土鉄製品



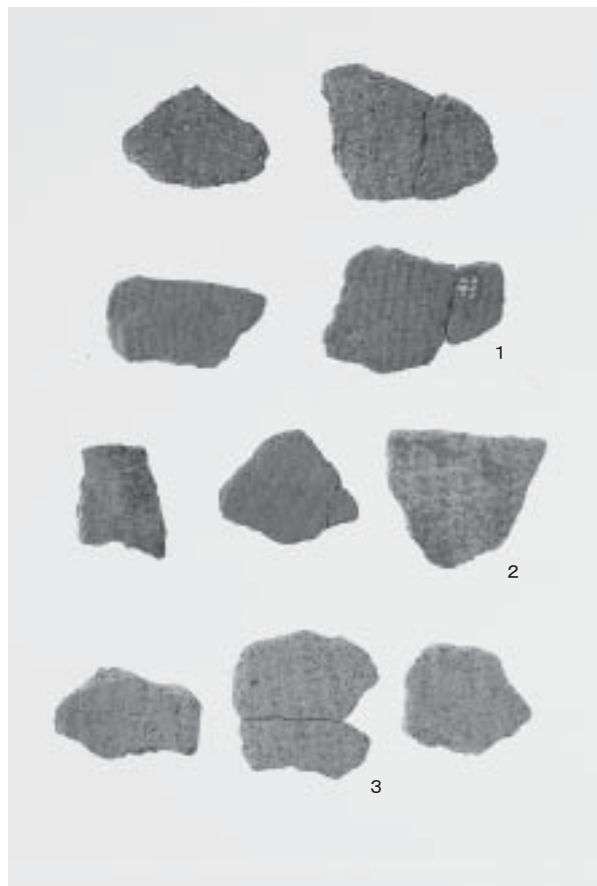
2 竪穴住居 2 出土鉄製品 X線写真



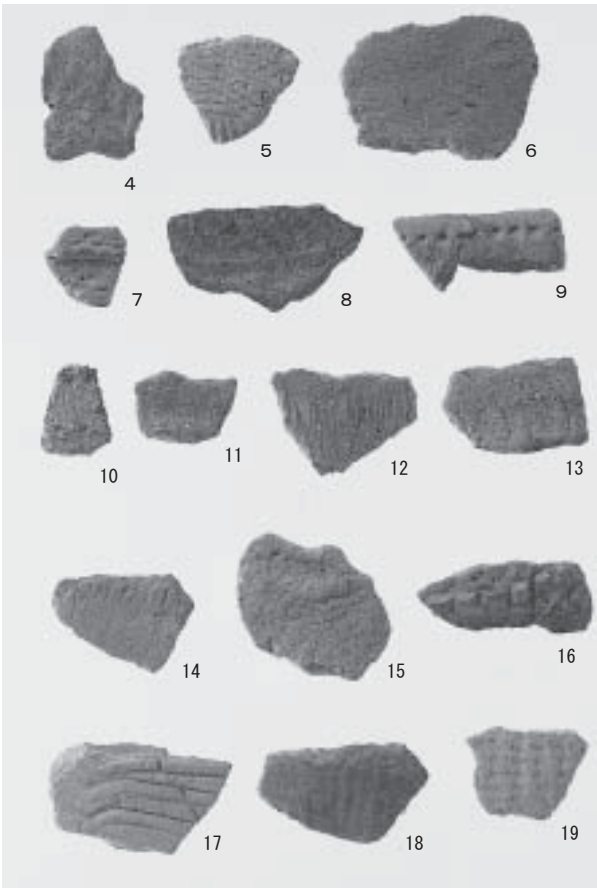
3 竪穴住居 3 出土土器



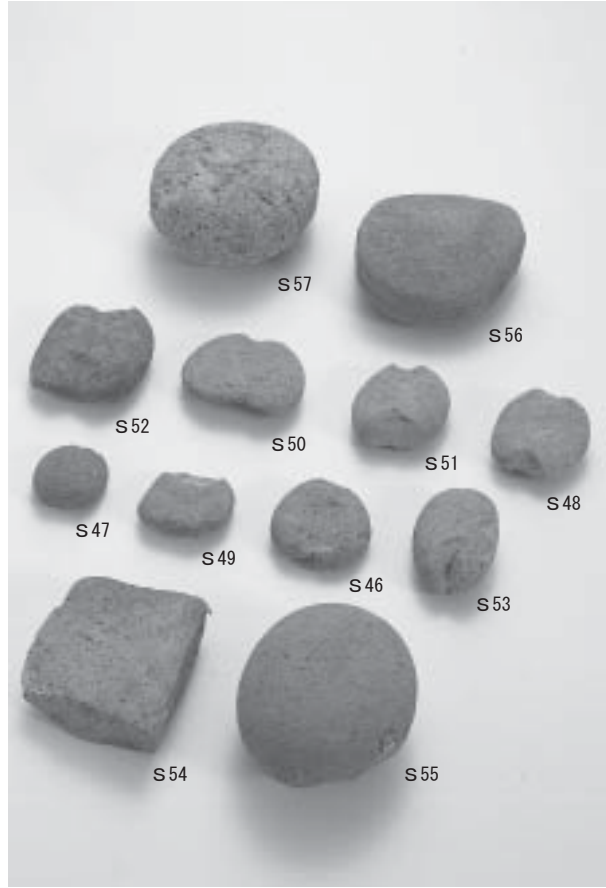
4 竪穴住居 3 出土石器



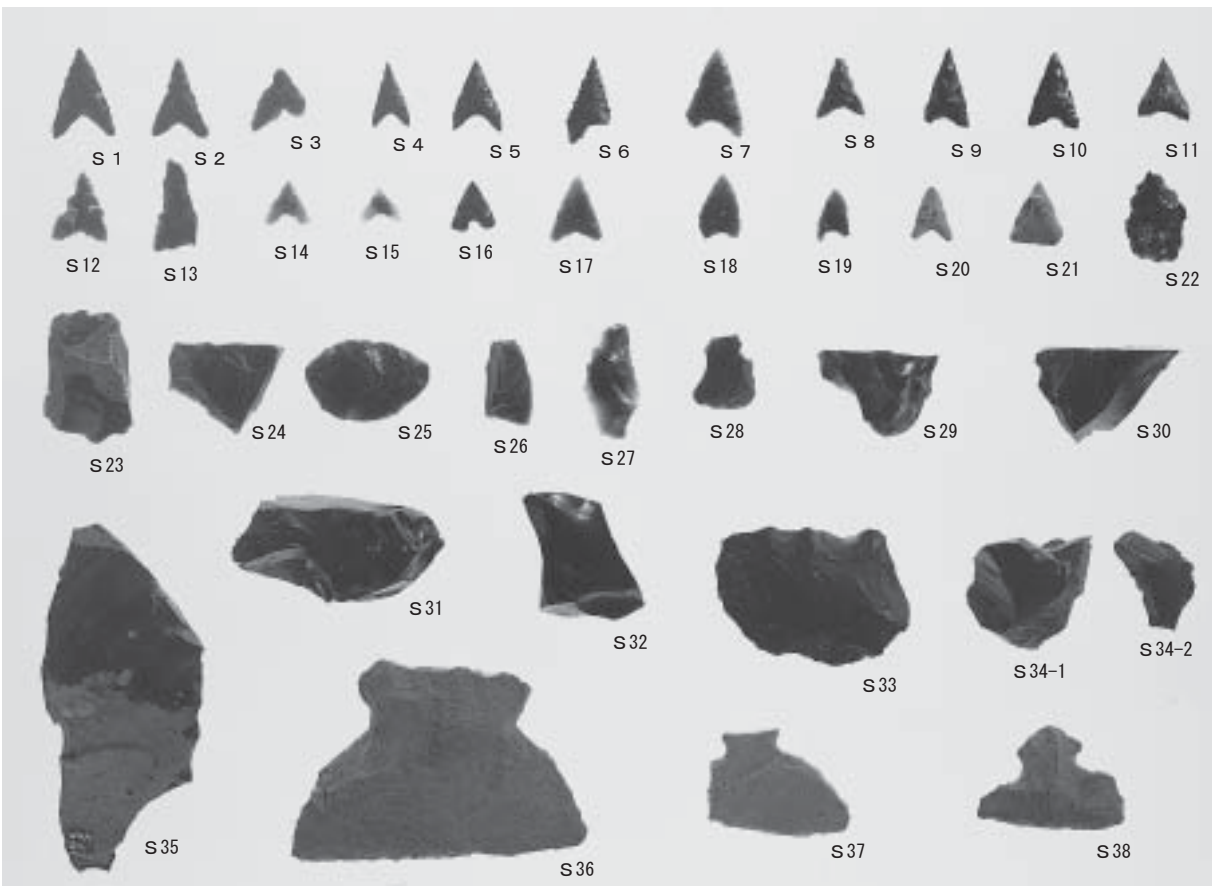
5 土坑 1・2・3 出土土器



1 遺構外出土土器

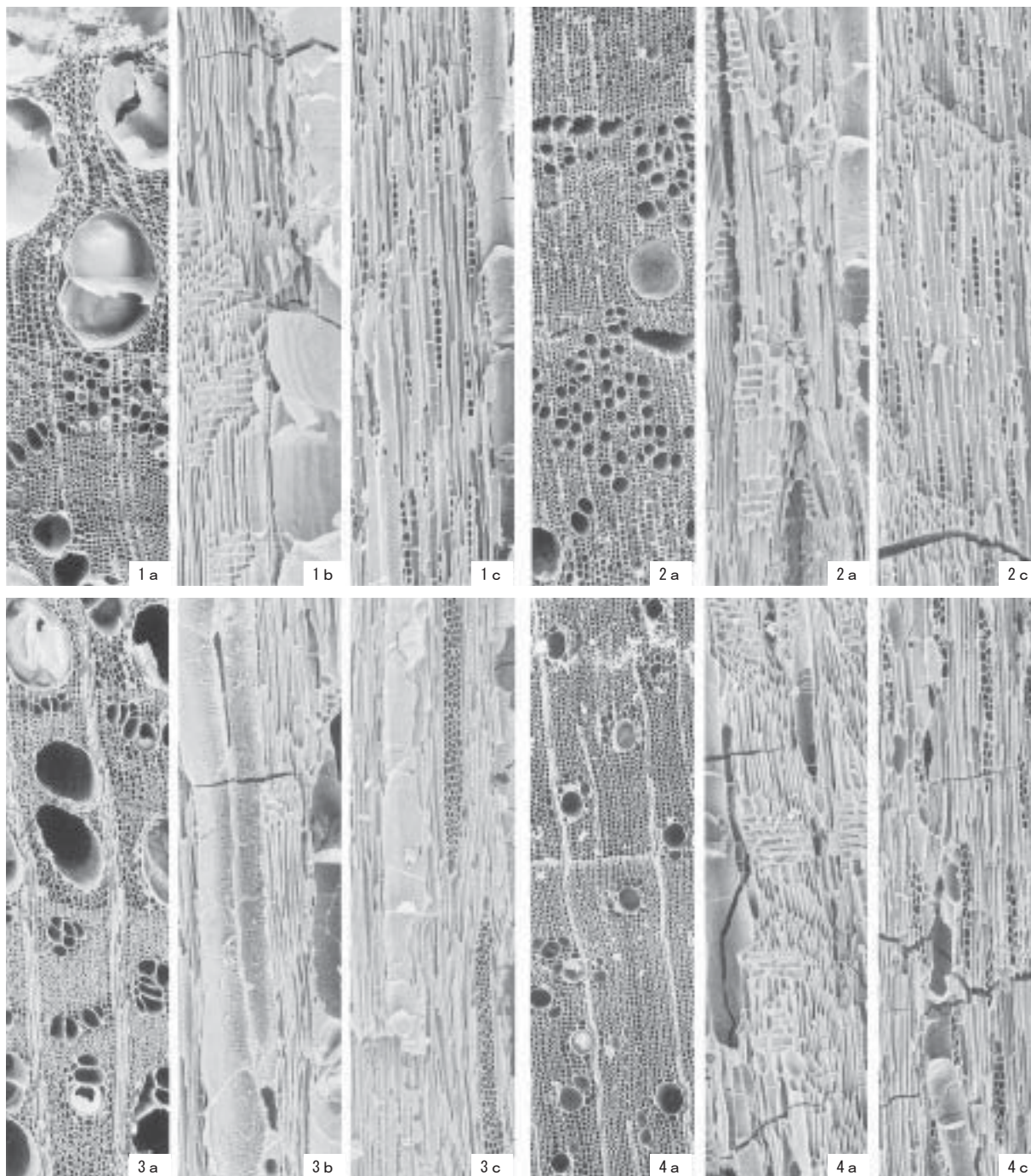


2 遺構外出土石器 (1)



3 遺構外出土石器 (2)

図版16



- 1. クリ (試料3)
 - 2. スダジイ (試料2)
 - 3. ヤマグワ (試料6)
 - 4. クスノキ科 (試料9)
- a: 木口, b: 柁目, c: 板目

200 μm a
200 μm b,c

報告書抄録

ふりがな	なわなかうねいせき							
書名	名和中畝遺跡							
副書名	一般国道9号(名和淀江道路)の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	IX							
シリーズ名	鳥取県教育文化財団調査報告書							
シリーズ番号	103							
編著者名	加藤 裕一 木山 清貴 日置 智							
編集機関	財団法人鳥取県教育文化財団埋蔵文化財センター							
所在地	〒680-0151 鳥取県鳥取市国府町宮下1260番地 TEL (0857) 27-6717							
発行年月日	西暦2005年(平成17年)3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なわなかうねいせき 名和中畝遺跡	とっとりけんさいはくぐん 鳥取県西伯郡 なわちようおおあざなわ 名和町大字名和 あざなかうね 字中畝1083ほか	31387	311	35° 30′ 09″	133° 30′ 29″	20040405 ～ 20041027	9340㎡	一般国道9号(名和淀江道路)の改築
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
名和中畝遺跡	集落	縄文時代早・前・中期		土坑		土器、石器		—
		弥生時代終末期		竪穴住居		土器、石器、鉄器		—
		古墳時代後期		竪穴住居		土器、石器、鉄器		移動式竈が良好な状態で出土
		時期不明		掘立柱建物、竪穴、土坑、溝		土器、石器		—

鳥取県教育文化財団調査報告書 103

一般国道9号（名和淀江道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ

鳥取県西伯郡名和町

なわなかうねいせき
名和中畝遺跡

発行 2005年3月25日

編集 財団法人 鳥取県教育文化財団

埋蔵文化財センター

〒680-0151 鳥取県鳥取市国府町宮下1260番地

電話 (0857) 27-6717

発行者 財団法人 鳥取県教育文化財団

印刷 日ノ丸印刷株式会社